

超特急論破 前編

鳶子

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

創作論破企画「超特急論破」1章〜3章の再録です。

目次

Prologue	1
1章 ロベリアの青は君に微笑む	
（非）日常編1	4
（非）日常編2	7
キャラクター紹介	13
（非）日常編3	21
（非）日常編4	26
非日常編1	30
非日常編2	37
非日常編3	42
非日常編4	45
エピローグ	51
2章 やはりこのコロシアイ生活は間違っている。	
（非）日常編1	53
（非）日常編2	56
（非）日常編3	59
（非）日常編4	66
非日常編1	72
非日常編2	75
非日常編3	80
非日常編4	85
非日常編5	89
3章 地獄の沙汰も愛次第	

非日常編 4	144
非日常編 3	135
非日常編 2	128
非日常編 1	121
(非) 日常編 5	115
(非) 日常編 4	106
(非) 日常編 3	102
(非) 日常編 2	98
(非) 日常編 1	96

P r o l o g u e

? ? ?

身体中に走る鈍い痛みと共に、目を覚ました。

(ここは…?)

真つ暗闇の中で、自分が椅子に座っていることに気づく。朝、いつも通りに家を出て学校に向かっていたはずなのに。

ここはどこだ? 何がどうなっているんだ?

— 様々な疑問が頭の中を一瞬で駆け巡る。首を動かして辺りを見回そうとするが、体が思うように動いてくれない。それは、この一面の暗闇のせいだけじゃないはずだ。

「……………」

ようやく目が慣れてきて視線を下に向けると、鉄製の拘束具のようなもので、手足ががちりと固定されていた。

(なんだ、これ…!?)

その非日常的な光景を見た瞬間、頭の隅にあった嫌な予感は一気に膨れ上がった。

…何かの事件に巻き込まれた? 誘拐? 拉致監禁? これから自分はどうなる?—死ぬ?

脳内に突然現れた死という言葉は、ぞくつと全身に寒気を走らせた。…嫌だ。怖い。死にたくない。僕は一体、どうしたらいいんだ? 頭の中でぐるぐるとはてなマークが回る中、突然誰かの話し声が聞こえてきた。

「……………」

「……………」

誰かに聞かれないよう小声で会話しているのか、内容までは聞き取

ることができない。今話しているのは、自分をここまで連れてきた奴らだろうか。

じつと話し声に耳を澄ませていると、だんだんと薄暗い部屋の奥の方まで、目を凝らせば見えるようになってきた。

そこに見えていたのは――

(天使……?)

…真つ白な天使の石像が、闇の中で仄かな青白い光を放っているように見えた。

それを見たと同時に、突然部屋の中に声が響いた。

「―清く正しく生きよ」

声は繰り返し返し聞こえてくる。

清く正しく生きよ。

清く正しく生きよ。

清く正しく生きよ。

清く正しく生きよ。清く正しく生きよ。清く正しく生きよ。清く

正しく生きよ。清く正しく生きよ。清く正しく生きよ。清く正しく

生きよ。清く正しく生きよ。清く正しく生きよ。清く正しく生きよ。

清く正しく生きよ。清く正しく生きよ。清く正しく生きよ。

(…うるさい。うるさい。清く正しく生きよ、なんて)

「くだらない、よねえ?」

「!」

耳を塞ぐことも出来ず俯いていた僕の耳元で、甘ったるい声が聞こえた。…まるで、僕の気持ちを代弁したような。

途端、先程話していた人の慌ただしい声に続けて、悲鳴のような、断末魔のようなものが聞こえてくる。

一体、何が起きたんだ?僕は助かるのか…?

そんなことを思った次の瞬間、ふわつと甘い、果実のような香りが鼻腔を撫でる。その匂いに誘い込まれるかのように、だんだんと意識

が遠のいていく——
「おやすみ、…良い悪夢を」

1章 ロベリアの青は君に微笑む

(非) 日常編1

? ? ?

「……………さい」

「…き……………さい」

「起きてくださいー！」

「うわあ!!!」

目を開けると、真っ赤な双眸が僕を覗き込んでいた。顔が近すぎて目しか見えない…。

「あの…」

僕がおずおずと声を上げると、その2つの目はすつと遠ざかっていく。

瞳の持ち主は、肩ぐらいの黒髪の人だった。僕と同じ年ぐらいに見えるけど、びっくりするぐらいの美人だな…。

「おはようございます。やっと目を覚ましましたね」

その人はニツコリと笑ってそう言った。てつきり女の人だとばかり思っていたけれど、声変わりしているみたいだから、男の人なんだろう…。それより今、自分がどういう状況にあるのが全く掴めていなかった。

どうやら僕は、暗い教室の中にいるようだ。重たい頭を持ち上げて体を起こす。

「ここは……………」

「ふむ、貴方も覚えていませんか。ボクもここまで辿り着いた記憶がなくて、もしかしたら隣ですやすやと眠っている貴方が何か知っているのではないかと思って起こしてみたんです」

「そ、そうなんだ…とところで君は一体……………」

「ああ、自己紹介がまだでしたね」

男の子はそういえばと言うようにぼん、と手を打った。

「ボクは笑至贄。”超高校級の探偵助手”と巷では呼ばれています」

「えにし、にえくん……?」

「ええ。上から読んでも下から読んでも笑至贄です。好きに呼んでください。ところで、そういう貴方のことをボクは存じ上げていないのですが」

「あ、ごめん！えっと……ぼ、僕は宗形こむぎ。”超高校級の園芸部”……って呼ばれてるよ」

「宗形くんですね。こういう謎の多い時は、1番初めに会った隣人が頼りになる、とも言いますから。不束者ですがよろしくお願いします」

「こ、こちらこそ!」

ペこりとお辞儀をされて、慌てて返す。すごく丁寧な子だなあ……。

「さて……貴方もボクもどうやら同じ状況のようですね。自分の名前や才能は覚えているが、どうしてここにいるのかは思い出せない……」

「そうだね……とりあえず、ここがどこか分からないとちよつと怖いな……」

「それでは、教室の中のめぼしいものをまず探してみたら、他の場所にも行ってみましょうか。1人で外に出るのは危険ですから、貴方が起きてからにしようと思っただけですよ」

笑至くんはそう言うと、教室の中をぐるりと見回す。僕もその視線を追った。薄暗い視界で見える限り、この場所は至って普通の教室のように見える。

「うん。すごいなあ、やっぱり探偵ってこういう状況でもうろたえないんだね……」

「……ボクは探偵ではありませんよ、あくまで助手です。貴方のような方をサポートするのがボクの役目ですから」

(うーん、僕は別に探偵じゃないんだけどなあ……?)

どうやら、どこかずれている男の子みたいだ。僕たちは特に収穫もなく教室の探索を終えて、教室をあとにした。

? ? ?

「ところで気になっていたのでありますが、その手に持っている植木鉢は何の植物ですか？」

教室を出たところで、笑至くんが僕の抱えている小さな茶色の植木鉢を見ながら尋ねた。土の中からちよこんと出てきた淡い緑の双葉が、いつ見ても愛らしい。

「この子ははなちゃん！かわいいだろう？僕が見つけた種から生えたんだけど、新種かもしれないんだ……！」

「新種……ですか」

「興味深いですね」

彼は深く頷くと、すつと目を細めた。

……今のは笑ったんだろうか？常に笑顔が張り付いてるみたいだから、よくわからないけど……

僕達そのまま廊下を歩いていると、突然頭上のスピーカーからチャイム音が鳴り響いた。

「ピンポンパンポーン！オマエラ、全員今すぐ体育館に集合してください！始業式を行います！」

聞こえてきたのは、マイクに近づきすぎたのか、やや音割れしているアニメ声だ。オマエラって、僕たちのことなんだろうか。それともこの場所には、僕ら2人のほかにもまだ誰かいるのかな。

「始業式……？」

「……どういふことかは分かりませんが、今のままでは埒が開きません。行ってみるしかないでしょう」

笑至くんの言葉に従い、僕たちは体育館へ向かった。

(非) 日常編2

? ? ?

体育館の重たい横開きの扉を開けると――驚くことに、そこには僕達の他に同年代ぐらいの男の子と女の子がいた。しかもたくさん…全部で14人、だろうか。隣の人と楽しげに談笑している人もいれば、静かに待っている人もいる。

「やつと全員揃ったね!」

そのまま中に入ると、突然壇上から甲高い声が聞こえてきた。どこかで聞き覚えがあると思ったら、頭の中で、あの放送で流れていた声と一致した。

見上げると、変な犬のぬいぐるみのようなものが演台の上に立っている。

「ぬ、ぬいぐるみがしゃべってる!? すげー!!」

僕の横にいたピンクの髪の子が興奮したように声を上げる。

「こらー!ぬいぐるみじゃない、ボクはこの光清(こうせい)学園の学園長、モノケンだぞ!!」

ぬいぐるみ…モノケンは気を悪くしたのか、やや怒り気味の口調だ。

「学園長…?ボクたちはその光清学園、という学園の生徒にでもなったのでしょうか」

笑至くんが、壇上で自慢げに腕組みをして胸を張るモノケンに尋ねた。モノケンはその姿勢のまま鷹揚に頷く。

「その通りだよ!オマエら16人は、この光清学園の生徒なんだ!オマエらにはこれから、この学園で生活してもらおうよ!」

「なんだと…!?!」

「こんな学園の生徒になった覚えはないんだけどなあ…」

「ど、どういうことですか…?」

その場から一斉にどよめきが起こる。するとモノケンが大きく手を叩いた。

「静粛にーしかも、これからオマエラにしてもらうのはただの学園生活じゃないよ」

モノケンはそのぬいぐるみのようなチャーミングな外見からは想像もつかないほど、不敵な笑みを浮かべた。

「これからオマエラにしてもらうのは…コロシアイ学園生活さ！」

その一言で、場の空気が一瞬で凍りついた。

「こ、殺し合い…?!？」

「…冗談だろ」

「え?…どういうこと?。(。▽。)」

一瞬の沈黙の後、再び体育館の中は騒然となった。怯えた顔をしている人、冗談はやめろと怒ったような顔の人、動揺するどころかむしろ少し楽しそうにも見える人。

…僕自身も、まだ状況が飲み込めていない。

「…それで?…それが冗談じゃないっていう証拠はあんの?」

中でも冷静そうに見える白髪の男の子がステージに向かって声を上げた。

「証拠?…オマエラの体で実証してもいいんだけどさー、ボクは学園長として自分たちの生徒を傷つけることは心が痛むんだ…」

モノケンは見るからに悲しそうな顔で言う。一応学園長としての自負はあるらしい。

「だから、オマエラにはこれで理解してもらおうよー」

そのモノケンの言葉を合図に、ステージ裏から突然、のっぺらぼうのマネキンが4つ現れた。ちゃんと制服のようなものを着ている。

「…!?!」

唐突な展開についていけてない僕達を尻目に、モノケンは楽しそうに叫ぶ。

「それでは、べっとうぞー」

すると、次の瞬間。

「「え」「」」

4体のマネキンは、ステージの上から落ちてきた無数の槍に貫かれ、八つ裂きになった。

マネキンには趣味の悪いことに血に似せた液体が詰まっていたらしく、ピンク色の汁がマネキン達から勢いよく噴き出し、壇上の下のこちらにまで鮮やかな色の飛沫が飛んできた。

「きゃあああっ!!!」

女の子たちが悲鳴をあげて、後ずさりする様子をモノケンはお腹を抱えてゲラゲラと笑いながら見ている。

「……………ひどい。最低だ。」

「校則を破ると、オマエラもこうなるからねー」

モノケンはひとしきり笑いながらそう言った。

「…その校則はどこに書いてあるんですか?」

体育館全体がパニック状態になる中、笑至くんの冷静な声で僕は我に返った。

「いい質問だね、笑至くん!」

「校則や学校の地図は、今から配る電子生徒手帳に全部載ってるよ! オマエラ1人1人の恥ずかしいアレコレが載った生徒情報なんかもあるよ、なくさないようにしてね!」

そうやってモノケンは、またどこからともなく現れた段ボール箱の中から、派手な色のタブレットを取り出して見せびらかした。

「あ、そうそう! コロシアイのルールについて教えないとだったね!」
場の空気がようやく落ち着いたら頃、モノケンがそう言い出した。
さっきの混乱で、コロシアイのことなんて忘れてたのに…。

再び周りを見回すと、泣いている女の子にそれを慰める男の子、モノケンをじっと見つめる子達。

こんな人達と、僕はこれからコロシアイをする…………? そんなこと、できるはずがない。

「……………こんなの、おかしいよ!」

僕が思わずそう呟くと、思いがけず、笑至くんがそれに答えてくれた。

「このおかしい状況を打破するためにも、今からモノケンが話すルールを把握しなければいけませんよ。相手のルールに則った上で反抗しなければ、ボクらもあのマネキンのようになりますから」

「……うん」

僕らがそうして話していると、いつの間にかみんなも聞いていたらしく、モノケンの話すルールに耳を傾けようとしていた。モノケンは満足気にうんうんと頷く。

「それじゃあ、ルールを説明するね！」

「ルールは簡単だよ。オマエラのうち誰か1人が仲間を殺したら、学級裁判が始まる。その裁判で、オマエラの中の誰が殺したのかを突き止めるんだ。そして被害者であるシロを殺したクロを見つけることが出来れば、オマエラの勝利となり、クロはおしおきされるよ」

「…もし、見つけれなかった時は？」

遠くでぼんやりと状況を見守っていたパティシエのような服を着た男の子が、ふとモノケンに聞いた。

「見つけれなかった場合は、間違えたオマエラは全員処刑、クロは晴れてこの学園を卒業となります！」

「全員処刑…!?!」

みんなの表情に再び緊張が走る。

「そう、全員首チョンパだよ。だからくれぐれも間違えないように頑張ってねー！あ、それと、コロシアイが起こらないとオマエラは永遠にこの学園から出られないよ。食料にも限りがあるし、知らないヤツラとの飢え死を選ぶか、赤の他人を殺して卒業を選ぶかしてね！」

「それじゃあオマエラ、始業式は以上、楽しい楽しいコロシアイ学園生活をエンジョイしてくださいー！」

そういうとモノケンはマジックか、あるいは忍者のようにはっと消えていなくなった。

それと共に張り詰めていた場の空気がふっと緩んだ。

その場にへたり込む人、モノケンの行方を探してステージを歩き回る人、さっさと体育館を出ていく人。

僕はどうすることもできず、その場に立ち尽くしていた。

いきなりこんなところに連れてこられて、ロシアイなんて言われて一体どうすればいいかなんてわからないよ……。

「宗形くん、大丈夫ですか？」

途方に暮れていた僕に、笑至くんが声をかけてくれた。でも、これがロシアイなら、笑至くんも……

「大丈夫。ボクは貴方の味方ですよ」

「……え？今僕、何も言ってるな……」

「表情で言いたい言ってることはわかります。探偵、助手、ですよ」

助手というところにはつきりとアクセントをつけたみたいなお口ぶりに、思わず苦笑してしまう。

「あくまで、助手を強調するんだね……」

「当たり前です。貴方にはこれから探偵として活躍してもらおうんですよ、ボクがサポートします」

「で、でも僕は探偵なんてやったことないよ……？」

「探偵泣かせの異名を持つボクがサポートするので間違いありませんよ」

「そ、そっか……」

探偵泣かせって、それは助手として正しいんだろうか。それにしてもすごい自信だな……。

「それでは、探索に戻りましょう。敵を知り、己を知れば百戦危うからずと言いますから。それに、ここのメンバーのことも把握しておかなければいけませんしね」

「……わ、わかった！」

笑至くんの勢いに押されて、思わず頷く。彼はまた目をすっと細めた。今度のはしつかり、笑ってるってわかった。

「……これだけ大掛かりなことをするので、この中に黒幕、もし

くは内通者がいるはずですよ」

「え？何か言った…？」

笑至くんが小さい声で何か呟いたみたいだけど、聞き取れなかった。彼はいいえ、と言い、僕の背中を優しく押す。

「…さあ、ここからが出番ですよ、探偵さん。」

僕は、一歩前に踏み出した。

キャラクター紹介

??光清学園生徒名簿??

? 出席番号1番?

”超高校級の軍人” 揚羽 凰玄（アゲハ コウゲン）

「ん〜、あなた達カワイイわね〜♪」

お金持ちの名家の息子。小さい頃から訓練を受け、今や部隊の隊長を引き受けるほどの腕前に。戦闘では日本刀を扱うのが得意。軍隊にはかわいい部下がいるそう。切ヶ谷とはいとこで、彼女を目にかけており仲が良い。

物腰柔らかで女子力の高い好青年だが、根焼が言うには「実は裏がある」らしい…。

height: 184 cm / weight: 68 kg

like: 部下、お菓子作り / hate: 肌荒れ、脂っこいもの

? 出席番号2番?

”超高校級の幸運” 荒川 幸（アラカワ サチ）

「近づかないで…ください…私の不幸が、あなたに伝染しますから…」

幸運という才能とは裏腹に、ビビりで卑屈な少女。かなりの人見知りで、人とはあまり会話しようとせず、声もとても小さい。何をしても謝るくせがあり、口癖は「ごめんなさい」。

自分のことを不幸な人間だと感じており、自分が近づくと他人に不幸が伝染すると思い込んでいるため、他人とは距離を取っている。

height: 159 cm / weight: 40 kg

like: 四つ葉のクローバー / hate: 不幸なこと、自分

? 出席番号3番?

”超高校級のギャグ漫画家” 陰崎 ひめか（インザキ ヒメカ）

「あ、あのね、ひめか、陽キャパリピになるのが夢なの…。叶わないだろうけど…。」

年齢を偽って自分の漫画をコンテストに応募したところ、3回中3回最優秀賞を受賞し、高校生になったら連載を受け持つはずだった少女。

陽キャになりたくてスカートを短くしたり白カーディガンを着たりといろいろ挑戦したが、自分の陰キャオーラで無意味と化したそう。時折情緒不安定になる、面倒なオタク女子。

height:163cm/weight:53kg

like:黒髪ツリ目相棒キャラ、ピンク髪ロリ、顔が良い子/hate:野菜

?出席番号4番?

”超高校級の探偵助手” 笑至 贄(エニシ ニエ)
「ワトソンとして助言しましょう」

探偵事務所でアルバイトをしている少年。名目は助手だが数々の難事件を解決しており、巷では「探偵泣かせ」との異名を持つ。

少々世間ズレしている部分はあるが、優しさと思慮深さがあり、常に微笑んでいて怒りや焦りを他人に見せようとしない。宗形と1番初めに出会い、行動を共にして彼を一人前の探偵として成長させようとしている。

height:172cm/weight:62kg

like:探偵小説/hate:陰謀論

?出席番号5番?

”超高校級の解体者” 片原 桃(カタハラ モモ)

「お肉が食べたくなったら言ってください！捌くのも料理も得意っす！」

天真爛漫、猪突猛進な少女。家は屠畜場で家業を手伝っていたら気づくところになっていたそう。少し人と感性がズレているところがあつたり、地元では気味悪がられて誰も近づいてこないため、常に友達が欲しいと思って空回りすることも。

自分なりに動物の命を大切に思っているので、いただきますをしない人間には容赦しない。今まで解体したことがあるのは家畜のみだが、愛玩動物や人間の解体にも、興味があるとかないとか：？

height: 148cm / weight: 38kg

like: 楽しいこと / hate: 暗いところ

? 出席番号6番?

”超高校級の薙刀士” 切ヶ谷 小町 (キリガヤ コマチ)

「よいしょー→牛乳寒天61個目オナシヤス！」

代々薙刀を家業としてきた切ヶ谷の中でも、歴代最高の才能を発揮する少女。幼少期は男として育てるといふ家のしきたりの影響で、自分のことを「ボク」と言う。揚羽とはいところで、一緒にトレーニングをする仲。

刀を持たない時はどこか抜けており、基本的に人の話を聞いていない。馬鹿力で高機動、そして超がつくほどの大食い。しかし、薙刀を持つと人が変わり、無口・無表情で刃のような鋭い眼差しになる。

height: 166cm / weight: 48kg

like: 牛乳寒天 / hate: こんにゃく

? 出席番号7番?

”超高校級の魔法少女” 芥原芥生 (クグハラ アザミ)

「ややつ?!これは事件ですよー！」

自称”魔法少女”。空を飛べたりするが、実は魔法は全てペットの「ピーちゃん」(魔法のシャウティングチキン)が使っている。

特技はボランティア活動で、毎日の学園内のパトロールは欠かせな

い。寄宿舎の自室では得意のぬかづけを仕込んでおり、おばあちゃん
の知恵袋のようなものを発揮する一面も。

height: 145 cm / weight: 35 kg

like: にわとり、地球 / hate: 争い、いちご、鶏肉

? 出席番号 8 番?

” 超高校級のシヨコラティエ ” 佐島 俊雄 (サトウ トシオ)

「随分顔色が悪いね、糖分が足りていないのかもしれない。僕がお菓
子を作ってあげる」

シヨコラティエとして、日々至高のチョコレートを作り上げる少
年。フランスへの留学経験があり、フランス語が堪能。「甘いものが
大好きな可愛いシヨコラティエ」として売っているが、実はコーヒー
やビターチョコレートが大好物。

人懐っこい性格で誰に対しても優しいが、裏を返せば人に対する興
味や関心が極度に薄い。死んだ者に対して敬意を払ったり供養して
あげようとするが、それは「化けて出られたら嫌だから」という理由
だった。

height: 161 cm / weight: 52 kg

like: コーヒー / hate: 幽霊

? 出席番号 9 番?

” 超高校級の外交官 ” ステイヴン・J・ハリス

「僕達は賛成だが、メアリーは『やめた方がいい』と言っているぞ！」

目立ちたがり屋で声の大きいアメリカン。アメコミが大好きで、幼
い頃からヒーローに憧れている。外交官として日本に来日し、ジャパ
ニーズカルチャーに興味津々だが、ポテトのサイズが小さいのだけは
許せないそう。

頭の中にたくさんの思想が住んでいると思っ込んでおり、時々彼ら
が「意見」を出してくると主張する。特に親友のジョンという人格と

は長い付き合いだそうで、彼の話をみんなによくしている。

height:176cm／weight:75kg

like:ジャンクフード、ヒーロー／hate:イカの刺身

? 出席番号10番?

”超高校級の特殊清掃員” 掃気 喪恋(ソウキ モコ)

「ホットケーキ…くまさん……」

妹気質で人見知りな少女。口下手らしく、ほとんど単語でしか喋らない。話し方はのんびりしているが行動は早い。かなり影が薄く、気づいたらそこにいる、ということもしばしば。

方向音痴で生活力が皆無。字が下手。そのふわふわとした頼りなさから、月詠や佐島にお世話されていることが多い。常に「しよりくん」という死体処理班の謎の生き物と行動を共にしている。

height:145cm／weight:38kg

like:くまさんのホットケーキ／hate:注射

? 出席番号11番?

”超高校級のベビーシッター” 月詠 澄輝(ツクヨミ スピカ)

「よしよし、何かあったの?おにーさんに言っただけじゃん」

ベビーシッターのアルバイトをしている青年。自分より小さな子を見ると、性別に関わらずあやしくなってしまうらしい。

本当は力持ちで運動は得意な方だが、外見から人妻のようだと言われてしまうのが悩み。下ネタが大の苦手と言われると真っ赤になる。そのため妄崎をかなり不得手としており、彼女から逃げ回っているところを多く目撃される。

height:178cm／weight:68kg

like:小さい子、家事全般／hate:下ネタ

? 出席番号12番?

”超高校級の弁護士” 照翠 法典（テミス ヤスノリ）
「貴様と宜しくする気は無いが：気軽に”先生”と呼ぶことを許可しよう」

高校生ながらも政界や裏の世界の大物の顧問法律家として活動している青年。既に史上最年少で司法試験に合格した経歴を持っているが、法律上の問題でまだ弁護士とは名乗れないので、表向きにはとある敏腕弁護士の弁護士秘書として弁護士事務所に籍を置いている。独善的で高圧的、本来倫理が問うはずの善悪でさえも裁判の勝敗で決めてしまう、絶対勝利至上主義者。依頼の遂行と勝利のためなら手段を選ばず、時には違法行為も辞さない。この”最悪”とも言える彼をフォローできるとしたら、彼が負けたことは、彼の宣言通り、ただの一度も無いという点だけである。

height:182cm/weight:68kg
like:金、アナログゲーム/hate:身の程知らず

?出席番号13番?

”超高校級の”???” 根焼 夢乃（ネヤケ ムノ）
「才能?しらない。忘れちゃった」

容姿、勉強、身体能力、話術、直感、何から何までパーフェクトに生まれてきた少年。人生をイージーモードと称し舐めてかかっている。どんな分野に置いても自分は勝ち組だと思っており、大抵の事は直感でなんでもできてしまう。ちなみにヤリチン。男は抱けない。「え?通達?とりあえず学校行けばいいんでしょ?」というノリで学校からの通達を捨てたため、自らの才能は覚えていない。やたらと揚羽に突つかかっているが、本人としてはただの気まぐれ、らしい。

height:181cm/weight:68kg
like:ショートケーキ、女/hate:身内以外の手作り料理

?出席番号14番?

”超高校級のぬいぐるみデザイナー” 野々熊 ひろ（ノノグマ
ヒロ）

「服が破けたあ？繕ってやるからこっち来い！」

基本無気力だが、裁縫とゲームの話をする時だけはアツくなる少女。そのかわいらしい見た目に反して言動はやや荒めだが、裁縫の腕は確か。

お姉さんポジションに憧れているため、人から頼られるのが好き。そのため、ベビースイッチターである月詠に憧れを抱いており、自分の”師匠”と呼び慕っている。

height:155cm/weight:41kg

like:可愛いもの、ゲーム/hate:面倒くさいこと

?出席番号15番?

”超高校級の園芸部” 宗形 こむぎ（ムナカタ コムギ）

「わーその植物は毒があるから触っちゃだめだよ！この子も変に触られたら痛いだろうし！」

自分のことを普通で無難で目立たず、背が高い以外は特徴がないと思っている少年。おばあちゃんが花が好きだったことから、園芸の道に興味を持つように。庭を荒らす猫のことをあまり好んでいない。

高校生にして植物関係の資格検定をあらかじめ取り尽くしてしまったことから、超高校級の称号を得ることになった。笑至との出会いを初め、様々なメンバーとの交流の中で、少しずつ成長していく。

height:186cm/weight:65kg

like:植物/hate:ネコ

?出席番号16番?

”超高校級の官能小説家” 妄崎 しなぐ（モウザキ シナグ）

「大丈夫？もしかして興奮した？勃っちゃった??」

大人っぽく、フェミニンな雰囲気を感じさせる少女。しかしその正体は、リアリティーの高さと読者を感動（いろいろな意味で）させるストーリーで官能小説界で絶大な人気を誇る官能小説家「妄想」である。

性格を一言で表すと、下ネタ生成機。どんな時でもどんな場所でも下ネタを言って他人をからかうという、女子とは思えない行動ぶり。女子の体にべたべたと触ったり、男子には際どいネタをぶつけたりと、周りへのセクハラ行為もしばしば見受けられる。

height:173cm/weight:55kg

like:下ネタ、エロくてかわいい子/hate:面白くないこと

??光清学園校内マップ??

全体図

本校舎1階・2階

本校舎3階・4階

管理棟

別館・プール

寄宿舎

(非) 日常編3

? ? ?

全員との自己紹介を終え、探索を終えた僕らは校舎の外に出てみたが、校庭の先には高さは何メートルもあるコンクリートの壁に有刺鉄線が張り巡らされており、この学園の脱出が不可能であることを改めて感じさせられた…。

そして僕たちに、新たな問題が発生する。

「おなかすいた………」

? ? ?

《1章イベント ドキドキ!?クッキング》

? ? ?

空腹という深刻な危機に直面した僕と笑至くんは、電子生徒手帳のマップを頼りに本校舎の食堂へと向かった。

そこには人数分の16個の椅子が並べられ、食事用の大きな長テーブルが1つ置かれていた。どうやら、ここでみんなで食事を摂るということらしい。

部屋の奥には厨房があり、備え付きの大きな冷蔵庫があった。開くと、大量の食料が所狭しとぎゅうぎゅうに詰め込まれている。

「この学園から出られるのがいつかは分かりませんが、慎重に消費しなければいけませんね」

「そうだね。それにしても、お腹すいたな……」

「宗形くん、貴方、料理は出来ますか」

「いや、調理実習で作ったものぐらいは作れるかもしれないけど、あんまり自信ないなあ…失敗しちゃったら貴重な食料が無駄になっちゃうし」

「そうですか。ボクも料理の腕前は同じぐらいです」

そう言いながら、笑至くんは冷蔵庫を閉じてふう、と息を吐いた。

「…ですので、できる人に声をかけてみんなで何か作りましょうか。親睦も深まりますしね」

「そうだね！家庭的な子も多いし、きつとおいしい料理ができるよ」

こうして僕たちは、料理のできそうな人たちや料理に興味のある人に声をかけて集めて、厨房へ向かった！

? ? ?

厨房に集まったのは、何かしら作れると言ってくれた、月詠くん、佐島くん、片原さんに加え、手伝いたいと言ってくれた野々熊さん、スティーヴンちゃんと僕達を含めた7人だった。

「それで、何を作ればいいのかなあ？普通の料理だったらだいたい作れるよ」

月詠くんはいつになく楽しそうだ。ベビーシッターの才能を持つ彼だから、きつと家庭的なこととは一通りできるんだろうな…。

「肉だ、肉！精力をつけるために肉料理を作ろう！」

「おおっ！桃も肉料理なら作れるっすよ！」

スティーヴンちゃんと片原さんは、冷凍庫にあった巨大な生肉の塊を片手にわいわいとはしゃいでいる。

佐島くんは冷蔵庫からチョコレートを取り出していた。

「…そのチョコレートは佐島くんの？」

僕が尋ねると彼はにっこりと笑って頷いた。

「そう。この学園に来てから作ったやつだよ。そろそろ固まった頃だと思って」

「そうなんだ…」

(学園に来てまずチョコレートを作るって、どういう思考回路なんだろう…)

結局、各々が作りたいものを作り始め、野々熊さんは月詠くん、スティーヴンくんは片原さんの手伝いをしていた。一方僕達はどうと、手持ち無沙汰になってしまい、佐島くんのチョコレートの味見を

していた。

「…おいしいよ、このチョコレート、今まで食べた中で一番おいしい
……!!」

佐島くんのチョコレートはひと口食べただけで明らかに市販のものとは違う美味しさがあつた。甘すぎず苦すぎず、舌の上ですつとなめらかに消えていく。何個でも食べたくなるような口当たりの良さだ…!

「そう言つて貰えると嬉しいな。この味もオススメだよ」

僕は佐島くんに言われるがままに別の味のチョコレートも食べ進め、すっかり彼のチョコの虜になつてしまった…。

一方笑至くんはというと、僕が食べている間チョコを手にしたまま、じつとそれを見つめていた。

「笑至くんは食べないの？佐島くんのチョコレート、すつごくおいしいよ」

「…ああ、いただきますよ。見た目の美しさも素晴らしいな、と思つていただけです」

そう言つて笑至くんはチューイングガムを口に放り込むかのような気軽さで、佐島くんのチョコを口にした。

「………」

「お味はどう？」

佐島くんが尋ねると、笑至くんは表情をひとつも変えず、真顔で言い放つた。

「貴方のチョコレート、八方美人みたいな味がしますね」

「………はっ」

笑至くんの思いがけない一言に、僕も佐島くんも二の句が告げなくなる。

「料理には作る人の気持ちか籠つていると言いますが…浅い味ですね。今度は是非とも、貴方の本心を味わつてみたいと思えますよ」

黙り込んでしまっている僕達をよそに、彼は何の感動もなさそうにチョコレートを飲み込むと、淡々と感想を告げる。

「…それ、どういう」

佐島くんが一瞬表情をゆがめたその時、

「ああああああーっっっ
!!!!!!」

突然、コンロの方から2人分の叫び声が上がった。

僕達が後ろを振り返ると―黒焦げになったフライパンと、炭になった牛肉の塊と、その前に立ち尽くしている片原さんとステイヴンくんがいた。

「2人ともけがはない!?大丈夫!?」

月詠くんが慌てて駆け寄っていくが、2人は放心状態でその場に佇んでいる。

うーん、何があつたのかはだいたい想像がついちやうな……。

騒ぎを聞き付けた他のメンバーも続々と集まってきて、黒焦げになった肉は明日のカレーの具材にすることにし、結局僕達は月詠くんと野々熊さんが作ったオムライスを食べることになったのだった。

ステイヴンくんはお肉を無駄にしてしまったことに余程責任を感じているらしく、体格の良い身体を縮こませてしよぼしよぼとオムライスを口にかけている。

「桃君、すまなかつた…僕達が目を離れたばかりに…」

「なんのなんの!この苦難を共に乗り越えたステイヴンは、もう桃の親友つすよ!」

「僕達が親友?!いい、いいのか……!?」

ステイヴンくんは目を輝かせた。片原さんの目も同じぐらいきらきらに輝いている。

「もちろん!えへへ、桃も友達ができて嬉しいし…次こそリベンジしておいしい肉料理を作るつすよ」

「Sure!今度からは気をつけて料理をしよう…ああでも、フランベには昔から憧れがあるし、次こそ挑戦してみようか…」

「フランベ!かっこいいよね、桃も憧れつす!やってみたい!」

…また黒焦げ肉ができあがった時用に、次はシチューの仕込みをしていた方が良さそうだ。

(非) 日常編4

? ? ?

コロシアイ学園生活が始まって3日目の夕方。
みんなとの共同生活は極めて穏やかで、コロシアイなんてまるで始まる気配もなかった。

僕と笑至くんが寄宿舎に戻ろうと、管理棟の廊下を歩いていたその時、

「ぎゃああっ!!し、死んでる………!!!」

荒川さんの叫び声が聞こえた。

? ? ?

《1章イベント 死体が発見されました?》

? ? ?

「死んでる……!?!」

「…上の階です、宗形くん、急ぎましょう!」

荒川さんの声を聞き付け、僕達は急いで階段を駆け上がり、管理棟2階の家庭科室前で彼女の姿を見つけた。

荒川さんは床に力なく座り込んでいた。全身ががたがたと震えていて目からは涙が今にも零れ落ちそうだった。

「荒川さん、大丈夫……!?!」

「あ、あそこに………」

荒川さんの震える指先が示したのは、薄暗い家庭科室の奥だった。

「な、……!?!」

そこには、暗くてよく見えないが、確かにハンガーラックに吊り下がっている、人の形をしたものがあった。

「笑至くん、こ、これって死体……」

「……………」

笑至くんは無言でずかずかと家庭科室の中に入って電気をつける。蛍光灯の眩しさに思わず一瞬目を閉じた後、再び視界が開けると、そこに見えたのは――

ハンガーラックに力なく吊り下がった切ヶ谷さんの姿だった。

「ひいっ!!!」

「き、切ヶ谷さん……?!?!」

動揺する僕たちをよそに、笑至くんはそのまま歩みを止めず切ヶ谷さんの前へと進み、

ほっぺたをぺちぺちと叩いた。

すると、切ヶ谷さんはパチツと目を覚ました。

「……………え?」

「…………ハッ!ボクはどこ?!?ここは誰?!?」

「貴女は切ヶ谷小町さんでここは家庭科室です。ハンガーラックに引っかかっているので今持ち上げます」

「ああ、ありがとう!よいしょー」

平然と繰り広げられる会話に、僕と荒川さんについてはいけない…………。

自分でもわかるほど混乱している。頭の中にはてなマークしか浮かばない。

「…………切ヶ谷さん、えっと…何をするとそうなるの…?」

思いつく質問はそれしか無かった。

「照翠さんにちよつかいを出しすぎて吊るされちゃった!誰も来ないから一晩中ずつとこのままかと思っただよー」

彼女は服に着いたホコリをばんばんと手際よく払いながら、満面の笑みでそう答えた。

「そ、そうだったんだ…………」

照翠くんも、結構シャレにならないことするな…………。

「荒川さん、見つけてくれてありがとう!ボクはキミがいなかったらハンガーラックと一夜を共に過ごすところだったよ」

切ヶ谷さんは、事の顛末についていけず座り込んだままの荒川さんに親しげに声をかけた。

「え、ええ…?!?!私には人に感謝されるようなことは何もしてないです、ごめんなさい…!!!」

荒川さんは慌てたように立ち上がり、ぺこぺこと頭を下げる。

「今日ぐらい、自分の幸運を褒めてあげたらどうですか?」

笑至くんが穏やかな顔でそう言うと、彼女もようやく少しかだけ、笑顔を見せてくれた。僕達は4人で談笑しながら寄宿舎へと戻った…。

? ? ?

切ヶ谷さんの一件から翌日。僕たちは新たに開放された、笑至くんの研究教室の中にいた。探偵事務所のような部屋のレイアウトで、たくさんの資料があちこちに山積みになっている。

「宗形くん、少し留守にしますよ」

「え?な、何かあったの?」

笑至くんの突然の言葉に僕は思わず聞き返したけれど、彼の突飛な行動に意外性を感じることも少なくなつた。大抵は僕と一緒に動いているが、彼は時折こんな風に急にどこかに行くことがある。

「いえ、昨日の切ヶ谷さんの件を受けて、照翠くんに釘を刺しておこうかと。さすがにあれは褒められた行動ではないですからね」

「それなら、僕も一緒に行こうか?」

「それには及びませんよ、少し注意してくるだけです。またどこかで合流しましょう」

笑至くんはそう言うと、さっさと部屋を出て行ってしまった。多少慣れてきたとはいえ、やっぱり彼の行動パターンは掴めないな…。

? ? ?

笑至くんを見送った僕は食堂に行き、たまたまそこに集まっていたメンバーと談笑していた。

その後、しばらくすると笑至くんも食堂にやってきた。なんだか彼の姿を見るとほっと安心する。

「おかえり、笑至くん。どうだった？」

「注意は出来ましたよ。反省はしていない様子でしたが」

「照翠くんって気難しそうだもんね……」

「ええ、彼を説得するのはなかなか一筋縄ではいかなそうですね」

「僕たちはそんな会話をしながら、のんびりと午後のティータイムを楽しんでいた。

そんな時に、その放送は突然始まった。

「ピンポンパンポーン！死体が発見されました！オマエラ、すぐに現場の家庭科室に向かってくださいーい！」

すっかり聞きなれたモノケンの声。だけど内容は、1番聞きたくないものだった。

「死体発見アナウンス……!?!」

「とにかく、家庭科室へ急ぎましょう」

同じく食堂でアナウンスを聞いていた片原さん、ステイヴンくん、荒川さん、佐島くん、掃気さん、野々熊さんと一緒に、僕達は家庭科室へと走った。

「もしかして、また、切ヶ谷さんだったりしないかな……?」

階段を昇る途中、僕がそう言うのと笑至くんは複雑な表情をした。

「…そのぐらい平和な事件ならいいんですけれどね」

息を切らしながらやつとのことと家庭科室へと到着した僕達は、そこで信じられない光景を目にすることになる。

そこにあったのは……”超高校級の弁護士”照翠法典くんの、変わり果てた姿だった。

非日常編1

? ? ?

「照翠、くん……………」

笑至くんが真っ先に倒れている彼に駆け寄り、首筋に手を当てて呼吸を確認する。

「息はあるのか!?!」

ステイヴンくんの必死の叫びに対し、笑至くんはゆっくりと首を横に振った。

「……………亡くなっています」

「そんな……………!!」

「どうして!?!何があっただんだ?!」

あまりに突然の状況に、僕の頭は全く追いついていかない。

この中の誰かが、照翠くんを殺害した?有り得ない。一体何のために、誰が……………?

アナウンスを聞き付けた他のみんなも続々とやってきて、この場の状況に息を呑む。

「ひいつ……………!!」

「うわあ、死んでる……………」

「ち、血……………いっぱい……………出てる……………」

現場の状態を一目見ようと精一杯背伸びをしたり動き回ったりしている子達もいれば、混乱しているのか、それとも何か証拠になるものを探しているのか、部屋の中をうろうろとしている人もいる。

このままじゃ家庭科室はごちゃごちゃになって、何も進まないんじゃないか…。

「落ち着きなさい!!」

そう思った時、笑至くんが混乱する場を一喝した。

「今ここでパニックになって無闇に動き回れば、現場が荒れてより犯人の特定が難しくなります。焦らないでください。死体が苦手な方は無理して見る必要はありません。廊下で待っていて頂いて結構で

す」

「死体が怖い子達はおにーさんが外に連れてくよ」

月詠くんが申し出て、怯えている女の子たちを家庭科室の外へと連れていってくれた。怖がっている様子を見せまいとしていたようだが、彼の手も微かに震えていた……。

再び静寂が訪れた現場に、突然モノケンが現れた。

「おおっとーっいに殺人事件が起こっちゃったねー！うぷぷぷ……」

何か言い返す気力もない僕達は黙って聞いている。

「じゃあ、ここからの捜査について説明するんだけど……」

まあ、特に縛りとかはないよ。電子生徒手帳に死体の詳細情報があるからクロを見つげるために校則の範囲内で各々好きなように動いてねー！裁判が始まる頃にまたアナウンスするから、その時には集まっておかないと2人目、3人目の犠牲者が出ちゃうよ！」

モノケンは心底楽しそうにそう言ってくつくと笑うと、また煙のように消えていった。

「……とりあえず、捜査を始めないことにはどうにもなりませんね」

笑至くんは自分の研究教室で見つけた黒手袋をつけて、遺体の周りの捜査を始めようとしていた。足手まといにしかないかもしれないけど、僕も彼を手伝おう。

2人でそつと照翠くんの遺体に手を合わせ、冥福をお祈りする。照翠くんは初めて会った時からなんとなく近寄り難い雰囲気を持っていて、僕は気後れしてしまっていた。本当はもっと彼と話してみたかったな……。

顔を上げると寂しそうな笑至くんの視線と目が合った。きっと彼も同じような気持ちなんだろう。小さく一呼吸つくと、僕に向けて指示を出してくれる。

「宗形くん、まずは電子生徒手帳を見てもらってもいいですか？」

「わ、わかった！」

僕は電子生徒手帳を開いて、遺体についての情報を笑至くんに見せた。

「なるほど。確かに身体に暴行の箇所が数カ所見られますね。殺される際に抵抗したのでしうか」

笑至くんは照翠くんの遺体を見つめながら考えるような仕草をして、冷静に分析を始めた。

「ああ、そうですね。折角ですし、少し貴方にも捜査の手解きをしておきましょうか」

所在なく笑至くんの視線を追っていた僕のことには気づいたのか、彼は遺体のそばにしゃがみこんで、もう一度さっきのように首元に手を当ててみせた。

「宗形くん、死体を発見した時は、まず呼吸を確かめてください。倒れているだけでは、生死は判断できません」
「なるほど…」

「首元や手首、辺りが妥当でしょうか。軽い脳震盪を起こして気絶しているだけだったり、応急手当をすれば助かる程度の怪我という場合もあります。倒れているからといって勝手に亡くなっていると判断してしまい、手当てが遅れるという最悪のパターンを避けるためにも、必ず脈拍を測るようになしてください」

「うん！わかったよ」

そう言われなければ、僕は方が一倒れている人を見つけたとしても、きつとおろおろしてしまうだけだっただろう。こういう状況だけじゃなく、日常生活に戻った時にもためになる話だ…。

「あ、あのう……」

その時、背後から陰崎さんがおずおずと声をかけてきた。

「ひ、ひめか、第1発見者、つてやつなんだけど……何かお手伝いできることかあるかな……？」

「貴方がそうでしたか。そうですね、いろいろとお聞きしたいことはありません」

「えっと、捜査とかよくわかんないけど大丈夫……？」

陰崎さんの不安げな表情を安心させるかのように、笑至くんが優し

く微笑む。

「ええ。ボクが質問することに答えてもらうだけですから、安心してください」

「わ、わかった…！」

彼女は少しほっとしたようにこくこくと頷いた。笑至くんがポケットから小さなメモ用紙とボールペンを取り出す。いつの間になんかものを用意していたんだろう。やっぱり準備がいいな…。

「まず、貴女が遺体を見つけた時の状況を教えてください」

「今の状況とほぼ同じだよ。ひめかはもしかしたら家庭科室に、その、アレがあるかなって思ってたんだけど……」

「アレ、とは？」

笑至くんが首を傾げる。陰崎さんはぎくりと肩を震わせた。―何か言いたくないことなんだろうか？

「……ええと、その、コスプレ衣装、があるかなって……」

彼女は恥ずかしそうに目を逸らしながら答えた。ちよっぴり微笑ましい。なるほど、確かに人には言いづらいかもしれないな…。

「そうですか」

笑至くんはあっさり頷く。陰崎さんは意外そうな表情を見せる。

「え…ひ、引いたりしないの？ひめかみたいなのがそういうのを見るとか…」

「人の趣向に口出しする立場ではありませんので、そこは別に構いませんよ。それで、貴女はその後、遺体を動かしたりしましたか？」

「してない！ひめかが見つけてからあのアナウンスが鳴って、びつくりして逃げたから…」

ぶんぶんと首を横に振りながら陰崎さんは答えた。だから僕たちが行った時に現場にいなかったのか。

「確か今回の死体アナウンスは、クロ以外の人物が死体を発見した時に鳴ると生徒手帳に書いてありましたからね。状況によっては変わるというのも追記されていましたが」

「じゃあ、陰崎さんが第一発見者で間違いない、ってことだね」

「そうなりますね。陰崎さんもこれから捜査を手伝ってもらってもい

「いのですか？」

「ひゃ、ひゃいっ！お役に立てるかはわからないけど、ひめか頑張りゆよ…あ、嘩んだ……………」

「ありがとうございます。ボクが宗形くんの助手なら、さしずめ陰崎さんはボクの助手と言った所でしようか」

「え…！そんなにいいポジもらっちゃっていいの…!？」

「これまでびくびくとしていたように見えた陰崎さんの表情が、途端にぱつと輝く。」

「ええ。助手の助手として、ボクが直々に捜査の仕方をお教えしますよ」

「な、なんたる光栄…………!!」

(助手の助手って、嬉しいのかな…………?)

僕は思わず首を傾げてしまった…。

その後、僕たちと陰崎さんで周りの人に聞き込みをしたり、家庭科室内の捜査をしているうちに、再びアナウンスが流れてきた。

「ピンポンパンポーン！捜査終了です、オマエラ全員、別館前に集合してくださいさーい！」

「……………ここまでのようですね。みなさん、引き上げて別館へ向かいましょう」

笑至くんの声掛けを聞き、その場にいたみんなが緊張した面持ちで別館へと向かった。

? ? ?

別館前に着くと、モノケンが腕組みをして僕たちを待ち構えていた。幸いなことに、誰もここに着いていない人はいないみたいだ——照翠くんを除けば。

「全員揃ってるね！じゃあ、これからオマエラを裁判場に連れてくよ！」

そう言うとモノケンは仰々しく別館の扉を開き、鍵のかかっていたブレイカーの扉を開けて、主電源の横にあった赤いボタンを押した。

ゴゴゴゴゴ………

すると、別館の壁が轟音を立てて奥へと動き：巨大な、鉄製のエレベーターが出現した。ぷしゅう、という空気の抜ける音を立てて扉がゆっくりと横に開く。

「壁が動いた…!?!」

「ややつ?!? 忍者屋敷みたいですよ!」

その様子を見ていたみんなが驚いた様子でどよめく。

「これに乗って、裁判場に向かってね!」

言われるがままに、僕達はエレベーターへと乗り込んだ。モノケンは全員が乗るのを確認すると去っていった。最後に乗った妄崎さんが「閉」のボタンを押すと、別館の景色が閉ざされ、エレベーターがゆっくりとしたスピードで動き始めた。

エレベーターの中は、最初にコロシアイの説明を聞いていた時のような神妙な空気で満ちていた。何人かのひそひそ話が聞こえる。

僕らに乗せたエレベーターは重たい初動の後はスムーズに下降していき、あのエレベーター特有の耳がキーンとする感覚がした。

僕の頭の中は不安でいっぱいだった。今一緒に乗っている人達の中に、きつと照翠くんを殺したクロがいるんだ……。

エレベーターはまだ下降を続ける。階数のボタンはなかったけど、目的地は随分下にあるみたいだ。静寂がたまらくなって、僕は笑至くんに小さく声をかけた。

「いよいよ、裁判が始まるんだね…!」

「ボクが助手として宗形くんをサポートしますから安心して下さい」

「笑至くんは探偵役、みたいなのはやらないの…?」

これまでずっと疑問に思っていたことを聞いてみる。捜査中もすごく頼りになったし、探偵泣かせだなんて異名を持つなら、いつそのこと”超高校級の探偵”になってしまえばいいのに。

「ボクはそこまでの器ではありませんから」

彼はそう言って苦笑いをした。笑至くんの思う自分に足りていないものって、一体何なんだろう。僕には見当もつかない。

「ただ、ボクは超高校級の探偵助手として、貴方を立派な探偵に成長させたいんです」

そして僕の方をまつすぐ見て、笑至くんはそう言葉を続けた。

笑至くんはこう言ってくれているけど、僕に探偵役なんて本当に務まるのかなあ……。僕みたいな普通の高校生が彼の期待に応えられるのか、正直まだ分からない。

永遠のように感じられた長い時間の後、エレベーターは静かに止まって、再び扉が開いた。

そこは大きな、裁判場のようなホールだった。

——いよいよこれから、照翠くんを殺したクロを見つける学級裁判が始まるんだ。

不安と緊張の中、僕たちはゆっくりと裁判場へと足を踏み入れた。

非日常編2

? ? ?

「それじゃあ、改めてルール確認だよ。今回の裁判では、照翠クンを殺したクロを見つけてね。議論の後、投票でクロを決めて、合つてたらクロ1人がおしおき、間違えたらクロ以外が全員おしおきで、クロは晴れて卒業だよ!」

裁判開始の合図と共に、モノケンがもう一度ルール説明を行う。

「それでは、議論を始めてくださーい!」

「始めろって言われても、何を話せばいいのかしらね…小町、あたし怖いわ〜!」

揚羽くんが体を両腕で抱え、大きさに震える仕草をする。本当に怖がつているのか、みんなの緊張を和ませようとしてくれているのか分からないけど、そのいつも通りの振る舞いに安心感が湧く。

対する切ヶ谷さんというと、普段とは違い、見たこともない真剣な表情で腕組みをして考え込んでいた。

「凰玄…ボクは大事なことに気づいてしまったみたいだ…」

その一言で、みんなの視線が一気に切ヶ谷さんに集まる。

切ヶ谷さんは堂々と右拳を突き上げ、びしっと天井を指さした。

「犯人は…この中にいるウ!」

「……………」

「…それはみんな知ってるわよ、小町…」

「アレ? そうなの? (。▽。)」

呆れたような、どこかほっとしたような雰囲気裁判場に流れた。場を引き締めるように一つ咳払いをして、笑至くんが話し出す。

「時間もそんなにないでしょう。宗形くん、まずは各々アリバイを確認して、照翠くんが最後に誰といたのか、そして殺害された時間にアリバイのない人物を見つけ出しましょう」

「わ、わかった。死体アナウンスが鳴ったのが午後4時だから……」
「ひめかが見つけたのが、その時間だよ」

陰崎さんが遠慮がちに声を上げた。笑至くんが頷いて付け加える。
「血の乾き具合などを調べてみましたが、推定するに、午後3時半から4時ぐらいの間に照翠くんは殺害されたのではないでしょうか」

僕は死体アナウンスが鳴る少し前の食堂を思い浮かべた。テーブルで何人かと今日の夕食なんかの話をしていた時だ。

「その時間に食堂にいなかったのは…揚羽くん、切ヶ谷さん、芥原さん、月詠くん、妄崎さん、根焼くんの6人かな？」

「ボクも4時ギリギリに食堂に着いたので、一応含んでおいてください」

「わ、わかった…！」

僕は頷いてみんなに向けて話し出す。緊張で声がひっくり返りそうだ…。

「ええっと、それじゃあその時間に1人ずつ何をしてたのか教えてもらっていいかな？揚羽くんから時計回りの順で」

揚羽くんがいいわよ、と返事をしてみんなが順番に話し始めた。

「あたしは小町と体育館でトレーニングしてたワ。身体が鈍っちゃってたから2人で腕立て腹筋背筋100回ずつぐらいね」

「くぐはらは校内をパトロールして、困っている人を探してたですよ！でもピーちゃんと回っているのでアライバイは成立してるはずですよー！」

（えっと、鳥ってアライバイを証明できるのかな…？）

「私は澄輝くんを追いかけ回してたよアレコレ楽しいことをするために…♡」

「…あんまり詳しくは聞かないで欲しいけど、おにーさんはしなぐちゃんに校内中を追いかけ回されてたよ……」

（この2人、何があったんだろう…）

「ボクはテキトーに学校の中をブラついてただけだけど。ま、もしかしたら犯人かもねー」

「…根焼くん、冗談はよしてよ……」

「ン？冗談じゃないかもよ？」

(うーん、完全に人をからかってる顔だ……)

「ボクは先日切ヶ谷さんをハンガーラックに吊るした照翠くんにお灸を据えるために、彼の元に行つて軽くお説教してきました。貴方達の話聞くに、ボクが彼と会つた最後の人物のようですね……なので、3時半頃までは彼は確かに生きていましたよ」

と最後に笑至くんが言った。

「…笑至くんはその後、食堂に来るまでに何をしてたの？」

「ああ、校内に変わったところがないか探していました。なので、アリのバイがないと言えぱそうなりますね」

「なるほど…」

確かに笑至くんならどこかに行つたついでに校内の見回りぐらいはやりそうだ。

すると、月詠くんがふと思ひ出したように言った。

「あれ、しなぐちゃんも途中で1回いなくなつたよね？おにーさん追いかけてこなくなつたからほつとしてたら、しばらくしたらまた走つてきたからびつくりしちゃつた…」

「あ、トイレに行つてたんだよ。…何、詳しく聞きたい？」

「や、やめて！どうせまたえつちな話でしょ！」

月詠くんは顔を真っ赤にして首を横に振つた。妄崎さんはにやにやと笑っている。きつとこういう感じで追いかけてつこをしていたんだろう。

「じゃあ、アリのバイがないのは芥原さん、根焼くん、笑至くん、と一応妄崎さんもだね」

「何？お姉さんのトイレの話、こむぎくんも詳しく聞きたいの？」

「え、遠慮しておきます…」

妄崎さんが興味の対象を変えたのか、ぐるつとこちらを向いた。とても嘘をついているようには見えない。本当に緊張感のない人だ…。「わかりました。それでは次に、殺害方法を確認しましょう。………」

その後もテキパキと殺害方法などの確認を進め、裁判は順調に進んでいった。

(やっぱり笑至くんは探偵助手なだけあってこういう裁判とかは手馴れてるのかな。すごいなあ……)

「ボクは裁判官ではないので、別に裁判には慣れてないですよ」

「また表情で読まれた……!?!」

「…それにしても、弱りましたね。アリバイのない人物は何人かいますが、決定的な証拠がありません」

「確かに……。これだと誰でも犯行が可能になるね」

笑至くんはすっかり考え込んでいる様子だ。さすがの彼でもこの状況の打開は難しいのだろうか。

「後は……何か動機となるものでしょうか。動機があればそれは証拠にもなりうるでしょう」

動機があるといえば…照翠くんと接触した人のうちの誰かだろうか。

「照翠くん何かしらされたのは切ヶ谷さんだけど、アリバイがあるからね……」

「ムッ、ボクは動機があってもなくても、切ヶ谷家の一族として、自分のために殺しなんかしないよ!」

「ご、ごめん!」

切ヶ谷さんが拗ねてしまったようだ…。

なかなか決定的な証拠が出ず、議論が平行線を辿っていた時、これまでずっと静かに裁判の様子を見ていた佐島くんが口を開いた。

「この中で1番照翠くんを殺しやすいのは、最後に照翠くんと一緒にいたつていう笑至くんじゃない?」

「……!?!」

まずありえないと思う、けど…言われてみれば、確かにそうだ。笑至くんはずっと裁判の主導権を握っていたから全く気づかなかったけど、今1番疑われるべきなのは、もしかして彼なんじゃないのか……?」

笑至くんは少しだけ眉をひそめて、正面に立つ佐島くんを見据える。

「確かにボクにはアリバイはありませんが、彼を殺す動機がありませんよ？憶測でつまらないことを言って議論をかき乱すおつもりでしょうか」

「ただ、今考えられる客観的な事実を述べただけだよ。へえ、そうやって噛み付いてくるんだね？」

「……ッ」

笑至くんは一瞬言葉に詰まった。

「ほら、やっぱり何かあるんだね」

佐島くんは言葉を弾ませ、少し見下したように、楽しそうに笑った。それは今まで見た事のない、ぞっとするような冷たい笑顔だった。

佐島くんの一言から裁判の空気は一変して、みんなの疑いは一気に笑至くんに向けられた。

笑至くんは落ち着いた口調で否定するが、アリバイのない彼は怪しいとどんどん一方的に追い詰められていくだけだった…。

彼そんなことをする人じゃないって分かってはいるけれど、その場の雰囲気から、僕も彼を追い詰めざるを得ない。

「笑至くん、本当に君はお灸を据えるためだけに照翠くんの元に行ったの…？」

僕がそう尋ねると、彼はやむをえず、と言った感じでゆっくりと首を横に振った。その動作で、みんなに動揺が走るのがわかる。

「…本当はまだ話すべきではないと思っていたんですが…ここまで来たらもう話すしかありませんね」

「ここで引き下がる訳には行きません。ボクは犯人ではない。ここでボクをクロにすれば、ボクも含めた全員が殺されてしまう。それだけは、避けなければいけないんです」

彼は一度ゆっくりと瞬きをすると、再び僕を見つめる。それまで僕に向けられていた優しい目が、厳しいものに変わっていた。笑至くんの鋭い視線が、僕を見据えて射抜く。

「…だからボクは、宗形こむぎ——貴方と対決します。探偵助手ではなく、容疑者として。」

…ボクを論破できるというのなら、してみなさい」

非日常編3

? ? ?

「それじゃあ、議論再開だよ！残り時間も少ないし精一杯頭を使ってこの事件のクロを考えてくださいーい！」

お願いだから悪い理由ではありませんように、と祈るような気持ちで、僕はもう一度笑至くんに尋ねる。

「…笑至くん、君が照翠くんを呼び出した本当の理由は何なの…?」

笑至くんは僕の問いかけに視線を落とす、重たい口を開いた。

「まずボクは、このコロシアイには必ず黒幕がいるはずだと思います。内部に主導している人間がいない限り、こんな大掛かりなことをするのは不可能ですから」

「…そして、黒幕を探していたボクは、今までの言動から彼―照翠くんを、黒幕だと睨みました。そこで彼を問い詰めるために呼び出して2人きりになるようにしたんです。今思えば迂闊な判断でした。まだ黒幕が彼だとは限られていなかったのに……」

彼は自分の思慮の浅さを悔いるように、この裁判で何度目かのため息を吐いた。

「ボクは、真の黒幕に嵌められたんですね。どうやら彼はダミーの、内通者か何かだったようです。ボクはまんまと騙され手のひらの上で踊らされて、こうして犯人に仕立てあげられている…」

笑至くんは、顔を上げて僕を見つめ返した。その視線から先程の厳しさは消え、どこか自嘲の念を感じさせる寂しげな目をしていた。

「これが真実ですよ、宗形くん。ボクは殺人なんて犯していない。罠にかけられた愚かな容疑者なんです」

―笑至くんは黒幕を打倒するために僕に相談せず、1人で暗躍していた。優しい彼は、きっと他の人を自分の行動に巻き込みたくなかったんだろう。そして、そこを突かれて黒幕に嵌められてしまったんだ

…。
僕達が彼の言い分に納得しかけていたその時。佐島くんがまた口を開いた。

「それってさあ、君が処刑されたくないから黒幕を探してたって、嘘をついてみんなを言いくるめてるだけとも取れるよね。裁判でずっと主導権を握ってたし、本当は最初からみんなを間違った方向に誘導して、自分だけ卒業するつもりだったんじゃないの？」

全く悪気のなさそうな…むしろ純粋な疑問で満ちているかのような目で、佐島くんは問いかけた。

笑至くんは彼を睨み、忌々しげに口を開く。

「…貴方はどうしても、ボクを犯人にしたいんですね」

「違うよ、僕はただ事件を解決したいだけだ。さっきと同じで可能性を提示したに過ぎないのにそこに食いついてくるってことは、そういうこと—凶星になるのかな」

佐島くんは予想通りの反応だと言わんばかりに、また小さく嘲笑を零した。僕は思わず聞き返してしまう。

「笑至くんが、一人で卒業する気だった…？」

嘘だ。そんなはずは…。だって彼は最初からこのコロシアイを否定していたはずだ。僕達を殺して、一人で卒業するなんてこと、笑至くんが考えるはずがない……！

「…ボクが黒幕を探していた、という証拠はありませんから…もう信じてもらうしかありません。ボクは殺人なんかしない、このコロシアイを止めるために動いていたんです。みなさん、ボクを信じてください」

「信じるって…人を疑うのが職業の君が言うんだね」

必死に訴えかけるような彼の言葉に、佐島くんがやや呆れたように応酬する。

笑至くんもまた、呆れたと言いたげに首を横に振った。

「そもそも、貴方の主張は理性的ではありません。ボクに当てつけるような感情で話していてもそれは感情論になっただけです。そ

れでは一時的に場を乱すだけで、裁判の場では通用しないということ
をいい加減おわかりになったらどうですか？」

「その感情論とやらで現に追い込まれてるのは君だけだね。わかつた、そこまで言われるなら黙るよ」

それつきり、佐島くんは先程までの勢いが嘘のように何もしやべら
なくなつた…。

裁判場が久々の静寂に包まれる中、笑至くんが僕に向き直る。

「…宗形くん。ボクの主張を覆したいなら、ボクの殺人に確信を持て
る証拠を提示して、追い詰めるしかありませんよ」

「……………」

『照翠くんが黒幕側の内通者であり、自分は黒幕に嵌められた』という
笑至くんの主張は一貫して変わらず、彼は殺害を一向に認めようとし
ていない。だけど、現時点では彼以外に動機がある人がいないのもま
た確かな事実だ。

笑至くんの主張を覆す証拠を探して、新たな真実を見つけ出すん
だ。例えそれが僕らを引き裂く、残酷なものだったとしても…！

非日常編4

? ? ?

??? 「本当にボクが犯人だと言うんですか？」

「ボクは黒幕を突き止めるために照翠くんを呼び出しました」

「ところが、彼は全く口を割りませんでした」

「舌戦で彼に勝つことはできなかったんです」

「ボクは結局確信を得ないまま、部屋を後にしたんですよ……！」

◎ 縄と

△ 跡

□ 暴行の

? 手首の

【手首の縄と暴行の跡】

??? BREAK!!!

「…笑至くん、君は照翠くんをただ言葉で問い詰めただけじゃないよね」

「……え？」

笑至くんの瞳がわずかに揺れた。まだ俎上に載せられていないあの証拠。それを思い出した僕は、あの家庭科室で何が起こったのか、ひとつの確信があった。

「君は、照翠くんを縄で縛って動けないようにしてから拷問し、彼は黒幕だという確信を得てから、殺害したんだ……！」

「……！」

笑至くんが何か言いかけようとしたその時、

「はいはい！議論終了だよ！」

モノケンが無情にも終わりの合図を告げた。

「ここからは投票に移りまーす！ひとひとり、クロだと思う人に投票してね！あ、ちなみに投票を放棄した場合は死ぬからね」

モノケンがさらっと大事なことを付け加えながら、投票方法についてペラペラと話す。

「それでは、投票スタート！」

投票先を選んでください

▷ 揚羽鳳玄

▷ 荒川幸

▷ 陰崎ひめか

▶ 笑至贄

▷ 片原桃

▷ 切ヶ谷小町

▷ 芥原芥生

▷ 佐島俊雄

▷ スティーヴン・J・ハリス

▷ 掃気喪恋

▷ 月詠澄輝

▷ 照翠法典

▷ 根焼夢乃

▷ 野々熊ひろ

▷ 宗形こむぎ

▷ 妄崎しなぐ

僕は…笑至くんに、票を入れた。

「それじゃ、投票結果を発表するよー！」

「さてさて、投票多数によってクロに選ばれたのは笑至くんでしたー！さあ、ワクワクドキドキの結果発表だよー！」

「今回、照翠クンを殺害したクロは……」

突然上からモニターが現れ、映し出された映像の中でみんなのドット絵がくるくると回りー

笑至くんのところで止まった。

「超高校級の探偵助手、笑至贄くんでしたー！おめでとうございまーす！」

モノケンの威勢のいい声と共に、天井からカラフルな無数の紙吹雪が舞い降りてきた。

? ? ?

「嘘でしょ……？」

「本当に、にえくんが……」

「おいおいお前、本当にボク達を騙してたんだな！」

裁判の終了を迎えた後、みんなのざわめく声が聞こえてくる。

「笑至くんとお話できるのもあとほんの少しだし、みんな思いの丈をガンガンぶつけ合っつてね！うぷぷ……」

モノケンがその光景を見ながら意地悪そうにニヤニヤと笑っている。ここからみんなが笑至くんを責め立てるとか、そういう趣味の悪い想像をしているんだろう。

みんなの視線を浴びた笑至くんは——いつも通りの考える仕草をしていた。

「……やはり、そうになりましたね」

「やはりって何が？お前が殺したのが見破られたコト？」

根焼くんが楽しそうに彼に近づき話しかける。

「やめなよーそういうのは……」

月詠くんが顔をしかめて制止したが、笑至くんは全く気にしていない様子だった。

「いえ、ボクが黒幕にとって都合の悪い存在ですから、ここで罪を被らされて退場させられるかもしれないとは正直考えていました。…まさか本当にそうなるとは思っていませんでしたが」

「え…？」

「今更悪足掻きしたって無駄でしょ。見苦しいだけだよ、もう君がク口だつていうことはわかたんだから」

佐島くんが冷めた目つきで反駁する。だけど笑至くんは先程のようにイライラとした表情は見せず、ただ静かに首を横に振った。

「ボクがここで抵抗するのも何らかの意味があるはずです。宗形くんがボクと対決することで予想以上にこの裁判で成長してくれたように、予測不可能な何かが起こるかもしれないから」

「…どういうこと？笑至くん…」

笑至くんは眉を下げて、初めて見る表情で笑ってみせた。

「困ったことに、ボクは本当に照翠くんを殺していないんですよ」

それは、どこかに諦念を思わせるような顔だった。

背筋がぞくりとして、不安の表情が全員に一齐に浮かぶ。僕らの過ちが、真実に書き換えられた？…そんな事があっていいのか？

「ですから、本当にボクは黒幕に嵌められてしまったんです。おそらく照翠くんが向こうの、黒幕側の人間であることを見つけてしまったからでしょう…ボクはこのゲームの進行に支障をきたす存在として、ここで断罪されたんですよ」

「じゃ、じゃあ、笑至くんは本当に…」

「ボクは殺していません。どうやらボクの出番はここで終わってしまいうようですが、これだけは最後まで主張し続けます。ですから、宗形くん、貴方に1つだけお願いがあります」

「希望を捨てないでください。君とずっと一緒にいたボクが人を殺したという事実は確かにショックでしょう。でもそれは黒幕が作り上げた罠です。この先、他のみなさんが希望を失ってしまっても、貴方だけは、希望を捨てずに前に進み続けてください」

「記憶してください。前に進み続けければ、必ず道は開けます。ボクがこうして最後まで抵抗し続けているように、貴方も最後まで、希望を

持って戦い続けてください」

「笑至くん……」

彼からの言葉のひとつひとつが、胸に突き刺さるようだった。彼のためにも、僕は前に進み続けなきゃいけないんだ……。

「感動シーンは終わりかな？そろそろおしおきに移りたいんだけど……」

つまらなそうに話を聞いていたモノケンが、途端にそわそわとします。

「そ、そんな……ちよつと待」

「いいですよ。こんな茶番は早く終わらせましょう。黒幕に逆転策なしで楯突くところなるんですね、参考にさせていただきます」

笑至くんが僕を手で制して言った。その瞳はまっすぐにモノケンを見上げているーいや、もっと奥に潜む、自分を罠にかけた黒幕をじっと見据えているのかもしれない。

「まあ、その参考にしたのを活かす場ももうないと思うけどねー！」

モノケンがその視線を受けてゲラゲラと笑いながら指を鳴らすと、その前にWARNING!と書かれた赤いボタンが現れる。いつの間にかモノケンの手には大きなピコピコハンマーが握られていた。

「笑至くんも、準備ができたみたいだし、早速やっていきましょう！」
「それでは張り切っていきましょうっ、おしおきタイム！」

モノケンがボタンを叩いた。

▼えにしクンがクロに決まりました。おしおきを開始します。

劇場のようなステージの幕がゆっくりと上がると、探偵服を着た笑至くんの姿が見えた。長い一本道を歩きながらA、B、Cと書かれた服を着ている3人のモノケンの被り物を被った遺体を次々と発見する。

いずれの遺体にも「ABC鉄道案内」が添えられていた。

4番目のDの遺体を発見したあと、笑至くんは抜群の推理力で犯人

のモノケンを見つけ出し、一本道の行き止まりまで追い詰めた！

後ろの壁に気づき汗まみれだったモノケンが、突然ニヤリと不敵に笑い、指を鳴らした次の瞬間――

笑至くんの胸部から腹部にかけてを、無数の鉄パイプが無造作に貫いた。

そのまま大量の血を吐いてゆつくりと倒れた笑至くんの横には、

大きく ” E ” の血文字があつた。

その殺害現場を目撃した警察官姿のモノケンが犯人のモノケンを逮捕し、事件は無事解決した……。

めでたし、めでたし！

笑至くんがいたステージに、幕が下りた。

? ? ?

「……………」

みんなが見てはいけないものを見てしまったかのように、画面から目を逸らす。呆然としたまま視線を落とすと、投票ボタンを押した僕の右手は、面白いほどがたがたと震えていた。

…それは、笑至くんがおしおきされたと言うよりも、僕達がみんなで笑至くんを殺したような感覚だった。

エピソード

? ? ?

《中庭 サクラの樹の下》

「おにいちゃん、何してるの……」

「……」

頭上から突然降りかかった声にはっと顔を上げる。人が近づいてきている気配を全く感じられなかった。

まさか幽霊、と思つて振り返ると、そこに立っていたのはありがたいことにすっかり見覚えのある顔だった。

「びっくりした、掃気さんか……」

彼女はおどおどしながらも、こちらをじつと観察している。視線の先には僕が池の近くで千切つてきた青い小ぶりの花があつた。この花の種類も花言葉が何なのかも知らないけど、お参りといえれば花だろう、と思つてとりあえず集めてきたのだ。

ここにいる理由について何か適当な嘘をつこうかとも思つたが、礼儀としては正しいことをしている訳だし、特に偽る必要もない。

「もう死体はないけどさ、せめてもの供養にこうやってこの木の下にお花を集めてるんだ」

本音だ。相当恨まれたらうし、夜中に寄宿舎に化けて出られたりしたら困る。僕をやたらと目の敵にしていた彼は皮肉なことに隣室にいたので、襲われるにはある意味絶好のコンディションだ。

生きている彼に対しては恐怖や嫌悪の感情というより、どうでもいいという気持ちの方が強かったけれど、死んだらまた話は別だ。彼だけに通ずる話ではない。名前、なんだつたつけーそう、笑至くんに限つた話じゃない。先に死んでいた照翠くんなんか、背も高いし髪も長くて、幽霊になつて出てきたら特に恐ろしそうだ。

残念なことに、“不謹慎”という感覚が僕には分からない。自分に害を与えるかもしれないモノを怖がつて、何が悪いんだ？人は誰だつて自分の身が一番大事だろう。

第一どちらの遺体も、どこに安置されているのかすら分からない。

桜の木の下には死体が埋まっているとも言うのでこの場所にしたらけれど少し後悔した。

…これじゃあ彼らに出てきてくださいと言っているようなものじゃないか。さっさと終わらせて、天国でも地獄でもどこへでも成仏してほしい。

沈黙を守ったままの隣人を横目にそんな事を取り留めもなく考えていると、彼女が不思議そうにこてん、と首を傾げた。

「どうして…？ほんとうは、すきじゃないのに…？？」

「……！君は…」

「…もこも、てっだう……」

僕の内心を理解ってくれているのか。一瞬そう思っただけけれど、それは期待しすぎだ。

—でも、自分にしては珍しいと思った。「他人に期待する」という行為をしたのはいつぶりの経験だろう。

こうやって語らずとも、僕の世界に気づいたらいるような彼女。そもそも二人の關係にこんな余計なモノローグは要らないのかもしれない。なかった。

? ? ?

彼らが去った後には、手頃なものにしては綺麗に見える角の取れた円い石と、青いロベリア。それだけで作られた、素朴な吊いの墓ができていた。

【1章 END】

2章 やはりこのコロシアイ生活は間違っている。

(非) 日常編1

? ? ?

あの事件から2日後。僕はモノケンの朝の放送で、ずるずると布団から這い出るようにして起き上がる。

はなちゃんに水をあげた後、クローゼットの横にある鏡を見ながら四方八方に跳ねあがっている髪を無理やりに押さえつけ、朝ご飯を食べるために食堂に向かった。

食卓につくと、月詠くんが焼きたてのトーストを持ってきてくれる。今日はベーコンの下に半熟の目玉焼きが上に乗っかっていた。ナイフで開いた黄身がとろりと溶けだすところが想像できて、自然と頬が緩んでしまう。

いつもと何一つ変わらない日常。だけどそこには、眠たげな顔で黙々と食べ進めている照翠くんと、隣に座って真っ先に挨拶をしてくれる、笑至くんの姿はなかった。

「……………」

眠たくはないけど、未だに頭がぼんやりとしている。食べ終わった後もテーブルでの談笑に参加する気にはなれず、せめて自分の分の食器ぐらいは片付けようと思つて立ち上がった。

すると食卓の片付けをし始めていた僕達の前に、モノケンが現れた。

「おはようございまーす！最初の裁判を無事乗り越えたオマエラに、学園長のボクから素敵なお褒美のプレゼントを届けに来たよ！」

「プレゼント…?」

「どうせろくでもないもんでしょ」

戸惑う声の上がる中、モノケンはサンタクローズが背負うような巨大な白い袋の中から、電子生徒手帳に似た色合いのタブレット端末を人数分取り出して、一人一人に手渡ししていく。

「それがボクからのプレゼント、名付けて”動機ビデオ”だよ！」

「動機ビデオ…？」

「そう！ここにはオマエラの殺人の動機となりそうな情報が入っているんだ。もしかしたら、外にいる大切なあの人の情報もあるかも…!? 見るか見ないかはオマエラ次第、好きなようにしてねー！」

そう言つてモノケンはまた忽然と姿を消した。まさか、この時は思いもなかった。

—そのビデオを配られたことが、第二の悲劇の幕開けになるなんて。

自分の名前が書かれたタブレットを持った僕達は、その場に残つてこれをどうするか話し合いを始めた。

「このビデオ、一体どうしたらいいんだろう…！」

僕がそう言うと、根焼くんが答えた。

「見た方がいいんじゃない？なんかおもしろそうだし」

「でも、動機ビデオつて言つてたよね。殺人の動機になるなら見ない方がいいんじゃないかな…？」

月詠くんが首を捻る。確かにそうだよな…。モノケンが僕達のメリットになるものを渡してくるとは思えない。その意見にうんうんと頷いている人も多かった。

「見るか見ないかなんて、個人の自由でいいんじゃない？」

佐島くんが表情を変えずに言う。

「だ、だめですよ…！…！こういうのは、みんなで揃えないとじゃないですか…！？」

荒川さんが慌てて否定する。意見がなかなかまとまらないその時だった。

バキン、と何かが割れるような音がした。

僕達が音のした方向を見ると、

ステイヴンくんが動機ビデオをブーツで踏みつけて壊していた。

「す、ステイヴンくん!? 何してるの!？」

「メアリーが『殺人の動機になるような不穏なものは、壊した方がいい』と言つていたぞ！だから壊したんだ」

「た、確かにそうだけど…!」

さすがアメリカ人、行動が大胆だ……。

「とりあえず、これは各自で持っておいたらいいんじゃない? 1箇所にとどめたら、誰かが全員分見ちゃうかもしれないし」

佐島くんの意見に従って、僕達は動機ビデオを各自の部屋で保管しておくことにした。

殺人の動機になるようなものを見る人なんて、きつといないよね…?

僕が寄宿舎に戻って動機ビデオを備え付けの引き出しの中にしまったあと、誰かが僕の部屋のドアをノックした。

「…はい?」

ドアを開けると、そこに立っていたのは切ヶ谷さんだった。

「ハロー!」

「は、はろー…?」

「切ヶ谷さん、えっと、どうしたの…?」

「今日、本校舎の3階が開放されたらしいんだ! よかったらボクと一緒に見に行かない?」

「大丈夫だけど…ぼ、僕なんかでいいの?」

「最近元気がなかったみたいだからね! ボクと一緒にいたらみんな元気になれるって風玄が言ってたから」

「…そっか」

切ヶ谷さんは、裁判の後からずっと落ち込んでいた僕を励まそうとしてくれてるんだ…。その厚意にあずかって、僕は切ヶ谷さんと一緒に3階に行ってみることにした。

(非) 日常編2

? ? ?

3階は誰かの研究室があり、そこを通り過ぎて更に廊下を進んだ突き当たりには、娯楽室と書かれている教室があった。

「空いてるじゃないか！ヨシ、中に入ってみよう！レッツラゴー！」

切ヶ谷さんが勢いよくドアを開けたのに続いて部屋の中に入ってみると、そこは娯楽室と言うよりも、学校の中とは思えないゲームセンターのような場所だった。

チェスや将棋のようなボードゲームが置いてあるテーブルもあるけど、奥の方にはUFOキャッチャーにメダルゲーム、パチンコ台のようなものまで置いてある。

「あれ？お2人でデートなんて、おアツイわね〜」

声のした方を振り向くと、シューティングゲームの筐体の前に妄崎さんがいた。

「おアツイ？どういうこと？(。▽。)」

「で、デートなんかじゃないよ…！」

切ヶ谷さんがきよとんと首を傾げるので慌てて否定すると、お姉さんに話したくなったらいつでも言つてね〜、と言いながら妄崎さんはゲームに戻っていった。表示されてる高いスコアと素早い手さばきからして、思ったよりも真剣にプレイしているみたいだ。

僕達も各々好きなゲームのところへ分かれると、モノケンが僕の前にひよこつと現れた。

「うぷぷぷ…女のコと2人でお出かけなんて、うらやましいですな〜」

「だから、そんなんじゃないって…何の用？」

「実は、ここにあるゲームはたくさんクリアすると素敵な特典がもらえるチャンスがあるんだよ」

「素敵な特典？」

モノケンが言うとはとなく、というかものすごく嫌な予感しかしないけれど…。

「やだなあ、そんな不審そうな顔しないでよ！ちやあんといいヤツだ

よ」

「いいやつ…?」

「ここにあるゲームのクリアボーナスを集めると…じゃじゃーん!このスペシャルな鍵がもらえるんだ!」

そう言つてモノケンが取り出したのは、上部にピンク色のハートの宝石が象られた、小さな鍵だった。

「今回は初回限定ボーナスとして、なんと!出血大サービスで宗形クンに無料で1個差し上げましょう!」

「ありがとうございます…でもこれ、何に使うの?」

「寄宿舎の2階がさつき解放されたから、その鍵穴に差し込むと使えるよ!何が起るかはやってみてのお楽しみだけどね、うぷぷぷ…」

そう言つたあとモノケンはUFOキャッチャーのブースに行つた。あのぬいぐるみみたいな手でレバーをうまく操作できるんだろうか…?」

僕達がゲームを終えて部屋を出ていこうとすると、妄崎さんがまた声をかけてきた。

「そうそう、今日の夜、みんなで寄宿舎のどこかの部屋に集まろうと思うんだけど、君たちもどう?」

「えっ、ナニナニ!?行きたーい!」

切ヶ谷さんが目を輝かせて反応した。

「みんなで集まつて何をするの?」

「それは、来てからのオタノシミ♡男女問わずみんなに声掛けてるから、ドキドキしながら夜時間まで待つてね。あ、お2人で夜の営みをするならお姉さんは止めないけどね?」

そう言うのと妄崎さんがニヤリと不敵に笑つた。…何となく嫌な予感がするな…。

娯楽室を出てみんなで昼ご飯を食べたあと、切ヶ谷さんは芥原さんのパトロールに付き合う予定になっていたそうで、彼女とは一旦お別

れして僕は1人で校内を歩いていた。

すると、大量の段ボール箱を抱えた月詠さんと野々熊さんの2人に廊下でばったり出会った。

「おつす、こむぎくん」

「やあ、こむぎくん」

「すごい荷物だね…何してるの?」

僕が尋ねると、2人は打ち合わせたように顔を合わせてにこにここと笑って話し始める。

「ゴロシアイが始まってから結構経つけど…いろんな怖いことがあつたでしょ?だからひろちゃんと一緒に、みんなを励ますために人形劇をすることにしたんだ」

「そうだぞお!今日の夜に準備して、明日見たいやつらを呼んで会議室で上演する予定だ!ふふん、いいアイデアだろ」

「へえ…!おもしろそうだね!」

でも、今日の夜って妄崎さんがみんなを呼び出すんじゃないかな?月詠くんたちに言った方がいいんだろうか…。

それとも、前も妄崎さんから逃げてたし、もしかしたら月詠くんは妄崎さんのことが苦手なのかもしれないから、言わない方がいいのかもしれない…。人形劇の準備をするのも大変そうだしなあ。

——いや、やっぱりみんなを集めるって言ってたし、一応言っておいた方がいいだろう。

「月詠くん、妄崎さんが今日の夜みんなが集まるって言ってたよ」

「えっ、そうなの?じゃあひろちゃん、準備は明日の朝やろっか」

「ん!そうだな!何するんだろうなっ、楽しみだぜ!」

2人はわくわくとした表情を見ている。よかった、勇気を出して言ってみて…。僕も明日の劇の手伝いをさせてほしいと告げると、2人ともとても喜んでくれた。

夕ご飯の前まで野々熊さんの研究教室で、2人の人形劇の準備の手伝いをした…。

(非) 日常編3

? ? ?

「はい、みんな集まったかな?それじゃあ、これから…」

夜時間、妄崎さんの部屋の中に所狭しと集まった僕達。これから一体何をするんだろう…?

「しなぐお姉さんの、下ネタ講座を始めます♡」

…そういうことか……。

? ? ?

《2章イベント お姉さんの下ネタ講座♡》

? ? ?

「ちよつと、しなぐちゃん…!?そういうことをするためにおにーさん達を呼んだの…!」

妄崎さんの話を聞き終えた途端、月詠くんが焦った声を上げた。

「そうだよ?澄輝くんも興味あるでしょ?下ネタ」

「おにーさんは、そういうの苦手だって何回言ったらわかるの…!」

「へー、おもしろそうじゃん。やろうよ」

根焼くんは早くも乗り気だ…。妄崎さんはその言葉を聞いてニヤニヤと笑みを浮かべながら、このためにわざわざ部屋に運び込んだと思われるホワイトボードに、大きく「下ネタ講座」と書いた。

「まずは基礎知識から…そうだなあ」

「だめだって!こんなに女の子がいっぱいいる前で、そんな教育に悪い話しちゃいけません!しなぐちゃんも女の子でしょ!」

月詠くんが必死で止めようとする、

「へー。月詠は男がいる前だったらそういう話するんだ?」

横から根焼くんがヘラヘラとからかう。

「〜っ!」

月詠くんは頭から湯気が出てきそうなくらい真っ赤になって、そのまま俯いて黙ってしまった……。

「じゃ、まずは(規制音)の話からするね」

妄崎さんは邪魔者がいなくなったとばかりにギリギリアウトぐら

いの下ネタを平然と話し始め、みんなは真剣に聞き入っている。えつと、これで本当にいいのか…？

夜が更けるにつれて、だんだん内容も過激になっていく。

「……で、これが（規制音）だから、（規制音）になって〜」

「あーわかる。でも（規制音）の場合もあるじゃん？そういう時ってどうしてる？」

「あゝ、それはねえ…」

妄崎さんと根焼くんのすさまじい会話のキャッチボールに、誰もついていけない。

周りを見ると、赤らめた顔を手で覆いながら聞いている荒川さんと野々熊さん、けろつとした顔で聞く片原さんや揚羽くん、必死で掃気さんの耳を塞いで自分がガードできてない月詠くんなんかが目に入ってきた。

なんだろう、このカオスな感じ……。

下ネタが加速し続け、そろそろかなりマニアックというか、聞いていてこれはさすがにまずいだろうという域に入ってきた時―

「カラー!!オマエラいつまで起きてるんだ、それぞれの部屋に戻りなさい!!」

ピンクのエプロンにくるくるパーマに、右手にはフライ返し。なぜか大阪のオカンのような格好をしたモノケンが扉を開けて入ってきた。

「ちえつ、興醒めだよ」

「やつと終わった……」

「え、えつと、（規制音）が（規制音）で………?」

みんながバラバラと各自の部屋に戻っていく。

「切ヶ谷さんは大丈夫だった…?」

たまたま一緒に部屋を出た切ヶ谷さんに話しかける。

「え?全然何の話してるかわからなかったよ?」

「…よかった……」

切ヶ谷さんがあんなどぎつい下ネタの知識を蓄えてしまったらど

うしようかと思つた…。

でも、確かに刺激は強かつたけれど、みんなで1つの部屋に集まるって修学旅行みたいで楽しかつたな。なんだかんだ言つていい会だったのかもしれない…二度と行きたくはないけど。

? ? ?

翌朝、食堂へ向かうと既にみんなが座つて朝ごはんを食べていた。最近では眠れなくて早く目が覚めちゃう日が多かつたから、なんだか新鮮だ。月詠くんが炊きたてのご飯を運んできてくれる。

「ありがとう、月詠くん」

「いえいえ。今日は目のクマがなくなつてるね。こむぎくん、最近ずつと寝不足だつたみたいだからおにーさん心配してたんだけ…よかつた」

そんなところまで気づかれていたのか…。月詠くんって本当にいい意味でお母さんみたいだなあ。

全員の配膳を終えると、月詠くんはそのまま僕の隣に座つてご飯を食べ始めた。しばらく他愛もない話をしていたが、ふと月詠くんが僕の顔をじつと見つめる。

「…僕の顔、何かついてる? ご飯粒とか…」

「! ううん、ごめんね、なんでもないよ。ただちよつと、家族のことを思い出したんだ…こむぎくんは、よく似てる気がする」

彼の表情に初めて見るような少し寂しげな微笑みが、一瞬浮かんですぐに消えた。

「僕に似てる…? 月詠くんって、兄弟がいたりするの?」

「うん。でも、こんなところで話すのもなんだし後片付けが終わつてから話すよ…あ、そうだ。今日の昼に、いよいよ人形劇の本番をする予定なんだけど、よかつたらこむぎくんも見にこない?」

「もちろん! 昨日準備してたやつだね。今日の午前中もなにか手伝えることがあつたらやるよ」

「ほんとに? 助かるよ。じゃあ準備しながらおにーさんの兄弟の話しましょうか。…あんまり、おもしろい話ではないと思うけど」

「うん。人形劇、うまくいくといいね」

「ありがとう。おにーさん、頑張っちゃうよ」

そう言っただけで微笑む月詠くんはとてもいきいきとした表情をしていた。みんなを喜ばせるのが本当に好きなんだろうなあ…。

僕は月詠くんの研究教室で待ち合わせる約束をして、食堂を後にした。

?? ? ?

「ハロー！宗形くん、今日はなんだか元気そうだね！」

食堂を出て廊下を歩いていると、昨日と同じく切ヶ谷さんが声をかけてきた。

「ありがとう。切ヶ谷さんもいつも元気そうだね」

「ボクはいつでも元気だよ！月詠さんの作る牛乳寒天が今のボクのエネルギーの源さ」

「そうなんだ…」

毎朝切ヶ谷さんが何度もおかわりして食べてた謎の白い物体って、牛乳寒天だったんだ。そうわかると途端に微笑ましく思えてくる。

「月詠くんって、ほんとにいろんなことをしてるんだね」

「夜時間も怖くてトイレに行けない子についていってあげたりしてたみたいだよ」

「すごいなあ…面倒みが良すぎて、同じ高校生とは思えないよ」

「そうだ！今日の人形劇、キミも行くのかい？」

彼の名前を聞いて思い出したように切ヶ谷さんが尋ねてくる。

「うん、準備を手伝うことになってるんだ。切ヶ谷さんは？」

「ボクも声をかけられたから荒川さんを誘って行くことにしたよ！」

「そうなんだ…」

荒川さんと切ヶ谷さんって、全然タイプが違うように見えるけど案外仲良しなんだな…。ハンガーラックの事件がやっぱりきっかけになったんだろうか。

そうこうしているうちに、2階にある月詠くんの研究教室に着いた。

「じゃあ、僕はここです」

「うん、また後でー！」

切ヶ谷さんと別れて、僕は研究教室の中へと入った。

ベビーベッドや子供用の滑り台、カラフルなおもちゃなどが置いてある、パステル色を基調としたファンシーな部屋だ。真ん中のテーブルで月詠くんと野々熊さんが作業をしていた。

「遅くなってごめん！」

「ううん、今始めたところだから大丈夫だよ」

「裁縫以外はあんまりやりたくないぜ……」

野々熊さんは少しげんなりとした顔をしながら、背景の絵を描いていた。

「こむぎくんはここにお花の背景の絵を描いてもらってもいいかな？」

「わかった！お花を描くのは好きだから精一杯頑張るよ」

こうして3人で小さな机を囲み、黙々と作業を始めた。

1時間ほど経ったあと、ふう、と月詠くんが大きく息を吐いた。

「……少し休憩しようか」

「疲れたぜく!!!」

野々熊さんがクレヨンを投げ出して柔らかいカーペットにごろんと寝転がる。

僕達は月詠くんの入れてくれたオレンジジュースを飲みながら、しばらく雑談することにした。

「そういえば、朝言ってた僕に似てる兄弟って月詠くんのお兄さん？弟？」

「ああ、弟だよ——おにーさんが小さい頃に、亡くなったんだ」

「え……」

呆気にとられた顔をする僕と野々熊さんを見て、月詠くんは慌てたように付け足す。

「と言っても昔のことだから、あんまり覚えてないんだけどね」

「ほんわかしてるところとか、お花を見ると嬉しそうに笑うところとかがこむぎくんによく似てたんだ……。それで弟のことを思い出した

んだよ」

「…弟は、どうして死んじゃったんだ？」

野々熊さんが眉を下げて遠慮がちに聞く。

「親が出張に行っていて親戚の家に預けていた時に、ベッドから落ちてしまつて、そのまま…ね」

「…親戚の人は子供がいなかったからあんまり知識がなかったみたいでね、ベッドから落ちる危険があるのにも気づかなかつたらしいんだ。…しようがないよ」

「そうだったんだ…」

悩みなんてなさそうに見える月詠くんにそんな過去があるなんて、当たり前だけど知らなかつた。

「でも、悪いことばかりじゃないんだ」

「…どういふことだ？」

「あの不幸な事故があつたからこそ、おにーさんはベビーシッターをやろうと思つたんだよ」

「…？」

不思議そうな顔をする僕たちに彼は微笑みかけた。

「子供の扱い方が分からない人が面倒を見る前に、しっかり面倒を見られる人がいればそんな不幸なことは起きないでしょう？」

「おにーさんのところにお子さんを預けてもらつて、1人でも多くの赤ちゃんの命を救いたって思つたんだ。」

それに、弟がいなかつたら今頃は普通の生活を送つてたし、こむぎくんやひろちゃんとも出会えてなかつた。

だから今は、これでいいつて思えるんだ。自分のやることに、ちゃんと胸を張れる」

「…私も、師匠やこむぎと出会えてよかつたぞ」

「僕も、月詠くんと野々熊さんと会えて、こうして話がよかつたよ」

「そう言つてもらえると嬉しいな。弟には感謝してる。弟の分まで精一杯生きるつて、おにーさんは誓つたんだ。だから、こんなコロナイになんて負けない」

月詠くんの目には、まっすぐな、強い光が灯っていた。

「そのためにも、今回の人形劇、ぜってー成功させないとだな！」
野々熊さんが作りかけのうさぎの人形を顔の横に掲げて、にっと笑う。

「そうだね、みんなが喜んでくれるように頑張ろう」

僕達は互いにこつんと拳を突き合わせる。そして、残りの作業を協力して進めていった。

(非) 日常編4

? ? ?

1時間後、人形劇の会場の会議室には切ヶ谷さん、荒川さん、芥原さん、片原さん、掃気さんの5人の女子が集まっていた。

人形を動かすのは野々熊さんと月詠くん。僕は背景の差し替えとかを担当することになっている。

「そ、そろそろ始めるか…」

緊張からか、野々熊さんは見てわかるほどにガチガチに固まっている…。

「ひろちゃん、大丈夫?」

「だ、大丈夫に決まってるんだろ!武者震いだ、武者震い!」

若干涙ぐんでるけど、本当に大丈夫かな…?

その時、月詠くんが野々熊さんの頭にぽんと手を置いた。

「ひろちゃんはみんなのお姉ちゃんだから、ちゃんと頑張れるよね?」

「…!」

すん、と涙を止めるように一つ鼻をすすった後、野々熊さんは大きく頷いた。

「…できる!」

「うんうん、がんばろうね、おにーさんとの約束だよ」

「ああ!」

そんな2人の光景に、僕は思わず笑みがこぼれてしまった。まさに師匠と弟子って感じた。

時間になり、人形を持った2人と背景の絵を持った僕が会議室に登場して、人形劇がいよいよ始まった。

人形劇のストーリーは、動物に変身させられてしまった観客の5人が、悪の組織のボスであるモノケンを倒す、という話だった。

「ややつ!?くぐはらがうさぎさんになってしまいましたよ!」

「ボクは…ネコ!?ニヤーン!ニヤーン!」

「…もこは…くまさん…ふふ…」

それぞれの個性を活かして数々の難所を乗り越え、いよいよ、ボスのモノケンとの対決の時だ。

今までの人形の2倍ぐらいもある巨大なモノケン人形が現れる。

『がおー！オマエら全員食べちゃうぞー！』

「ひゃあ…!!怖いです…:助けて…!」

「全員で立ち向かえばきつと倒せるですよ!」

「芥原さん、そこだー!!」

「くぐはらの魔法の力を見るですよ!」

「桃の華麗な包丁さばきつすよ」

「みなさん、すごいです…!!」

「…:おねえちゃん…:がんばれ…」

こうして、力を合わせた5人によって、モノケンは無事退治され、街には平和が戻った…。

「わー…:ぱちぱち…:」

「ボク達の勝利だね!よいしょー」

「すごくおもしろかったです…!」

「くぐはらは今日も地球を救ったですよ!」

「今晚のご飯はモノケンの焼肉つすよ」

観客のみんなは各々感想を言い合いながら、満足そうに帰っていった。

「ふう…:うまくいったね、ひろちゃん。こむぎくんも手伝ってくれてありがとう」

「ふふん、大成功だったぜ!」

「僕は大したことしてないよ…:熱演だったね、2人とも」

「えへへ、おにーさんもつい夢中になっちゃったよ」

「後片付けはお姉さんの私がやるから、2人は帰っていいぜ!」

「…:そう?お昼ご飯作らなきゃだし、せっかくだから、ひろお姉ちゃんにお願いしちやおうかな」

「へへ!任せろって!」

胸を張りながらそう言う野々熊さんに後片付けを任せ、僕と月詠くんは昼ごはんを作り終った後、僕と月詠くんは昼ごはんを作り終った後、野々熊さんはなかなか

? ? ?

食堂に戻り、昼ごはんを作り終わった後も、野々熊さんはなかなか戻ってこなかった。

「…戻ってこないね」

「もしかしたら、荷物が多かったのかも。人形も背景もあったしね。ちよつと手伝ってくるよ」

確かに、行きに運んだ時の大きな段ボール箱を体の小さな野々熊さんが1人で運ぶのは大変そうだし…。

「僕も運ぶの手伝おうか?」

「冷めるとご飯がおいしくなくなっちゃうから、こむぎくんは先に食べてもいいよ。自分の力で作った料理はいつもより数倍おいしいからね」

月詠くんはそう言うてにっこりと笑う。

「うん、わかった。じゃあここで食べながら待ってるよ」

僕は空いていた席に座って、月詠くんと一緒に作ったおにぎりを食べ始めた。

「お、おいしい…!」

彼の教えてくれたコツに従ったおにぎりは、全く崩れず、かつ適度な噛みやすい固さを保っている。塩の加減も絶妙だ。匂いに誘われて食堂に来た他の人達も幸せそうにおにぎりを口いっぱい頬ばっている。

おにぎりは結構な大きさがあつたのに、あつという間にぺろりと平らげてしまった。

使った食器を洗って食器棚に閉まっていると、ステイヴンくんに声をかけられた。

「こむぎ君、少し聞きたいことがあるんだが」

「ど、どうしたの?」

僕がお皿を置いて振り返ると、ステイヴンくんの背後からぴよんと芥原さんが出てきた。

「くぐはらのピーちゃん、知らないですか?」

「ピーちゃん……?」

「彼女がいつも持つている、あのシャウテイングチキンのことらしいぞ。さっき聞かれたんだが、僕達には心当たりがなくてな」

「ああ、あのすごい顔の……」

確かに、芥原さんの手にはいつも持つている鶏のおもちやがいなかった。

「ピーちゃんがないと困るですよ!でもくぐはらにはどこでなくしたのか心当たりがありません……」

「うーん、僕もわからないな……」

「彼女の寄宿舎の部屋や女子トイレには行ってみたんだが、見つからなくてな」

「えっと、ステイヴンくんは女子トイレに入ったの……?」

「ジャックが入ってみたいと言ったんだ。メアリーとウエンの2人がかりで止められたのでさすがにやめたぞ」

「そ、そうだよね……」

……うん、それは賢明な判断だと思う。つい余計なところが気になってしまった。

「くぐはらはピーちゃんがないと、うまく力が出せません……」

芥原さんはいつもの元気そうな様子とは打って変わって、かなりしよんぼりとした様子だ。あれ、そう言えば彼女は……。

「——もしかして」

「ん?なにが思いついたか?」

「芥原さんがピーちゃんをなくしたのって、今日のこと?」

「そうです!」

……それなら、1つの場所が思い当たった。

「芥原さんは、会議室にピーちゃんを置いてきたんじゃないかな?」

芥原さんは、今日の人形劇の観客でもあった。劇に夢中で、うっかりピーちゃんを忘れて帰っていったということもありえるだろう。

「ややつ?!?そうかもしれないですよ!」

「それでは、会議室に向かおうか」

僕は3人で会議室へと向かった。

階段を上って2階に上がると、奥の方に誰かが座っているのが見えた。

「あれは誰だ?休憩しているのか?」

「…たぶん、野々熊さんじゃないかな。人形が入った大きな段ボールを運んでたから、疲れて休憩してるんだと思うな」

「早く会議室に入ってピーちゃんを探すですよ!」

「おっと、廊下を走るとウエンに怒られるぞ!」

芥原さんが待ちきれずに廊下を駆け出し、僕達2人は慌てて彼女を追いかける。

会議室の手前まで来て、僕達の足はようやく止まった。

そこには——会議室の向かいのドアを背に、縄のようなものでドアノブにぶら下げられて座り込んでいる、野々熊さんの姿があった。

「な、……!!?」

突然目に入った光景に僕達が呆気に取られている隙に、ピーちゃんを探すのに夢中だった芥原さんは既に会議室のドアを開けていた。

「ややつ…!!?」

部屋の中には頭から血を流し、壁にもたれ掛かるようにして座っている月詠くんの姿があった。

「月詠くん…!!?」

「これは…どういうことだ!?!」

脳内がパニック状態だ。2人もどうしよう、こんな時、どうしたらいい…!?!

状況が全く理解できず、混乱したままの僕達の耳にあの放送が届いた。

『ピンポンパンポーン！死体が発見されました、オマエラすぐに現場の本校舎2階廊下に向かってくださいーい！』

非日常編1

その放送を耳にした後、突然、頭の中にある声が蘇ってきた。

『宗形くん、死体を発見した時は、まず呼吸を確かめてください。倒れているだけでは、生死は判断できません』

…最初の捜査の時の、笑至くんの言葉だ。

僕は会議室の中に入り、祈るよう思いで月詠くんの首元に手を当てた。

——呼吸は、まだあった。

「月詠くんはまだ生きてる…!!」

「何だと!？」

「急いで担架を持ってきて!」

「ああ、わかった!僕らが持つてこよう!」

「くぐはらも手伝うですよ!」

ステイヴンさんと芥原さんは、僕の言葉を聞きすぐに駆け出して食堂の前にある担架を取りに行った。

彼らがいなくなった間に、僕は野々熊さんに近寄りそつと呼吸を確かめた。

しかし、彼女の顔は青白く血色が失せていて、呼吸も既に絶えていた。

「くっ……」

僕が野々熊さんに任せずに片付けを手伝っていたら、こんなことにはならなかったのに…!後悔の気持ちがどつと溢れ出て胸を締め付ける。

その後、アナウンスを聞いた他のみんなも続々と集まってきた。

「野々熊さん、月詠さん…どうして……ああ……」

「一気に2人もなんて、大胆だねえ」

「澄輝くんはまだ生きてるらしいよ」

「それは不幸中の幸い、なのかな…」

そう口々につぶやきながら、現場を見つめている。

「僕達のために道を開けるんだ!」

担架を持ってきたステイヴンさんと芥原さんが、慎重に月詠くんをそこに慎重に乗せる。

そして担架を運ぼうと持ち上げた矢先に、モノケンが現れた。芥原さんがムツとした顔でモノケンを見下ろす。

「道を開けるですよー!」

モノケンは意にも介さず首を傾げる。

「オマエラ、月詠クンを一体どこに連れていくつもりなの?」

「どこって、保健室に…あ…」

そう言いながら気づく。確かに、今まで解放されているマップの中に、保健室の場所はなかった。

「どうするんだ? 君はこのまま澄輝君を見殺しにする気か?」

ステイヴンくんがモノケンをぎろりと睨みつける。

「まあまあ、そんな怖い顔しないでよー! ちゃんとアテはあるって!」

「校舎のまだ解放されていない場所に保健室はあるから、そこに月詠クンを連れていきまーす!」

「待つて、それをモノケン一人でやるのは信用できないよ…!」

僕は慌てて止めようとする。モノケンはつまらなそうに後ろで腕組みをした。

「ふーん、じゃあどうする? このまま治療もしないでただただ月詠クンが死ぬのを待つ?」

「……」

モノケンに任せる以外に、方法はないようだ…。

「モノケンは審判的な立場だし、ゲームに関しては何ルールをきちんと守るんじゃないかな? だからさすがに、月詠さんに危害を加えたりはしないと思うよ」

佐島くんが未だに渋い顔をする2人の間に入り、モノケンに担架を渡すよう促す。

「そうそう、佐島くんはよくわかってるねー!」

「…ツすまない、澄輝君…」

2人はしぶしぶとモノケンに担架を渡し、軽々とそれを担ぎあげたモノケンは階段を下りてどこかに消えていった。

「…佐島くんって、こんな時でも冷静なんだね」

何食わぬ顔でいる彼に僕は思わず声をかけてしまった。

「うん？いつでも冷静な判断ができるのはいいことじゃないのかな」

「それは、そうなんだけど…ううん、何でもないや。ごめん」

やっぱり彼からは、人間味のようなものが感じられない。こういう時に彼と話していると…なんというか、背筋が凍るような気持ちだ。

僕は最初の裁判の後から、佐島くんに対して純粹な恐怖のようなのを覚え始めていた。

何を考えているのか、これから何をするつもりなのか、彼に関してはその笑至くんでさえ掴めなかった部分が多くある。

わからない…だからこそ、怖い。それが今の彼に対する率直な気持ちだった。

でも今、彼について深く考えている余裕はない。僕は頬をパチンと叩き、気持ちを切り替えた。

早く捜査を始めて、野々熊さんを殺害し、月詠くんを襲った犯人をなんとかしてでも探し出すぞ…！

サポートしてくれる探偵助手がいなくなっちゃって、僕にはまだ頼れる仲間がたくさんいるはずだ。彼らと共に、この事件の真実を導き出すんだ！

非日常編2

「捜査、始めるか…」

僕がそう独りごちると、切ヶ谷さんがてくてくとこちらに近づいてきた。

「宗形さん、ボクが助太刀するよ！」

「切ヶ谷さん…いいの？」

「前の裁判の時は何がどうなったのかよく分からなくて、みんなに迷惑をかけてしまったし…キミと一緒にいればボクにも力になれることがあるかもしれないからね！」

そう意気込む彼女の姿に、僕は自然と励まされたような心地がした。

「…ありがとうございます、じゃあよろしくお願いします」

「こちらこそ…」

お互いペこりと頭を下げ、捜査を始める。

「まずは、電子生徒手帳を確認してみようか」

「…何だっけ、それ？（。▽。）」

「…：僕が確認するよ」

「ふむふむ。午後1時頃って、ボク達がお昼を食べ終わった頃だね」

「そうだね。僕はお皿の片付けをしていたけど、この時間なら食べ終わった人たちなら誰でも犯行が可能だってことかな…？切ヶ谷さんはどう思う？」

意見を求めようと切ヶ谷さんの方を見ると、ぽかんと口を開けている。

「…ごめん全然聞いてなかった」

「あ、うん…：気にしないで」

僕と会話しながら、何を考えてたんだろうな…。つくづくどこか呑気な切ヶ谷さんだった。

「野々熊さんの方は…遺体以外に特に変わったところはないみたいだ

ね」

「野々熊さんがもたれかかっているのは、何の部屋のドアなんだい？」

「ここは——月詠くんの研究教室だね」

研究教室Ⅲと書かれたその場所は、午前中に僕が2人と一緒に人形劇の準備をしていたところだ。

「じゃあ、この紐も月詠さんの研究教室にあったのかな？」

「いや、僕が行った時はこんな目立つ赤い紐は置いてなかったと思うけど……」

それにしてもこの紐、どこかで見覚えがあるな……。この既視感は覚えておこう。

「次は、会議室を見てみようか」

「月詠さんが倒れてたところだね！ボクの化身が近くにあったからびっくりしたよ……」

「化身……あ、確かにネコの人形が近くにあったね……」

人形劇の時の、切ヶ谷さんが変身した姿のネコの人形が置いてあった。あれが片付けられていないってことは、結局あの時、片付けはまだ終わっていなかったってことか……。

「物があちこちに散らばってるし、片付け中に何か起こったんじゃないかな？」

「うん、そうかもしれないね。野々熊さんの片付けが長いのを心配して月詠くんが見に行ったから、その時に何か起きたのかも……」

僕達が考え込んでいると、パツとモノケンが目の前に現れた。

「オマエラ、捜査は順調かなー？」

「モノケン！」

「月詠くんは大丈夫なの？」

「彼は今、保健室で集中治療を受けてます。裁判後にはピンピンになつて帰ってくると思うよ！」

「よかった……」

ほっと胸を撫で下ろす。とりあえず安心材料ができた……。

「そうそう、オマエラに捜査に関する大事な情報を言い忘れてたんだー」

「大事な情報…？」

「実は、今回から死体発見アナウンスの設定をちよつといじくつたんだよ」

死体発見アナウンス——前は第1発見者が死体を見つけたときに鳴ったはずだ。

「今回は、クロを除いた3人が死体を発見した時点で鳴るように設定したんだ！」

「クロを除いた、3人…？？」

「ま、変えたのはそれだけだけど、もしかしたら何かのヒントになるかもよ！それじゃせいぜい残りの時間で頑張ってねー！」

モノケンはいつものようにどろんといなくなった。

「…で、3人になると結局何が違うの？」

切ヶ谷さんが不思議そうに聞いてくる。

「今はまだ分からないけど…もしかすると、これが事件の鍵になるのかも」

「なるほどー」

ふむふむと頷きつつもあまりわかっていなそうな切ヶ谷さんを見て、なぜか安心感を覚えてしまった…。

「月詠くんは頭から血を流して倒れてたよね。気絶していたし、頭を強く打ったのかもしれないね…」

そう言いながら振り返ると、切ヶ谷さんが地面に這いつくばってほふく前進のような格好をしていた。

「……切ヶ谷さん？」

「警察の人が前こうやってるのをドラマで見たんだ！」

「そ、そうなんだ…」

…その格好、パンツが見たくなっても見えちやいそうだからできればやめてほしいんだけどな……。

僕は顔を逸らして会議室の搜索を始めた。

辺りには人形劇に使ったものや椅子が雑然と置かれている。月詠くんの近くにあったダンボールには、背景に使った絵が入っていた。これを選ぶ途中だったんだろうか…？

他には、特に気になる場所は無さそうだ。

「あー?!?!」

「ど、どうしたの!?!」

這いつくばっていた切ヶ谷さんが突然叫び声を上げた。

「宗形さん!これ!」

「これは…!」

切ヶ谷さんが指さした会議室のドアから2、3歩進んだ床に、わずかだけど、誰かの血痕が付着していた。

「すごいよ、切ヶ谷さん!こんなのに気づくなんて…」

「現場には数々の秘密が隠されているのである…!」

切ヶ谷さんは満足気に腕を組みながら、うんうんと頷いている。

それにしても、この血痕は月詠くんと野々熊さん、どつちのものなんでしょう。謎が次から次へと出てくるなあ…。

「こむぎくん」

ステイヴンくんがぽん、と肩を叩いて僕に声をかけてきた。

「聞き込みをしたところ、どうやら両方とも第1発見者は僕達で間違いないようだぞ」

「そんなことまで聞いてくれてたんだ、ありがとう…!」

「礼には及ばない。少しでも君の役に立ったなら僕達も嬉しいぞ!」

「ステイヴンさん、ボクより役に立ってるじゃないか…!!」

「H A H A! 僕らは全員で協力して捜査を進めてるからな」

ステイヴンくんの頭の中には、一体何人助言してくれる人がいるんだろう…。

おおむね現場検証を追えたところで、モノケンの放送が始まった。

「ピンポンパンポーン! 捜査終了です、全員裁判場まで移動しまーす」

「いよいよか…」

「宗形さんならきつと解決できるよ! ボクも怪しい奴はバシバシ叩き斬るからね!」

「ありがとう、切ヶ谷さん。頼りになるよ」

明るく笑う切ヶ谷さんを見てだけで、張り詰めてた気持ちがふつと軽くなるみたいだ。彼女がみんなを元気づけるっていうのは、

こういうところもあるのかもしれない。

「…それじゃあ、行こうか」

僕達は裁判場へとつながるエレベーターに乗り込んだ。

エレベーターはぐんぐんと下に降りていく。

僕は、ここで笑至くんと話していた時のことを思い出していた。

『貴方を立派に探偵として成長させたいんです』

今僕は、彼がいなくても探偵役としてちゃんとやれてるのかな…？
前回の僕は間違えてしまった。彼を、大切な仲間の一人を信じきる
ことができなかったんだ。

でも彼は、希望を捨てずに戦え、と僕に教えてくれた。きっとそれは、
僕が探偵をやる上で彼が1番教えたかったことだ。

希望を捨てず、仲間を信じて戦う。

今回は絶対に、間違えない。この事件を、解決に導いてみせる…！

僕は拳をぎゅっと握り締め、裁判場へと足を踏み入れた。

——でも、この時僕は失念していたんだ。

野々熊さんを殺害した犯人もまた、この仲間の中にいるということ
を。

非日常編3

? ? ?

「それじゃあ、改めてルール確認だよ。今回の裁判では、野々熊サンを殺害したクロを見つけてね。議論の後、投票でクロを決めて、合ったらクロ1人がおしおき、間違えたらクロ以外の全員がおしおきで、クロは晴れて卒業だよ!」

「それでは、議論スタート!」

「…えっと、まずは状況を整理してみようか」

僕は心臓が早くなるのを感じながら話し始めた。1人で話を切り出すのはやっぱり緊張するな…。

「野々熊さんは2階の研究教室Ⅲ―月詠くんの研究教室のドアの前で見つかって、その後、会議室の中で頭から血を流した月詠くんが見つかったんだ」

「くぐはら達が最初に見つけました!担架も持ってきたですよ!」

芥原さんがぴんと手を上げた。ステイヴンくんも頷いて同意している。

「野々熊さんの遺体だけならまだわかるんだけど…月詠さんは、どうしてそこにいたんだろうね?」

佐島くんが不思議そうに首を傾げる。

「月詠くんは、後片付けの帰りが遅かった野々熊さんを心配して、会議室に見に行っただよ。僕達は芥原さんの鶏…えっと、ピーちゃんを探しに会議室まで行ったところで、2人を見つけたんだ」

「…なるほどね」

僕が説明を終えると彼は頷いた。

「2人を襲ったのって、同じ人なんすかね?」

片原さんが首をひねりながら僕の方を見る。

「それは…まだ分からないんだ」

「あ、そうそう、ボクちよっと思ってたんだけどさ」

僕が答え終わると、根焼くんがふいに声を上げる。

「月詠がクロのときって、どうすんの？」

「え…!？」

予想外の指摘に動揺してしまった。それは全く考えていなかった可能性だ。

「だって、月詠が野々熊さんを殺った後に偽装工作でわざと怪我したのかもしれないじゃん。ふーん、そこまで考えてなかったんだ？」

「そ、それは……」

僕が答えられずにいると、モノケンがゴホンと咳払いを一つした。

「学園長のボクが責任をもってお答えしましょう。月詠くんがクロの時はね、別の日にみんなを集めておしおきするよ！」

「なっ……」

「へー、ありがと」

モノケンがそんな風に言うってことは——信じたくないけれど、月詠くんがクロだという可能性も残っているということなんだろう。

「…確かに、ママ…じゃなかった、月詠さんが野々熊さんを殺したっていうのも有り得るかもしれないよね。近付きやすさ、みたいなものからしても月詠さんなら野々熊さんと仲がいいし、警戒されないんじゃないかな…」

陰崎さんがおずおずと発言する。

「でも、あの子がそんなことするかしらねえ？」

「おにいちゃん…やさしい…そんなこと…しない…」

揚羽くんは納得のいかないように首を傾げ、掃気さんはふるふると首を横に振っている。

「普段優しそうな人だって、案外変貌するかもしれないよ？最初の事件の時みたいに」

「佐島くん、笑至くんは…!」

彼が何気ない顔でそう発言したのに反応して、無意識に体が強ばる。それを”真実”として語らないでほしかった。

「本人が最後までやってないって言ってただけだね。真相なんてもうわからないよ」

「……ッ」

「こむぎ君、話が逸れているぞ。今はひろ君と澄輝君の話をしているんだろう?」

ステイヴンくん指摘され、ハツとなった僕は慌てて話を戻す。「ごめん。えっと、月詠くんが殺害したっていうのもありえるかもしれないけど、僕は違う可能性があるんじゃないかなって思ってたんだ」

「わかるよ、宗形さん……」

切ヶ谷さんが目をつぶってうんうんと頷く。

「野々熊さんも月詠さんも頭から血が出てたんだから、2人がたまたま頭をぶっつんこしちゃったっていう可能性だよね!」

「……」

「あれ?違うの?。(。▽。)」

この場にいる全員が苦笑いというか、呆れ顔をしている。心なしかモノケンさえも、逆の意味であまりの推理力に困惑しているように見える……。

「小町……よくその推理を言おうと思ったワね……」

「え!?違うの!?違うならもっと早く言ってよ、宗形さん!」

「ええ……!?ご、ごめん……」

「あんたも謝るところじゃないワよ」

しまった、ついコミカルな感じになってしまった……。時間にも限りがあるし、早く話を進めないと。

「そ……それで、他の可能性って何ですか……?」

荒川さんがそつと遠慮がちに尋ねてきてくれる。

「月詠さんが、野々熊さんが殺害されてるところを目撃しちゃったっていう話でしょ?」

僕が答えるより前に、佐島くんが答えてしまった。

「うん……そ、そういうことだよ……」

「で、でも、死体発見アナウンスが鳴った時間から、第1発見者は芥原さんたちじゃないの……?」

「今回は死体をクロ以外の人が発見してから3人になったところで鳴

るらしいよ！よくわかんないけど」

陰崎さんの疑問に切ヶ谷さんが自慢げに答えた。本当によくわかってないんだろうけど…。

「じゃあ、澄輝くんと他の誰か、両方の可能性がありえるってことだね」

妄崎さんはもう納得したみたいだ。流石は小説家だ、頭の回転が速い。

「え？どういうこと？桃はまだよくわかんないっす！」

片原さんの頭の中では、まだはてなマークが飛び交っているみたいだ。

「…えっと、つまりこういうことだよ」

「僕とステイヴンくん、芥原さんは3人同時に死体を見つけたから、死体発見アナウンスがどこで区切れていたのかがわからないんだ」

「なるほどー！」

「…もこも…ちよつと、わかった…:…！」

「そういうことかー、ボクもわかったよ！」

よかった、死体発見アナウンスの問題については理解してもらえたみたいだ。

「その、他の誰かについていうのに目星はついているのか？」

ステイヴンくんが僕に尋ねる。

「野々熊さんの死亡推定時刻が午後1時頃だったから、その時間にアリバイのない人…:だとと思うよ」

「H h m…僕達は芥生くんとピーちゃんを探していたし、その後宗形くんとも合流していたからアリバイはあるだろうな」

「そうだね。僕がお皿を洗ってた姿は食堂に残ってご飯を食べてた掃気さんが見てるはずだよ」

「もこ…:みてた、おさら…。おにいちゃんも、もこのこと…:みてた…:？」

「うん。掃気さんは食べるのがゆっくりだから、1時頃はまだ食堂でおにぎりを食べてたよ」

「これで僕達、芥生くん、こむぎくん、喪恋くんのアリバイは成立しているな」

その後順番にアリバイを聞いて行ったけど、僕達の他に確実なアリバイのある人達はいなかった…。

事件の真相が全く掴めないまま、時間だけが刻々と過ぎていく。

非日常編4

? ? ?

「…結局、誰がクロ?・ちまちまやってちや終わらないんじゃないの?・ボクずつと立ってるの疲れちゃったよ」

根焼くんは早くも議論に飽き始めているみたいだ。

「アリバイがない人物の中で、1人に絞り込むのはなかなか難しいな…」

「まあ月詠さんがクロじゃないとなると、この中の半分以上が容疑者つてことになるからね」

佐島くんが眉をひそめて言う。さすがの彼も少し悩んでいるみたいだ。

「ひ、ひめかは、やっぱり月詠さんが野々熊さんを1番殺しやすかったんじゃないかなって思うよ…。だって、2人とも仲良さそうだったし…」

「でも、仲良いならどうして殺したりなんかしたんすかね? 桃は友達のごことは絶対殺さないと思うっす!」

「…おにいちちゃん…ひろおねえちゃんをころしたりなんか、しない…」

「そ、そっか…そうだよな。ひめかにはやっぱり推理はまだ早いのかも…」

陰崎さんはしよんぼりとしてしまった。

「ボクも月詠じゃない気がしてきたんだよね。どっちかって言うと、そういう状況を作ること月詠に罪を着せようとしてんじゃないの?」

「うん、僕もそっちの可能性で考えた方がしっくり来るかな」

根焼くんと佐島くんも口々に言う。

とりあえず今はつきりさせないといけないのは、野々熊さんを殺害したのは月詠くんなのか、他の誰かなのか、ということだ。

そういえば、切ヶ谷さんが見つ付けてくれた証拠があつたはずだ。もしかすると、あれが役に立つかもしれない…！」

「…実は、会議室の床に血痕が着いてるを見つけたんだ」

「け、血痕？誰のですか…？」

荒川さんが血と聞いただけで、明らかに怯えた顔をする。

「それが、血の量が少なくてどちらのものはわからないんだよ」

「…それなら、僕達が持っている証拠で解決するかもしれないな！」

ステイヴンくんがそう言い、取り出したのは――

赤黒い血で汚れた、1枚のタオルだった。

「ステイヴンくん、それ、どこで見つけたの…!？」

「捜査中にメアリーが一応ゴミ箱の中身も調べた方がいいと言っていたからな、2階のゴミ箱を調べてみたら…ビンゴ！このタオルが捨てられていたんだ」

「メアリーさんはいつでもすごいなあ！」

切ヶ谷さんは目を輝かせて感心している。

「うんうん、メアリーもありがとう、とお礼を言っているぞ！」

ステイヴンくんは褒められて気分が良くなったみたいだ。

「このタオルと、床にちよつとだけ着いてた血痕があるってことは…誰かが床に着いた血痕を拭き取ったってことじゃないかしら？」

「その意見に賛成だよ！」

揚羽くんの意見に僕は同意した。

「犯人は、床に付着した血痕をタオルで拭き取ったあと、証拠隠滅のためにゴミ箱に捨てたんだ。でも、わずかに拭き残しがあつた…」

「明らかに血が出てたのは、月詠さんでしたよ！くぐはらはちやんと見えました！」

芥原さんが再び手を挙げてそう言う。別に発言は挙手制じゃないんだけど…なんだか微笑ましい。

「つまり、床に着いていた血は、月詠くんのもだったんだよ。…月詠くんは、会議室の床に頭を強く打って出血した、と考えられるんだ」
「…そして月詠くんがクロなら、偽装のために怪我をして流した血を、わざわざタオルで拭いてゴミ箱に捨てに行ったりなんてするかな？」

「そんな手間なこと、僕だったらしないな。捨てに行く途中で誰かに見つかるリスクもあるしね」

佐島くんは首を横に振る。僕は確信を持った。

「つまり、月詠くんはほぼ確実に、クロではないってことだよ……！」

「澄輝くんがクロじゃないのはわかったけど、それでどうするの……？」

「妄崎さんはへらへらとしながら聞いてくる。一応彼女も容疑者の1人なんだけども……。」

その時、再び佐島くんがつぶやいた。

「……もしそうならクロは、今までの発言の中で月詠くんを犯人に仕立てあげようとしてたんじやないのかな？」

「……！」

「そうだ、今までのどちらがクロかわからない状況の中では、犯人は自分が疑われないよう、月詠くんをクロだとみんなが誤認するように誘導するはずなんだ……！」

そして、今までの議論で月詠くんを初めから一貫して犯人だと主張していた人物は1人しかいない。それは――

「陰崎さん……君は、今までずっと月詠くんがクロだって、疑ってたよね」

「えっ……!!?」

陰崎さんはびくりと肩を震わせ、明らかに動揺した様子を見せた。

「確かに……ひめか君はずっと澄輝君について言及していたな」

ステイヴンくんも苦々しい顔で頷く。

「そ、そんな……!!陰崎さんが、そんなひどいことする訳ないじゃないですか……!!」

荒川さんが血相を変え、必死に否定する。

「どうなの？否定しないところのままクロになるよ、陰崎さん」

佐島くんが陰崎さんの方を見て静かに問い詰める。

「ひめかがそんなことする訳ないじゃん……!!ひ、ひどいよっ、ひめかは真剣に推理してただけなのに……!!」

彼女は今にも泣き出しそうな表情でまくし立てる。

「だいたいタオルでその、ドアの前の血痕を拭き取ったなんてまだ決まってるじゃないよ……!!?」

「……陰崎さん」

「な、何！なんかおかしいところでもある!?!」

「…僕は血痕が ” ドアの前 ” にあつたなんて、一言も言っていないよ」

「…あ、……………」

陰崎さんは、はつと口に手を当てた。

「あらら、自分から墓穴を掘っちゃったね〜」

妄崎さんは変わらなずにやにやとして、陰崎さんの反応を伺っている。

「ち、違う！ええっと、ひめかは、クロじゃなくて実は第1発見者なの……！野々熊さんを見つけた後、ドアの前で月詠くんが倒れてるのを見つけて、自分がクロだっと思われのが怖くて……」

「それで床の血も見たの！でも、そのままそこにいたらクロだと思われちゃうから、怖くてすぐに逃げちゃって……」

「それはさすがに苦しい言い訳じゃないかな?」

佐島くんが陰崎さんの発言を遮る。

「普通仲間が2人も倒れてるのを見つけたら誰かに知らせに行くよね。でも君は、何もせずに逃げたんだね」

「うっ……………」

陰崎さんが言葉に詰まる。彼女の顔からは脂汗がだらだらと流れている。

「…だつてツ、非力なひめかが、野々熊さんを襲えるわけがないじゃん！突然背後に回って首を絞めるなんて、野々熊さんに抵抗されたらできっこないよ……!!」

「違う、違う違う違う、ひめかは犯人じゃないツ、殺してなんかない……!!そんなアイデア、全ボツだよ!!」

非日常編5

? ? ?

??? 「ひめかは犯人じゃない!!」

????????????
「非力なひめかが野々熊さんを殺せる訳ないじゃん:!!」
「背後から近づいても、気づかれておしまいだよ!!」
「もし抵抗されたらどうするの:!!?」
「バレずに背後に回るトリックなんて、ある訳ないじゃん!!!!」

◎ リボン

△ 髪を結ぶ

□ 野々熊

? の

【野々熊の髪を結ぶリボン】

BREAK!!!

「…陰崎さんが、野々熊さんに不審感を抱かせずに背後に回る方法はあるんだ」

「そ、そんなの、ある訳が……」

「陰崎さん。君は、野々熊さんの髪を結び直してあげるふりをして背後に回り、そのまま彼女の首を強く絞めたんだ」

「……ッ!!」

陰崎さんは、何も反論できなかつた。僕は最後の推理を始める。

「…陰崎さんは、1人で片付けをしている野々熊さんを見つけ、髪を結び直してあげると言い、彼女の背後に回って首を絞めて殺害しようと

したんだ。

しかし、彼女の首を絞めている途中に、会議室に野々熊さんの様子を心配した月詠くんが入ってきてしまったんだ……！」

「突然の乱入に驚いた陰崎さんは、思わず手を離してしまい、支えを失った野々熊さんは壁に頭をぶつけてしまった。そして、突然の状況に驚いた月詠くんは駆け寄ろうとして転んでしまい、頭を強く打って倒れてしまったんだ……。」

陰崎さんはかなり焦っただろう。しかし、彼女はそれを利用し、あの計画を思いついた」

「月詠くんは野々熊さんを殺害した罪をなすり付ける計画だ。そこで、陰崎さんは月詠くんを壁際に移動させ血を拭き取り、わざと怪我をしたようにも見えるようにしたんだ。」

その後、陰崎さんは研究室のドアノブに野々熊さんの遺体を引っ掛けた。髪を縛るふりをして絞殺したとバレないようにね……！」

「そう、この事件の犯人は、君しかいないんだ！」 超高校級のギャグ漫画家”、陰崎ひめかさん……!!」

「……やっぱり、見破られちゃったな……」

「はいはい！議論終了だよ！」

陰崎さんがつぶやいた後、モノケンが元気よくそう告げた。

「ここからは投票に移りまーす！ひとりひとり、クロだと思う人に投票してね！前にも言ったけど、投票を放棄した場合はその人も死ぬからね〜」

「それでは、投票スタート！」

??? 投票先を選んでください

▷ 揚羽鳳玄

▷ 荒川幸

▷ 陰崎ひめか

▷ 笑至贄

▷ 片原桃

- ▷ 切ヶ谷小町
 - ▷ 芥原芥生
 - ▷ 佐島俊雄
 - ▷ スティーヴン・J・ハリス
 - ▷ 掃気喪恋
 - ▷ 月詠澄輝
 - ▷ 照翠法典
 - ▷ 根焼夢乃
 - ▷ 野々熊ひろ
 - ▷ 宗形こむぎ
 - ▷ 妄崎しなぐ
- 僕は、陰崎さんに票を入れた。

「それじゃ、投票結果を発表するよー！」

「さてさて、投票多数によってクロに選ばれたのは陰崎サンでしたー！さあ、ワクワクドキドキの結果発表だよー！」

「今回、野々熊サンを殺害したクロは……」

上からモニターが現れ、みんなのドット絵がくるくると回り――

陰崎さんのところで止まった。

「超高校級のギャグ漫画家」陰崎ひめかサンでしたー！おめでとうございまーす！」

モノケンの威勢のいい声と共に、天井からカラフルな無数の紙吹雪が舞い降りてきた。

? ? ?

「……………」

閉廷後の裁判場は、沈黙に支配されていた。

「…陰崎さん、君は、どうして…」

「…うん。ちゃんと話すつもりだから、安心して」

陰崎さんは落ち着いた様子で頷いた。

「陰崎さん…。どうして…：ひぐつ…：うう…：…」

荒川さんはぼろぼろと大粒の涙を零している。それを横目に見ながら、陰崎さんは申し訳なさそうに告げた。

「…ひめかは、自分の動機ビデオを見ちやっただ」

「動機ビデオ…!?!」

「ああ、あれってどんなものが映ってたの？超気になるんだけど」

根焼くんは陰崎さんの告白より動機ビデオの内容に興味津々だ。

「夢乃君、そういう態度はやめろと僕達全員が言っている」

ステイヴンくんがそんな彼を厳しい顔で注意した。

「いいんだよ。ひめかが全部悪いもん」

陰崎さんはゆるゆると首を横に振り、話し始める。

「動機ビデオには…ひめかのママが映ってた。ママはどこかに監禁されてて、泣いてて、ひめかの名前を叫んでて…すごく苦しそうだった」
「ママは、ひめかがデビューする前から、ずっとひめかの漫画を読んでくれてた…ひめかのギャグ漫画の初めてのファンは、ママなんだ。ひめかの描き始めたばかりの下手くそな漫画をママはずっと上手だねって、おもしろいねって褒めてくれた。ママのお陰で、ひめかはこのまで頑張れたの」

「だから、ママが酷い目に遭ってるのを見て、早くここから出なきゃって思った。」

ゲームが終わるまで待つてたら、とろくてバカなひめかは誰かに利用されて、笑至さんみたいに冤罪で処刑されて、ママのところに行けないかもしれない。ママを助けられないかもしれない」

「だから、クロになって卒業して、一刻も早くここから出なきゃって。殺害方法は、ひめかが自分で描いた、ママがトリックがすごいって1番褒めてくれた漫画を参考にした。それで、ひめかは野々熊さんを殺して、月詠さんを利用してクロにしようとしたんだ。」

——これで、ひめかが話せることは全部だよ」

「そんな……………」

裁判場は、再び長い沈黙に包まれた。

「そんな理由でも、おしおきされなきゃいけないんですか…!?何か、他に方法は……………」

荒川さんが必死にモノケンに向かって叫ぶ。

「…どんな理由であろうとも、あの子が人を殺したことに変わりはないワ」

揚羽くんが静かな声でそう告げた。

「そうだよ」

陰崎さんはこくりと頷いた。

「おしおきはひめかだから、ひめかがバカだから野々熊さんを殺しちゃったんだよ。でもひめかのせいで他の子が黒幕さんに騙されて、笑至さんみたいになにもやってないのに殺されちゃうのも、やだから」

そう言つて陰崎さんは、涙でぐちゃぐちゃの顔を歪めて無理やりに笑つてみせた。

「陰崎さん……………」

僕らは、それ以上彼女に向かって何も言うことができなかった。

「それじゃ、そろそろおしおきの時間だよー」

モノケンが体を揺らしながら楽しそうに言う。

悲痛そうな顔をしている面々を見て、陰崎さんは再び口を開いた。

「…みんなは、ひめかみたいになんかバカなことしないでね。みんなならきつとこのゲームを終わらせられる。ハッピーエンドにできるよ。」

だから、最後に笑って終わられるように、戦い続けてね。ひめかもずっと、どこかで応援してるから。この物語の第一のファンは、ひめかだから！」

「うんうん、よく分からない感動シーンも終わったみたいだし、やっていきましよう！」

モノケンが笑いながらそう言つてハンマーを構える。

「それでは張り切っていきましようっ、おしおきタイム！」
モノケンがボタンを叩いた。

▼いんぎきサンがクロに決まりました。おしおきを開始します。

ここは、今年のマンガ大賞の授賞式。最優秀賞候補にノミネートされた二匹のモノケンと陰崎さんは、ステージの上に立っていた。

会場はトーンやベタで囲まれた漫画の中のような白黒の世界で、陰崎さんだけがカラーの状態でステージの上に立っている。

いよいよ、最優秀賞の発表だ。会場が暗転する中、スポットライトが候補者の辺りをぐるぐると回り――

パツと陰崎さんを照らした。

最優秀賞に選ばれたのは、陰崎さんだ。彼女を応援していた観客席のモノケンの被り物を被った人達がステージに登ってきて、喜んで踊り回り、陰崎さんを取り囲む。

そしてそのまま…胴上げを始めた。

陰崎さんはモノケン達の中央で、何度も高く宙に舞い上がる。

永遠に続くかのように思われた胴上げだったが、陰崎さんをひときわ高く上げたあと、突然モノケン達が元いた場所をさっと離れた。

彼らがどいたそこには……大きな、底の深い真つ黒な穴があった。

陰崎さんは真つ逆さまに穴の中に落ちていき、鈍い音と共に、血の代わりに真つ黒なインクを撒き散らした。

その様子をモノケン達は手を繋ぎ、大爆笑しながら見ていたが、やがて見飽きたようにすたすたと去っていった…。

☆ご愛読ありがとうございました！陰崎先生の次回作にご期待ください――…！

「……………」

あまりにも、皮肉で、悲惨で、笑えない。

彼女の人生は、そんなお粗末なラストシーンを迎えて終わった。

? ? ?

暗い部屋の中に、モノケンと一つの人影が佇んでいる。

「お願いだよー、もうキミにしか頼めないんだ！」

モノケンは人影に向かって手を合わせる。

人影はため息をついた。

「…どうせ、拒否権なんてないんだろう」

「うぷぷぷ…なーんだ、わかってるんじゃない！断ったらもちろんどうなるかわかってるでしょ？」

「……………」

「ま、そういう訳で！これからよろしくね」

モノケンが握手を求めるように差し出した手には目も暮れず、人影は小さな声で承諾した。

「…うん」

【2章 END】

3章 地獄の沙汰も愛次第

(非) 日常編1

? ? ?

2回目の裁判が終わった翌日。僕は切ヶ谷さんと一緒に月詠さんの代わりに朝ご飯を作って、食卓に着いた。起床アナウンスを聞いてからしばらくすると、起きたばかりなのに疲れの溜まった顔をした面々が食堂に現れ、みんなでご飯を食べ始める。

僕は自分で作ったおにぎりを食べながら考え事を始めた。昨日の裁判後の陰崎さんの態度を見てから、僕には1つの確信のようなものがあった。

——やつぱり笑至くんは、照翠くんを殺していないんじゃないか。改めて、そう強く感じるようになった。罪を認めた上で、僕たちに励ましの言葉を送ってくれた陰崎さんとは違い、彼は最後まで自分の罪を認めずに抵抗していた。もし本当に彼がクロなら、そんなことをする必要はないはずなのに…。

やはり彼の死には、このコロシアイの根本に関わる何かが隠されているんじゃないだろうか。笑至くんはこのゲームの真相に肉薄してしまったから、濡れ衣を着せられた…？

仮説を裏付けるには証拠が必要だ、と彼ならきつと言うだろう。そう思って、僕はあの事件をもう一度調べ直してみることにした。何か証拠が掴めれば、このコロシアイを終わらせるヒントになるかもしれない…！

僕がそんな風に思っていた時、突然食堂の扉が開いた。ゆつくりと入ってきたのは…

「ごめんね。心配かけちゃったかな」

前回の事件で頭を打って保健室に運ばれていた、月詠くんだった。

「月詠くん！よかった、体はもう大丈夫…？」

「へー、生きてたんだ。久しぶり」

「月詠さんがご無事で何より！これであの絶品牛乳寒天が再び…！」
「ぶ、無事でよかったです！このまま月詠さんまで亡くなってしまうたらどうしようって、ずっと、ずっと…！」

「おにいちゃん…もこ、うれしい…！」

「おにいさんも、みんなとまた会えて嬉しいよ。モノケンが言うには手術は成功したらしいからもう心配ないよ。大丈夫、今日からまた元気に動けるってさ」

月詠くんはそう言って、柔らかかに笑った。仲間が1人戻ってきたからか、食堂は途端に活気に溢れ、僕達は会話に花を咲かせた…。

? ? ?

食事の片付けは月詠くんが手伝ってくれた。話を聞いてみると、僕の推理は正しかったらしい。

「ひろちゃんもひめかちゃんも助けられなくて…情けないね、おにいさんは」

事件に関してはそう言ったきりだったけど、彼の口調には明らかに悲しみと悔しさと、コロシアイに対する静かな怒りが感じられた。

今の彼を最初の事件の調査に付き合わせるのには申し訳なかったの
で、片付けを終えて近くの廊下にいた切ヶ谷さんと荒川さんに協力してもらい、僕は笑至くんの研究教室を調べてみることにした。

(非) 日常編2

? ? ?

笑至くんの研究教室は前に訪れた時と変わらず、大量の書類や本に囲まれた部屋だった。パツと見たところ、特に家具の配置がこの前と違うとか、新しい物が増えてるとかいった違和感は見られない。

ここに彼が何か証拠になるものを置き遺していったかもしれない。僕達3人は部屋の中を手分けして探すことにした。

「それにしても、すごい資料の数だね!」

切ヶ谷さんは忙しなく動き回り、バサバサと床や本棚の資料をひっくり返している。彼女が探しているところは既に足の踏み場がないほど散らかっていた…。

「すごい数ですけど、これは全部笑至さんが関係した事件の資料なんでしょうか…」

「もしかしたら、この学園自体についての手がかりもあるかもしれないね」

そう言いながら、僕はデスクの探索を続ける。

試しに机の上に積み上げてあったうちの1冊のファイルを開いてみると、そこには巷を騒がせた連続猟奇殺人事件から近所の迷子猫探しまで、笑至くんが解決したと思われる事件が事細かに記されていた。本当にいろんな事件に関わってきたんだな……。

その中に、表紙に何も書かれていない、高級そうな黒革でできた小さな手帳を見つけた。

「なんだろう、これ……」

中を開けてみると、どうやら笑至くん直筆のノートみたいだった。そこにはコロシアイに参加している僕達の情報や、どの部屋にどんな道具があるかなどが丁寧な字でこと細かく記されていた。

(僕の知らない間に、こんなものを…。すごいなあ、笑至くんは)

その中で目に入ったのは、根焼くんの才能に関する記述だった。様々な観点から彼の才能に対する推理が書かれている。

『知力や体力が共に高いものの、今のところ、とりたてて秀でているものはない』

わりとシビアな記述だな……。

『故にボクは、今の場では活かされない、何か特殊な才能なのかもしれないと予想する』

最終的には、そう結論づけられていた。根焼くんは自分自身でも分からないと言っていたけど、一体彼の才能はどんなものなんだろう？

「……あー！」

僕が机を大体調べ終わったあと、荒川さんが驚いた声を上げる。

「何か見つけたの？」

切ヶ谷さんと僕が近づくと、荒川さんはおずおずと紙の切れ端のようなものを差し出した。

それは“契約書”と書かれた、コピー用紙の切れ端だった。

「契約書……？」

「契約書って何？（。▽。）電気とかガスのやつかな？」

「いや、一軒家じゃないんだし、さすがにそれはないと思うよ……」

契約書——一体何を、誰が契約したんだろう……。

「さっきこの辺に置いてあったので、もしかしたら、まだ切れ端があるかもしれません……！」

荒川さんの言葉に従い、僕達はコピー用紙があった周辺を探すと、肝心な契約の内容こそは見つけられなかったものの、契約者の名前が書かれた切れ端は見つかった。

そこに書かれていたのは、笑至贄と照翠法典。家庭科室で対峙したはずの、2人の名前だった。

紙の繋がり方からしても、どう考えてもこの契約書は2人の交わしたものとしか思えない。

「どうして、この2人が……？」

証拠で事件が解決するどころか、謎はますます深まるばかりだった……。

? ? ?

笑至くんの部屋を出た僕達が真っ先に聞いたのは、モノケンの校内放送だった。

「ピンポンパンポン！オマエラに重要なお知らせがあります、各自タブレットを開いて確認するように！」

「ま、まさか…それぞれのタブレットに死体発見の情報が、とか……」

荒川さんは既にながたと震え出している。

「それはないと思うけど、とにかく、確認してみよう」

僕は自分の電子タブレットの電源をつけた。

新機能「電話」の説明？

今日から3日間限定で通話機能を使用することができます。

1人1回だけ使用できます。

通話履歴（発信者・時間等）が残ります。電話がかかってきた方は通話画面にある録音ボタンをオンにすることで、その通話内容を録音することもできます。

「電話……？」

「むしろ今までついてなかったのが不思議なぐらいだね！ふんふん、気になるなあ」

切ヶ谷さんは新機能、という言葉を見て俄然興味が湧いたみたいだ。モノケンの放送は続く。

「今回は試験運用として、通話機能を今日からあさつてまでだけ使えることになったよー！そこに書いてある通り、使えるのは1人1回だけだからくれぐれも無駄遣いしないように注意してねー。」

あと、通話は1回3分間だけ繋がるよー！それじゃ、楽しいコロシアイ生活をお過ごしくださいー！」

通話機能。単純に考えればこの学園での生活が便利になったんだろうけど…。

「…でも、これで誰かを呼び出して、殺してしまうこともできるんじゃない

ないですか……?」

荒川さんは不安そうに尋ねてくる。

「発信履歴が残るらしいし、すぐに犯人だとバレちゃうからたぶん殺人には使えないんじゃないかな……。試験運用らしいけど、誰かに襲われたときに助けを求める連絡ができるかもしれないし、重要な時のために残しておいた方がいいかもしれないね」

僕の説明に、2人は納得したみたいだ。

「宗形さんってなんだかとってもすごくなつたね！貫禄が増したというか……」

切ヶ谷さんがそう言うと、荒川さんもこくこくと頷く。

「そつ、そうかな。そう言われると、なんだか恥ずかしいな……」

「植物で例えると双葉から大樹ぐらい成長してるよ！」

「そ、そんなに……!?!」

キラキラと目を輝かせながら僕を見る切ヶ谷さんは冗談やお世辞を言ってるようには見えなかったので、褒め言葉としてありがたく受け取っておこう……。

——しっかり者の探偵に近づけてるんだったら、嬉しいな。

そのまま2人と一緒に他愛もない話をしながら、僕は寄宿舎に戻った。

(非) 日常編3

? ? ?

僕が寄宿舎に戻ると、自分の部屋のドアを開けた瞬間に誰かに腕を強く引つ張られ、左隣——根焼くんの部屋に連れ込まれた。

そこには男子全員が、妄崎さんの下ネタ講座以来の集結を果たしていた。

「こっこれ、何の集まりなの…!?!」

驚く僕に、根焼くんはしーつと言い、そのまま耳元で囁いた。

「宗形。お前女子の裸にキョーミある?」

「……………へ?」

? ? ?

《3章イベント 覗け!大浴場のロマン》

? ? ?

「え、えつと……………は、はは、裸ってどういうこと…?」

「へー、キョーミあるんだ。ムツツリじゃん」

「いや、興味があるって訳じゃ…!」

「いーからいーから。じゃ、こつちに座って作戦会議しよ」

根焼くんに言われ腕を引つ張られるがまま、床の適当な空いているスペースに座ってしまった。

「みんな集まったところで説明始めるけど」

そう言つて根焼くんは、自分のベッドにもたれかかったまま話し始める。

「噂に聞いたところだと、今日女子全員が親睦を深めるために同じ時間に風呂に入るらしいんだよねー。いつもなら他の女子が来るのを警戒しなきゃだけど、今日はその必要も無いからさあ…」

「覗きに行こう。大浴場を」

「倒置法ですごいくだらないこと言ってるね」

佐島くんが何の感慨もなくツツコむ。

「…それで、なんであたし達全員を必要があつたワケ?」

揚羽くんが呆れたように彼に尋ねる。

「いや、人数が多い方が見張り役とかできるし成功しやすいじゃん？」
「ていう訳で、分担決めようと思うんだけど、見たい人々」

根焼くんが適当に拳手を募る。ここで手を挙げるか、挙げないか。うう、迷ってしまう…。

「待ってくれ！只今全員で協議中だ」

ステイヴンくんは頭を抱え込んでいる。他のみんなは手を挙げていないどころか、あまり関心がなさそうだ…。

「…え？いないの？」

根焼くんがさすがに動揺したような顔をする。

「おにーさんは変なことしないようにむのくんを見張ってるだけだからね…」

「あたしはそもそも女湯よ」

「そんな不埒なこと考えるのは根焼さんだけじゃないかな？」

矢継ぎ早に続く容赦のないコメントで、呆気なく否定されていく根焼くんだった。

「んー、じゃ、ボクが全部役割決めるけどいいよね？」

真っ向から批判され続けたのが心に來たのか、ついに絶対王政的な考えに至り始めたらしい。根焼くんは指名式にたどり着いた。

「覗く権利があるのはボクと、お前と、お前。あとは見張りな」

「…ええ？」

「僕達か!？」

根焼くんの指先は僕と、ステイヴンくんに向けられていた。

「だって、お前らが1番行きたそうな顔してたし」

「そ、そんな顔してないよ!」

「確かにジャックは行きたい行きたいと意気込んでいたがな…」

ステイヴンくんは考え込んでいる。僕も別に、まあ、行きたくない訳ではないけど……。

「後は念の為、見張りに徹してねー」

「あたしがあなたの言うこと聞く義理あるのかしら…」

「まあまあ、みんなで仲良くやろうよ。おにーさんも一緒に見張って

るから、何しでかすかわからないし…」

「僕は別に、どっちでもいいけどな」

そんなことを言いながら、男子全員がぞろぞろと大浴場に向けて移動を始めた。

大浴場に着く前に、根焼くんは入口の前に位置どって壁にそつと耳を当てた。

「な、何してるの?」

「しーっ。入浴前の会話を聞いているの、見ればわかるでしょ」

「わ、わかんないよ……!」

とはいえ僕だけが立ったままなのもまずい気がするので、その場にしゃがみこむと本当に女子のみんなの話し声が聞こえてきた…。

「…小町ちゃん、意外と胸あるんだね」

「ボクは成長期だから! 妄崎さんほどじゃないけど」

「ふふ、お姉さんの座は譲らないよ」

「ややっ!? くぐはらもボーンキョッポーン! ですよ!」

「そんなことより早く湯船に浸かりたいっす! ここに入浴剤も置いてあるっすよ」

「わあっ、いろんな色があつて迷っちゃいますね…!」

「もこ…この、黄色がいい……」

「いいねいいね、裸の付き合い…」

根焼くんは大仰に頷いて立ち上がると、おもむろに寄宿舎を出た。覗き方もわからない僕達はそれについていくしかない。

「根焼くん、どこに行くの…?」

「覗き。寄宿舎の外の窓から見えるんだよ。月詠と揚羽には浴場の前で見張りしてもらってるけど」

佐島くんには入口の近くを見張ってもらうことにしたらしい。寄宿舎の外に出ると、本当に女子の大浴場の部分に小窓があった。

根焼くんはすぐさま覗き込む。

「……………」

何も言わないのが逆に怖い…。しばらくすると無言で場所を交代するよう促された。僕はおずおずと小窓を覗き込んだ。

そこは——天国と言い表すのがいいのか、桃源郷と言うのがいいのか。

とにかく、すごい、ものすごい空間だった。

根焼くんが無言になった理由もわかる気がする。僕は場所を交代して、今度はステイヴンくんが覗き込む。

「……………」

やっぱりみんなあの光景を見ると無言になるんだな…。

「ちよ、もう1回見せて」

何回か交代で覗き、根焼くんがそう言ったその時、彼の端末の電話が鳴った。

「チッ、邪魔が入った……」

根焼くんはタブレットを取り出すと、発信者も見ずに通話ボタンを押した。

「誰？何の用？」

「もしもし、佐島です。今からそっちに切ヶ谷さんが行くよ」

「は？」

「何回も覗くから気づかれたんでしょ、自業自得だよ。じゃ」

電話が佐島くんによって一方的に切られた数秒後、

僕達は初めて、恐ろしいほど冷たい目の、薙刀を握った切ヶ谷さんに出会った。

「モノケン、死体発見アナウンスの用意しといてね……」

根焼くんは力なくうなだれた。

その後、僕達だけでなく男子全員が巻き添えになり、女子達の蔑むような視線の中、夜通し切ヶ谷さんの特別筋トレメニューをやらされたのは言うまでもない。

(非) 日常編4

? ? ?

翌朝、朝ごはんを食べた後、僕は切ヶ谷さんと廊下を歩いていた。彼女と一緒に行動するのもだんだん当たり前のようになってきて、いつも笑顔の絶えない切ヶ谷さんの隣にいます、自然と僕まで明るい気持ちになってくる。

「…あー宗形さん、ボク、今日はステイヴンさんと体育館で戦闘訓練をするんだ!」

「戦闘訓練?」

「そう、トレーニングは続けててもやっぱり長期間実践的な訓練がないと体が鈍ってくるから、2人で実戦をやらうって話をしてたんだよ。よかつたら見に来ない?」

「へえ…僕でいいならぜひ見に行くよ!」

2人のバトル姿はあまり想像できないけど、面白そうだ…!僕達は準備のために、彼女の研究教室へ向かった。

? ? ?

切ヶ谷さんの研究教室は、柄の色や刃の長さの違う無数の薙刀が置かれていて、簡単なトレーニング器具なんか置いてあり、真ん中にはちよつと動けるような広いスペースもある。まさにアスリートのお部屋、って感じですごいなあ…。

「薙刀って、日本刀とどう違うの?」

いろんな薙刀を手当たり次第に物色している切ヶ谷さんに聞いてみる。

「広く捉えれば日本刀の一種とみなされるんだけど、薙刀は切るんじゃないくて、相手を薙ぎ払うんだ」

「薙ぎ払う…?」

「日本刀と比べて、リーチが長いんだよ。ほら、柄の部分が長いでしょ?」

そう言つて切ヶ谷さんが見せてくれた薙刀は確かに柄が長く、刀と言ふより槍と言つた方が近い感じだった。

「あとはこの刃が先反りしてるのが特徴だね。これで相手を薙ぎ払うんだよ」

「なるほど…」

切ヶ谷さんはその後も薙刀のことについてすらすらと詳しく解説してくれた。本当に薙刀が好きなんだろうな…。

「うん。やっぱりいつも使ってるのがしっくり来るね。よいしょー→」

切ヶ谷さんはしばらくいろいろなものを振つて試したあと、その中の一本をひよいつと袋に入れた。

「よし、行こう！悪！即！斬！」

「ステイヴンくんは悪者じゃないけどね…」

切ヶ谷さんは意気揚々と体育館へと繰り出していった。

体育館に着くと、既に結構な人が集まっていた。

「ステイヴンさんが呼んでくれたんだねー」

「切ヶ谷さんの薙刀の腕前を見るの、楽しみだよ」

「ありがとう！」

切ヶ谷さんにはにっこりと笑つてそのままステージの方に行こうとしたが、何かを思い出したようにぱたぱたとこつちに戻ってきた。

「そうだ、宗形さん！ボクにパワーをさずけて！」

「ぱ、パワー…？」

「そう！はい、手を出してー」

僕がよくわからないまま手を出すと、切ヶ谷さんは突然その手をぎゅつと握つた。

「き、切ヶ谷さん…!？」

「…父上が、戦いの前にはいつもこうして手を握つてくれてたんだ」

「こうすることで、応援してる人のパワーをもらえるんだって」

「…がんばってね、切ヶ谷さん。応援してるよ」

僕は彼女に伝わるように小さな手をきゅつと握りしめた。

「うんっ、元氣100倍！絶対勝つからね！」

そう言つて切ヶ谷さんは眩しい笑顔で手を振つて、ステージの方へと駆けていった。

——どうしてだろう、脈が早いし顔が熱い。自分の心臓の音が痛いほど聞こえてくる…。

心臓が暴れ出しているような気持ちを紛らわすために、僕はステージ前の人達と合流した。

「やあ。君も来たんだね」

ステージ前に行くと、佐島くんが声をかけてきた。

「うん。佐島くんも見に来たんだ」

「ステイヴァンさんに誘われてね。掃気さんもその場にいたから誘つて一緒に来たんだ」

彼の指さした方を見ると、掃気さんが床にちよこんと体育座りをしていた。

周りを見ると、切ヶ谷さんと話している間にほぼ全員が体育館に集まったみたいだ。ステージ前にいないのは切ヶ谷さんとステイヴァンくんと、揚羽くんだけだ。

「ねえ、どっちが勝つか賭けようよ」

しばらくステージの様子を伺っていると、不意に根焼くんが僕と佐島くんに声をかけてきた。

「賭けるって…何を？」

「そうだなあ…じゃあ負けた方がなんか秘密をバラすってことで」

「ふうん、ちよつとおもしろそうだね」

佐島くんは乗り気になつたみたいだ。僕も2人の秘密がどんなものなのか気になるな…。

「ボクはステイヴァンに賭ける。薙刀が銃にスピードで勝てると思えないからね」

「僕もステイヴァンくんかなあ…」

根焼くんと佐島くんはステイヴァンくんの勝ちに賭けるみたいだ。

「…僕は切ヶ谷さんにするよ」

「へー。なんで？」

「なんで…うーん、切ヶ谷さんの勝ちを信じたい、って言えばいいのかな…」

「すごいふわふわしてるね」

「ま、困るのは宗形だしいいでしょ」

「じゃ、とっておきの秘密楽しみにしてるよ」

僕にその声をかけて根焼くんは1人離れたところにあぐらをかいた。僕も適当なところに座り、始まるのを待つ。

しばらくすると、薙刀を持った切ヶ谷さんと銃を持ったステイヴンくん、小ぶりの紅白旗を持った揚羽くんがステージ上に姿を見せた。

「はい、これから戦闘訓練を始めるわよ！レフェリーはあたし、揚羽玄が務めるワ」

そう言つて揚羽くんは僕達に向かってうやうやしくお辞儀をする。上品な仕草がすごく様になつてるなあ…。

「それじゃあこれから、ルール説明よ」

「ルールは簡単。銃に入ってるゴム弾が相手の体に当たるか、薙刀が相手の急所に刺さる位置まで突きつけられたら勝敗は決するワ。それじゃあ、両者位置について」

ステージの上にいる切ヶ谷さんは向かって左、ステイヴンくんは右に移動する。

「お手合わせ願うよ、ステイヴンくん！」

「こちらこそよろしく頼むぞ、小町君！」

そうにこやかに挨拶を交し、2人はお互いの武器を構えた。

ステイヴンくんは興奮した面持ちで愛用だというアメリカ製の銃を構える。

一方、切ヶ谷さんは薙刀を構えた瞬間——顔つきが変わった。

「……………」

その眼差しは鋭く、虎視眈々と相手の急所に狙いを定めている。

「それじゃあ準備はいい？」

揚羽くんが旗を握り直す。2人は無言で頷いた。

「では、切ヶ谷小町対ステイヴン・J・ハリス…」

そこで揚羽くんは間を持たせ、僕達観客はつられてごくりと息を飲む。

「戦闘、始め！」

揚羽くんが勢いよく旗を振り上げた。

その合図の瞬間、2人が目にも止まらぬ速さで動き出す。

パン！という破裂音と共にステイヴンくんの銃からゴム弾が放たれ、切ヶ谷さんの足元を狙う。

切ヶ谷さんは前にジャンプしてそれを華麗に避け、銃を落とそうとステイヴンくんの手元を狙ったが、彼はマントをひらりと返してそれをかわす。

そのまま2発目のゴム弾が放たれ、薙刀を伸ばして不安定な体勢になっていた切ヶ谷さんはすんでのところでそれをかわす。

「くっ……！」

「どうした小町君、焦っているのか？」

苦しそうな切ヶ谷さんに対して、ステイヴンくんはまだまだ余裕がありそうだ。

「…切ヶ谷さんっ、がんばれ!!!」

僕は自分でも気づかないうちに立ち上がって、出せる限りの大声で叫んでいた。切ヶ谷さんがはつとしたように僕の方を見る。

そして、強く頷いた。

そこから、切ヶ谷さんの猛攻が始まった。さつきとは正反対に、今度はステイヴンくんが追い詰められていく。

「2人ともがんばってください……！」

「負けるなよ、ステイヴン！」

「そこ…急所を狙うつすよ！」

周りの声援も大きくなっていき、体育館のボルテージは最高潮になる。

「…ッ！」

切ヶ谷さんの鋭い攻めに耐えかね、ステイヴンくんが体勢を立て

直そうとしたその瞬間――

「やつ!!」

気合を入れた掛け声とともに、切ヶ谷さんの刃先がステイヴンくんの喉元に突きつけられ、

「勝負あり!」

揚羽くんが大きく頷き、白い旗を上げた。

彼女は一礼して、無言のまま静かに薙刀を置き：僕の方へ一目散に駆け出してきた。

「宗形さん!! やった、ボク勝ったよ!!」

その勢いのまま僕は切ヶ谷さんに抱きつかれる。

「き、切ヶ谷さん、ちよつと……!」

「もう負けそうだって諦めかけた時、宗形さんの声が聞こえて、気合いが入ったんだ! 宗形さんのお陰で勝てたよ、ありがとう!」

「そんな…切ヶ谷さんがすごかったからだよ、僕は思わず声を出しちゃっただけで……」

「それでも嬉しい! 近くに応援してくれる人がいるって、こんなに心強いんだね……!」

切ヶ谷さんは目を輝かせてそう言った。

「少しでも役に立てたならよかったよ」

「キミがいれば百人力だね!」

切ヶ谷さんはバシバシと僕の肩を叩くと、ステイヴンくんの元へ走っていった。

にこやかに握手を交わす2人。見てることちも興奮するような、正々堂々とした試合だった。観客の僕達は、そんな2人に自然と拍手を送っていた。

「いやあ、ブラボー! エクストリームな試合だったねー!」

聞き覚えのある声に振り向くと、ステージ上にはいつの間にかモノケンが立っていた。途端、体育館の空気がぴりっとする。

「やだなあ、そんなに怖い顔しないでよー! 学園長のボクから素晴らしい試合のご褒美として、勝者にプレゼントをあげようと思ってね!」

「プレゼント…?」

「そう！勝者の切ヶ谷サンにはボクからこれをプレゼントしまーす！」

そうやってモノケンは、切ヶ谷さんに1冊の本を手渡した。

「え?なにこれ? (。▽。)」

「表紙にはなんて書いてあるんだ?」

ステイヴンくんが渡された本を覗き込む。

「…黄泉がえりの、書?」

ラツパを持った天使の絵が描かれた表紙には、おどろおどろしい文字でそう書かれていた。

「スペシャルアイテム、『黄泉(よみ)がえりの書』だよ。これを生徒にあげちゃうなんて、やっぱりボクは学園長としての器が大きいなあー!」

「…これって何をするものなの?」

僕も近くに行ってモノケンに聞いてみる。

「本の中にも書いてあるんだけど、簡単に説明すると…」

「…死者を1人だけ、甦らせることができる本だよ」

「ええー!?!?!」

切ヶ谷さんが無駄に大きいリアクションでのけ反る。

「死者を、甦らせるって…」

「今まで死んだ奴らが生き返るってコト?」

「そうだよー!この本の手順に沿えば、オマエラの選んだ好きな人間を1人だけ、生き返らせることができるんだ!」

「いや、そんなことできるはずがないよ…!1回死んだ人が生き返るなんて…」

僕は否定する。どう考えてもありえない話だ。それに、いくらご褒美だからって何の代償もなしに突然こんなものを渡されるなんて、なんだか嫌な予感がする…。

「ま、信じるも信じないもオマエ次第だよ。好きに使ってねー」

モノケンはそうやって口笛を吹きながら体育館を去っていった。

この本が、今後の僕達にどんな結末をもたらすのか。まだ僕には予

想もつかない。

ちなみにその後には2人が教えてくれた秘密というのは、佐島くんは小学校の時にUFOを見たことがあるというなんとも嘘っぽい秘密で、根焼くんのは覚えておくのにも値しないものだったので省略しておく。

? ? ?

戦闘訓練も終わり、夕食を食べ終わった僕は切ヶ谷さんと一緒に寄宿舍に戻った。

「本当に今日の切ヶ谷さんはかつこよかったよ」

「えへへっ、宗形さんのパワーがあつたからね!」

そんな会話をしながら僕達は自分の部屋に入った。

ドアを閉じた僕は、1つため息をついた。

(…やつぱり)

切ヶ谷さんと話しているとドキドキするし、ふわふわした気持ちになつてくる。彼女の笑顔を見ただけで胸がきゅっとなる。

——この気持ちの正体は、もう分かつていた。今まで自分で気づいていないフリをしていただけだ。

(僕は、切ヶ谷さんに恋してるんだ…)

天真爛漫で、太陽のように眩しい彼女。僕はその姿にはつきりと惹かれていたんだ。

もつと一緒にいたい。彼女といろんなことをしたい。認めた瞬間、そんな想いが次から次へと溢れ出てくる。

僕はベッドに飛び込むようにして転がった。ばふつと布団が沈みこんで音を立てる。枕元には手塩にかけて育てているはなちゃんがいる。

「どうしよう、はなちゃん……」

そのまま何をする気にもなれず、僕はしばらく無気力にベッドにごろんと寝転がり、いつの間にかそのまま眠ってしまった。

いつもより、やけに暑い夜だった。

(非) 日常編5

? ? ?

翌朝。朝食を食べに食堂に行くと、いつも僕より早く来ているはずの切ヶ谷さんの姿が見えなかった。

(どうしたんだろう?まさか…)

ふつと嫌な想像が頭をよぎったその時、

「ないないない、なーい!!!」

切ヶ谷さんが叫び声を上げながら、食堂に走り込んできた。

「ちよつと…どうしたのよ、小町」

「大変なの、昨日使った薙刀がなーい!」

「薙刀が…?」

昨日の戦闘訓練で活躍した、あの薙刀のことだろう。随分お気に入りであったみたいだし、そう簡単に無くすことがあるんだろうか?

「小町、落ち着きなさいよ。とりあえず手分けして探してみましょ」

こうして僕たちの朝は、切ヶ谷さんの薙刀を探すところから慌ただしく始まった。

? ? ?

薙刀探しは揚羽くん、荒川さん、妄崎さん、佐島くん、掃気さんの5人が手伝ってくれることになり、何グループかに分かれて探し始めた。

「小町、あなたもしかして体育館に置いてきたんじゃないの?」

「確認してなかった…」

みんなと別れた後、揚羽くんの問いかけに切ヶ谷さんは愕然とした表情をする。

僕と切ヶ谷さん、揚羽くんの3人はまず体育館を見に行くことになった。

「うーん、ないなあ…」

しかし、どこを探しても昨日の薙刀は見当たらない。

「じゃあ、小町が帰ってくる途中にどこかに置いてきたんじゃないの？」

「そうかも……」

切ヶ谷さんはまたコクコクと頷く。本当に彼女には心当たりがなさそうだ。

「あつ！でもその前にトイレに行きたい！」

切ヶ谷さんはハツと気づいたように揚羽くんと言った。

「そのぐらい1人で行けるでしょ？あたし達は体育館をもう少し探してるから、行ってきなさい」

「はいー！」

切ヶ谷さんは返事をする、ものすごいスピードで出口の方へ走り去っていった。よっぽど我慢してたのかなあ…。

「あの子を怖がらせないようにと思って直接言っではないけど…誰かが盗んだ可能性もあるかもしれないわね」

揚羽くんはステージの上を探しながら、小さくため息をついた。

「薙刀を盗む…？そんなことする人いるのかな…」

「まあ、あくまで可能性の話よ」

「…そうだよね……」

彼女の薙刀を盗んだところで、大きなメリットがあるとも思えない。やっぱり、切ヶ谷さんがうつかりどこかに置き忘れた、という説が有力な気がする。

ステージの裏なんかも探してみたけど、薙刀は一向に見つかりそうになかった。

「他の人達は今どうしてるんだろう…」

「電話をかけてみたらどう？こういうみんなが離れてる時にこそ有効なんじゃないかしら」

「なるほど、そうだね！」

僕はタブレットの電源を入れて、電話機能の画面を開いた。

？

？

？

暗い部屋に、人影がある。そこには無数の巨大なコンピューターが置かれている。

「……」
人影はタイミングを見計らっている。実行の機会を。

「……………」
まだ、早い。息を潜めて”その時”を待っていた。

? ? ?

(うーん、誰に電話しようかな…)

荒川さんと安崎さんは寄宿舎、佐島さんと掃気さんは別館付近を探している。どちらにかけるのがいいんだろう。

迷っているうちに、突然タブレットが小刻みに震え出した。どうやら誰かから着信があるみたいだ。慌てて通話ボタンを押す。

「……………」
電話の向こうからは、沈黙と小さなノイズ音だけが聞こえる。そういえば、焦ってしまって発信者を見るのを忘れていた。

「…もしもし?」
僕が恐る恐る話しかけると、か細い声が聞こえてきた。

「……………た…す…け、て……………」

それは——聞き慣れた、切ヶ谷さんの声だった。

「…切ヶ谷さん?切ヶ谷さん!!」

その声を最後に、プツツと電話は切れてしまった。

「小町に何かあったの?」

揚羽くんが訝しげな顔をして僕に尋ねてくる。

「わからない…でも、助けてって……………うわっ!」

僕が説明しようとした矢先に、タブレットに2回目の着信があった。

発信者は——荒川さんだ。

「もしもし、荒川さんどうしたの？こっちも今ちよつと立て込んで…」

「あ、む、宗形さん…！すぐ、か、管理棟の美術室に…！！」

嗚咽とともに、彼女の必死な叫び声が聞こえてきた。

「管理棟…？何があったの!？」

「あ、あの、え」

その瞬間、辺りが真っ暗になった。

「停電…!？」

荒川さんと繋いでいた電話も、その瞬間に切れてしまった。切ヶ谷さんにも、荒川さんの側にも何かあったのは確かだ。

「…さっきの電話は？」

すぐ近くから、揚羽くんの声が聞こえてくる。

「荒川さんから。向こうでも何かあったみたい…」

「そう、じゃあ二手に分かれた方がいいわね…」

臆病な荒川さんはきつと、僕のことを信頼して電話をかけてくれたんだ。今はその信頼に報いるべきだろう…。

「揚羽くん、2人で手分けして会いに行こう。僕は荒川さんの方へ向かうよ」

「了解。あたしは小町の方に行くワ。急ぎましよう」

僕達2人は体育館を出て、暗闇の中を慎重に進んだ。

転ばないように気をつけながら校舎内を進むのに苦戦し、僕が美術室の前にたどり着いたのはかなり時間が経ったあとだった。

「荒川さん！」

「あ、あ、宗形さん…」

暗闇に目が慣れてきたのか、怯えた顔をした荒川さんがかろうじて見える。

その時、パツと廊下や教室に明かりが戻った。思わず眩しくて目をつぶる。

再び目を開けると眼前に広がったのは、ドアが開けっ放しになっていた、美術室の内部の景色だった。

そこには——片原さんの変わり果てた姿があった。

「片原さん…!？」

「ひぐっ……宗形さん……どうしましょう……どうして、片原さんが……」

荒川さんは泣きじやくっている。彼女と一緒にいた妄崎さんは何も言わずに、腕を組んで静かに美術室の中の様子を眺めている。

片原さんはその出血量からして、どう見てももう助かる見込みはなさそうだった。

そして、あの忌々しいアナウンスが廊下に鳴り響く。

『ピンポンパンポーン！死体が発見されました、オマエラ、すぐに現場の管理棟1階の美術室へ向かってくださいー！』

「……ッそうだ、切ヶ谷さんは……!」

揚羽くんからまだ連絡はない。電話をかけるより早く、足が動いた。

「ごめん、2人ともあとはお願ひ!」

僕は全速力で本校舎へと駆け戻った。

息を切らしながら本校舎に着く。切ヶ谷さんの研究教室の前に、揚羽くんが呆然と立ち尽くしていた。

「どうして……どうしてなの……」

嫌な予感がして、無我夢中でそちらへ駆け出す。彼の視線の先では

切ヶ谷さんが、死んでいた。

「……………」

死体発見アナウンスを聞きつけ、美術室に向かうはずだったであろうステイヴンちゃんと芥原さんが、彫像のように動かない僕らの前を通りかかる。

「……なっ……小町君!？」

「やっ……!？」

当たり前前の出来事のように、慈悲もなく、僕の耳にあの放送が鳴り響く。

『ピンポンパンポーン！死体が発見されました、オマエラ、すぐに現場の本校舎2階の研究教室ⅠⅤに向かってくださいーい！』

「……………」

何も言葉を発せない。今すぐ目を逸らして顔を背けてしまいたいのに、まるで石になる呪いにかけられたみたいに体が固まっている。

その光景は、僕の淡い希望も、眩しい思い出も、何もかもを打ち砕いた。

【3章 日常編】 END

非日常編1

死体発見アナウンスを聞いた他のみんなが集まり、3回目の捜査が始まる。

「……」

何かしなきゃと頭の中では思うのに、体が動かない。ただひたすらに無力感と脱力感に襲われている。

片原さんに、切ヶ谷さん。どうして一気にこんなことに……。

「…何やってるの！」

僕が切ヶ谷さんの遺体の前に立ちすくんでいると、いつの間にか隣にやって来ていた揚羽くんが険しい顔でぺちんと僕の頬を叩いた。

「あ痛っ…!?!」

「あんたが捜査しなきゃ…小町もあの子も、報われないワ」

「……」

そうだ。何ぼうつとしてるんだ。

僕達が犯人を見つけ出さないと、2人は浮かばれないままな上に、クロを除いた他のみんなも処刑されることになってしまう。こんなところで止まっている訳にはいかない……!

「ありがとう、揚羽くん」

「…いい顔つきになったじゃない。あたしも手伝うから捜査を始めましよ」

(まずは、タブレットを確認しないと…)

僕はタブレットの遺体情報を見ようと、急いで電源ボタンを押した。

「……あれ?」

画面は暗いまま、全く動く気配がない。

「おかしいな、故障かな…揚羽くん、タブレット見せてもらっていい?」

「イイわよ。…あら?」

揚羽くんのタブレットも同じように電源がつかない。

僕達が首を傾げていると、その時を待ち構えていたかのようモノケンが現れた。

「申し訳ないけど、今回の捜査でタブレットは使えないんだー」
「え…?」

「さっきの停電の影響でタブレットの回線がダウンしちゃってさ、情報が配信できなくなったんだよねー」

「そ、そんなー!」

あれがなければ、死因も死亡時刻も確認できないじゃないか…!

「だから、今回は現場の調査だけで頑張つてクロを突き止めてね! それじゃー!」

「え、ちよつと!」

モノケンはそう言い放つと一目散に逃げ出していった。追いかけてもとても捕まえられそうにないスピードだ。

「タブレットにあったはずの情報すら、教える気がないってことね… しょうがないワ、早く調べ始めましょ」

「そうだね…」

今の僕たちには前に進むしか選択肢がない。捜査を始めよう…。

? ? ?

切ヶ谷さんの遺体。血だまりの中に倒れている彼女を見るだけで胸が苦しくなる…。

「出血は背中からと胸、かな」

「そうね」

切ヶ谷さんの胸の辺りに置かれていた腕をどけると、そこには刺し傷があった。凶器は一体なんだっただろう…。

「凶器なんて、この部屋にはいくらでもあるワ」

揚羽くんが辺りを見回してそう言う。部屋中に薙刀が置かれていることは、確かに殺人には絶好の場所だろう…凶器に付いた血は拭き取ってしまえばバレることはない。

「そういうば、揚羽くんはどうして切ヶ谷さんがここにいるってわ

かったの？」

そう尋ねると、揚羽くんは苦々しい顔をした。

「あんたは管理棟の方から来たからわからないでしょうけど、ここの階段に血痕がいくつもついてるのよ。そしてそれはこの部屋に繋がってた…」

一旦教室を出て廊下を見ると、ぱたぱたと血の垂れた跡があった。

「あたしは軍人だから、一応夜目が利くような訓練はしてあるのよ」

「だから、停電の中でこの血痕を見つけて、ここまで来たら……」

そこまで言って、揚羽くんは一つ大きなため息をついた。

「…あたしが見た時には、もう手遅れだったわ」

「……」

僕達は部屋の中に戻り、もう一度死体を検分する。

「この背中への傷は、何でできたんだろう」

「これは…傷跡からして、矢じゃないかしら」

「矢？でも、この学園にそんなものあるのかな？」

「…あたしの研究教室に毒矢があるのよ。誰かが盗んだみたいね…」

2人で揚羽くんの2階の研究教室に行くと、いくつも矢が置いてあった場所にぽっかりと空間ができていた。

「一応言っておくけど、矢が使えたのはあたしだけじゃないわよ？ドアは開いてたから、誰でも盗めるワ」

揚羽くんは僕と一緒に体育館を探していたから、あの時毒矢を使って切ヶ谷さんを襲うことはできない。

ということやはり、誰かが揚羽くんの研究教室に入り、毒矢を盗んだんだろう…。

「じゃあ、毒矢がどこかに置いてあるかもしれないね」

探すついでに1階に降り、彼の言っていた血痕を見てみることにした。

確かに階段の付近から、朝にはなかったまだ乾いていない血の痕が上まで続いている。

「きつと小町はここで毒矢に当たって、その後研究教室まで逃げて薙

刀で殺されたのよ」

「背中の傷は浅かったから、あの1発では仕留められなかったってことかな…」

2人で話し合っていると、隣の空き教室の景色がふと目に入った。

「揚羽くん、あれって…」

「あらー！」

教室の机の上に、矢のセット一式が置かれていた。中には——血のついた矢もある。

「…間違いないわね」

犯人は、これで切ヶ谷さんの背中を射ったんだ…。

「…切ヶ谷さんについて調べられるのは、この辺りかな」

「じゃあ、次は美術室に向かいましょ」

僕達は美術室に向かいつつ、経路の確認をする。

「管理棟に行けるのは、本校舎の2階からだね」

「そうね。1階には食堂があるから階段を登るしかないワ」

犯人がもし同一犯でも、時間と人目さえあれば、どちらを先に殺したとしても犯行は十分可能だろう。

そんなことを考えながら、僕らは美術室に到着した。

美術室には、第一発見者の荒川さんと妄崎さんがいた。他にもぱらぱらと人が集まっている。さっき切ヶ谷さんの研究教室にいた人たちと合わせれば、全員がちゃんと揃っている。

片原さんの遺体は、改めて見るとその凄惨さが伝わってくる。

彼女の小さな体からたくさんの血液が溢れ出ている様子はとてもじつと眺めていられるようなものではない。僕はたまらず目を逸らし、遺体の周辺の捜査から始めた。

凶器はすぐに見つかった。

切ヶ谷さんが探していたあの薙刀が、べつとりと血のついた状態で少し離れたところに放り出されていたのだ。

「小町の薙刀をこんなことに使うなんて…」

揚羽くんは唇をぎゅつと噛み締めた。

「やっぱりそれが凶器だよね」

妄崎さんは机にひよいと腰掛けながら僕達に話しかけてくる。

「私たちが第一発見者だよ。と言っても先に見つけたのは幸ちゃんだけだよ」

「は、はい……私が見つけました……」

荒川さんがこくりと頷く。

「寄宿舎を探し終えたので、妄崎さんと相談して時間があるから管理棟の方も行ってみる事になって……なんとなく、嫌な予感がしたんです。そしたら……」

荒川さんはその時のことを思い出したのか、顔が青ざめてきて、目には涙を浮かべている。

「……あんたも大変だったワね」

揚羽くんが荒川さんの背中をトントンと叩いて慰めた。

「それで、お姉さんが桃ちゃんが生きてるかを確認してる間に幸ちゃんには他の生きてそうな人に電話をかけてもらったんだ。3人じゃないと死体発見アナウンスは鳴らないからね」

「なるほど……」

それである時の電話に繋がる訳か。そして通話中に停電が起こった……。

僕はそうつと片原さんの近くに行き、傷を確認する。

胸とお腹の中間あたりに刃物で刺された傷があった。片原さんの表情には、驚きと苦悶が混ざっている。彼女が刺されてしまったのはきつと突然のことだったんだろう。

そういえば、切ヶ谷さんの遺体の表情は彼女とは違ったような……？

この違和感は何かに繋がるかもしれないな……。

「……刃が横向きに刺さってる」

揚羽くんが片原さんの遺体を見て静かに呟いた。

「横向き？」

「肋骨の間に滑り込むようにして刺してる。普通、刃物に慣れていない人間が焦って相手を刺すとしたら、刃は縦向きになるの。そうじゃないってことは、明確な殺意があったってことよ……つまりこれは突発

的な犯行じゃないワ」

「誰かが、あらかじめ計画してたってこと…?」

「その可能性が高いわね」

「そんな……」

でも確かに、1人で美術室に来る用事なんてそうないだろう。誰かが片原さん呼び出していたんだろうか…。

美術室の奥の方や机の中なんかも一応調べてみたけど、他には特に何も見つからなかった。

「調べられるところはこのぐらいかしら」

「うん。そうだね」

「やっぱりタブレットの情報がないと分からないことが多いな…」

「少なくともこの中に犯人がいるのは確実なんだから、探せばそのうち見つかるよ。大丈夫大丈夫」

妄崎さんは相変わらずお気楽な様子でひらひらと手を振る。

「辛い事実ではあるけど、確かにそうだよね…」

悲観的になりすぎると、大事な真実も見えてこなくなってしまう。気持ちを切り替えよう。

「ピンポンパンポーン！捜査終了です、全員裁判場前まで移動してくださいーい！」

モノケンの陽気な声の放送が入った。いよいよ裁判が始まる…。

僕達は静かに別館へと移動した。モノケンがボタンを押すと、巨大なエレベーターが現れる。

「……………」

エレベーターの中は、どんよりとした沈黙が支配していた。だんだんここに乗っている人数が少なくなっているのが、身に染みてわかる。

僕の隣に立って励ましてくれた笑至くんも、切ヶ谷さんももういない。そう考えると目元が熱くなってくる。

…だめだ。泣くのはまだ早い。

切ヶ谷さんと片原さんを殺した犯人を見つけるまで、涙は我慢だ。こんな僕のことを、応援して信頼してくれたあの人たちのために

も、絶対に犯人を突き止めてみせる…！

僕はぐつと足に力を入れて、エレベーターが辿り着く先を待った。

鉄の扉が重たい音を立ててゆっくりと開く。

僕はぎゅつと目をつぶって気持ちを引き締めた。そして、目を開ける。

眼前に広がる壮大な裁判場の景色に少し見慣れてきている自分を感じて、肩がぐつと強ばる。

もうこんな悲劇は生み出してはいけないんだ。そのために僕は今回の事件を解決に導いてみせる…！

こうして僕の、3回目の裁判が幕を開けた。

非日常編2

? ? ?

「それじゃあ、改めてルール確認だよ。今回の裁判では、片原サンと切ヶ谷サンを殺害したクロを見つけてね。議論の後、投票でクロを決めて、合つてたらクロ1人がおしおき、間違えたらクロ以外の全員がおしおきで、クロは晴れて卒業だよ!」

「それでは、議論スタート!」

意外なことに、最初に口を開いたのは佐島くんだった。

「モノケン、最初に聞いておきたいんだけど」

「ん? 何かな?」

「君は今クロ1人がおしおきされるって言ったよね。じゃあ切ヶ谷さんと片原さんを殺したクロが別々の場合は、どっちがおしおきされるの?」

「おや、そこに気づかれてしまいましたか! 鋭いねー佐島くんは!」

モノケンがケラケラと楽しそうに笑う。

「その場合は、先に殺した方がおしおきだよ。後に殺した方はお咎めはありません!」

「へえ。そうなんだ」

佐島くんは聞いておきながらさして興味もなさそうに頷いた。

「へー、先に殺した方は損だね、かわいそーに」

根焼くんがからかうように言う。

「でも同じタイミングで2人も殺すなんて偶然、あるかなあ…」

月詠くんは物憂げな表情で、口元に手を当てて考え込んでいる。

「そのルールを知らなかったら、2人目を殺した人は処刑されると思うだろうからね…」

僕は彼の意見に同意した。

「先に殺されたのがどっちかわからないんだから、今は考えたところでどうしようもないワ」

揚羽くんがげんなりとした顔で言う。

「とりあえず片方の事件だけを考えてみるのはどうだ、とメアリーが言っているぞ」

「そうだね。そうしようか」

ステイヴンくんの案に乗り、片原さんと切ヶ谷さんの内のどちらかの事件を考えることにした。

「死体発見アナウンスが鳴った順で、片原さんから考えていこうか」

みんなが頷くのを確認して、僕は話し始めた。

「片原さんは今のところ、誰かに呼び出されて殺された確率が高いんだ。だから、とりあえず停電前みんなのアリバイを教えて欲しいな」

「まず、僕と揚羽くん、切ヶ谷さんは、なくなった薙刀を体育館で探してたよ」

「そう、途中で小町がトイレに行った時に停電になったワ…」

揚羽くんが僕に続けて説明する。

「時計回りで次はくぐはらです!」

芥原さんが手を挙げる。

「くぐはらは、管理棟の2階のパトロールをしていました!」

「くぐはらはパトロール中に、マントを持ったステイヴンさんに会ったですよ!」

「ああ。僕達も芥生君に会ったぞ」

「ステイヴンくんはそこで何をしてたの?」

「昨日の戦闘訓練でマントが少々汚れてしまっただけ。ジョンが汚れる男の恥だぜと言うから、家庭科室に行って洗濯しようと思ったんだ」

ああ、洗濯中は僕達は一人で家庭科室にいたぞ」

「わかった、ありがとう」

「次は僕だね」

佐島くんが小さく頷いて話し始める。

「僕は掃気さんと一緒に、切ヶ谷さんの薙刀探しを手伝っていたよ。僕達は別館にいたんだ。芥原さんとそこで会ったんだけど、あれはパトロールの後だったのかな?」

「そうです！くぐはらは2階のパトロールの後、すぐに別館のくぐはらの研究教室に行きました！」

「別館で芥原さんと会った直後に、停電が起こったんだ」

「次はまた僕達だな」

ステイヴンくんが1つ咳払いをする。

「朝イチにマントの洗濯が終わったあと、僕達はそれを干すために一旦寄宿舍に戻ったんだ」

「わ、私と妄崎さんがステイヴンさんに寄宿舍で会いました…！」

「Sure. 二人の姿もすっかりと見たぞ。その後は天気良かったから、うっかり寄宿舍で眠ってしまっていたんだ…」

その話を聞いて、ん〜、と妄崎さんが首を傾げた。

「お姉さん達が小町ちゃん部屋の調べてる時にドアが開く音がしたんだけど、あれはステイヴンくんじゃないの〜？」

「む、それは違うな。僕達はぐっすり眠っていたぞ。そんな音は聞いていないし、君の聞き間違いじゃないのか？」

「そっかそっか〜」

妄崎さんは引き下がる様子もなくあっさりと言いたけど、寄宿舍にいた時のステイヴンくんのアリバイは少し怪しいな…。

「そのまま話すけど、私は寄宿舍で幸ちゃんと一緒に薙刀を探してたよ。探し終わった後、管理棟に行ってみたら幸ちゃんが死体を発見した訳だけど」

「は、はい。それで合ってます…！」

荒川さんもこくこくと頷く。

「じゃあ荒川さんのアリバイは大丈夫ってことで、月詠くん」

「おにーさんはむのくんと娯楽室で一緒にゲームをしたよ。途中でゲームの光と大きい音で気分が悪くなっちゃって、停電の10分ぐらい前に自分の研究教室に戻って、そこで休んでいたんだ」

「でも、おにーさんの研究教室からもちちゃんのいた美術室までは結構距離があるし、犯行は難しいんじゃないかなって思うよ…」

「ボクはさつき月詠が言った通りゲーセ…娯楽室にいたよ」

根焼くんが後を追うように話し出す。

「月詠がいなくなったあとボクはゲームしてて、そのまま停電になっただな」

「…もこは…おにいちやんと、なぎなた…さがしてた…」

「うん。これで全員確認し終わったね」

ほとんどの人が2人か3人で行動していたから、アリバイがない人が少ないな…。停電直前のアリバイがないのは、ステイヴンくん、月詠くん、根焼くんと…トイレに行っていた切ヶ谷さんだ。

「この中に、アリバイのない人が美術室に行つたのを見てる人はいないよね…?」

全員が首を横に振る。今の状況では、誰が片原さんと待ち合わせをしていたのかもわからないな…。

議論が膠着した状態の中、佐島くんが声を上げた。

「そもそも、これって切ヶ谷さんの薙刀を盗まないと殺害できない訳でしょ?」

「…そうだね。まずは切ヶ谷さんの薙刀を盗んだ上で、その薙刀を持って美術室まで行かなきゃいけないんだ」

「薙刀を盗めそうな人って実は限られてるよね。それを誰にもバレないように持っていかなきゃなんだからさ」

佐島くんは更に続ける。根焼くんがそれを聞いて小さく笑った。

「薙刀を堂々と持ち歩けるのなんて、本人ぐらいしかいないよねー。盗まれたフリしてたんじゃないの?」

彼は揶揄するように言った。

「…あんだ、小町がそんなことすると思ってるワケ?」

揚羽くんが一段と低い声で彼を威圧する。

「ははっ、どうかなー?」

根焼くんはにやにやと笑っている。揚羽くんはバカバカしいとも言おうように呆れた表情をした。

僕も切ヶ谷さんが薙刀を盗まれた演技をして片原さんを殺すなんて、とてもするとは思えない。

じゃあ、他に薙刀を盗める人はいないのか?

「……」

考えろ。考えろ。薙刀を誰にもバレずに盗む方法を…。

「…そうか!」

僕は1つの答えにたどり着いた。

「…薙刀を、誰の目にも触れずに持って行けばいいんだ」

「ど、どういうことですか?」

荒川さんが控えめに尋ねてくる。

「薙刀を、何かで覆えばいいんだよ。誰かに見つかったてもそれが刀だとわからないように……」

「覆うって…例えば、長い布とかで、ってこと?それって…」

揚羽くんは何かに気づいたようにそこで言葉を止めた。

「さすがに多少は不恰好にはなると思うけど…普通に薙刀を持っているよりは怪しく見えないと思うんだ。肩にもたれかけるようにして担いで布で覆えばね」

薙刀を覆えるような、大きくて長い布。それを不自然に見せないように今日持っていたのは一人しかない。

それは――

「ステイヴンくん。君なら、薙刀をそのマントで覆って運ぶことができるよね…?」

「なっ…!僕達を疑っているのか!」

「あっ!」

芥原さんが突然何かを思い出したように声を上げる。

「くぐはらがステイヴンさんと会った時、マントを肩にひっかけてました!」

「……ッ!」

「ステイヴンくんはその後家庭科室で洗濯が終わるのを1人で待ってたって言っていたよね?その間に下の階に行って、先に美術室で待たせていた片原さんに会うことは十分可能はずだ…!」

「…君は、僕達が、そんなことを本気ですると思ってるのか…?」

ステイヴンくんのその言葉を聞いて、胸がぎゅつと苦しくなる。でも、僕がここで引き下がったら真実には辿り着けない！

「していないなら納得できる証拠を見せてよ、ステイヴンくん！僕だって本当は君がそんなことするはずないと思う、だから君を、信じたいんだ……！」

「……………」

ステイヴンくんは表情を歪めて、そのまま俯いた。

「…僕達は……………」

「…………ぼくたち、は…」

「…まだ反論の余地はあるはずよ、ステイヴン」

「まずいよ、ここままだとやられちゃう！」

「どうしてもっとうまくやらないんだ、この若造が！」

ステイヴンくんはそのまま顔を上げずに…小声でぶつぶつと呟き始めた。

その口調や表情、声のトーンはまるで別人がしゃべっているかのようになっていると変わる。

「まずは落ち着くんだ、ステイヴン」

「Oops！痛いところを突かれちゃってるヨ！どうするノ？」

「ねえねえ、ジャツクの意見も聞いてよく！」

「僕も！」

「私も！」

「ステイヴン！」

「ニステイヴン!!!」

「……………るさい、」

「…………うるさいうるさいうるさいうるさいうるさいうるさいッ!!!!!!」

「これ以上”俺”に指図するなあッッ!!!!!!」

非日常編3

? ? ?

「Let's start:始めようぜ、議論を」

ステイーヴンくん——いや、ジョンくんが挑発的にくいっと手招きをする。

「:君が出てきたってことは、さっきの僕の推理は合ってるってことでいいのかな」

僕は遠慮がちに彼に尋ねてみる。

「あー:オレが薙刀を盗んでスリッパの嬢ちゃんと待ち合わせしてたって話か?」

「うん:そうだよ」

「名推理だったなア:アレにはあのメアリーもビビってたよ。H A H A, Thanks a lot!お陰でオレの計画が台無しだ」

「君は随分嫌味っぽいんだね。ステイーヴンさんとは大違いだ」

佐島くんがそう言うと、ジョンくんはまた不敵に笑う。

「ハッ、アイツは脳なしのバカだからな」

「そう言えば:日本には能ある鷹は爪を隠すってことわざがあるんだったか?まさに今の状況に合ってるな。なア、アンタはどう思う?」

「……」

ジョンくんの饒舌なしゃべりに乗せられていてはダメだ。彼が片原さん呼び出して殺害したのはほぼ間違いないし、ここは一旦引いた方がいいなろう…。

それに、ジョンくんの犯行がほぼ確定になった今、情報を全て開示するのはまずいかもしれない。彼にも隠していることがきつとまだあるはずだ。

時には:”嘘”をつくことも必要になってくるだろう。若干卑怯な手のようにも思えるけど:真実を暴くためのひとつの手段だと考

えよう。

「…切ヶ谷さんの事件についても考えておこう。彼女は1階で毒矢で襲われたあと、研究教室で刺されて殺されたんだ」

「それは相当苦しいし痛かっただろうね…」

「……」

月詠くんや荒川さんの表情が曇る。

「切ヶ谷さんも君が殺したんじゃないの？」

佐島くんは単刀直入にジョンくんに尋ねた。

「キリガヤ…ああ、あの和服の嬢ちゃんのことか？」

「うん。君なら寄宿舎をこっそり抜け出て殺害することはできるよね？」

ジョンくんは追い詰められているにも関わらず、相変わらずにややと笑っている。

「俺は小町君を殺してない！って」ステイヴイーが”言ってるぜ”

それは、ステイヴンくんが完全に無数の人格の中の一部に紛れ込んでしまったような言葉だった。いや、実際にそうなんだろう…。

「だってさ。どうするの？宗形くん」

佐島くんが唐突に僕に話を振ってくる。

「2人の死亡推定時刻がわからないからなんとも言えないけど…片原さんを殺した後なら可能だと思う」

「そういうえば、なんでこむぎくんは小町ちゃんが危険な目に遭ってるってわかったの？」

妄崎さんが何気なく聞いてくる。

「それは……」

いや、今この不確定な状態で、死亡時刻に関わる決定的な情報を伝えるのは良くないかもしれない…。これはきつと、相手を論破する鍵にもなりうる。

「…揚羽くんが、切ヶ谷さんの帰りが遅いから見に行こうって言ったんだ。そのすぐ後に停電が起こったから、彼女を1人にしておくのは危ないと思って」

「…?」

揚羽くんが怪訝そうな顔をして僕を見る。頼む、乗ってくれ…!

「…そうよ。あたしが小町の様子を見に行こうって言ったワ」

揚羽くんは話を合わせてくれた。

「ふんふん、なるほどね〜」

「ちなみに、毒矢はあたしの研究教室にあったものよ。あたしは朝から体育館にいたから使えないけどね」

揚羽くんがその後もうまく話を逸らしてくれる。心の中でひっそりと感謝した。

「毒矢は持つてて不自然じゃないの?」

と根焼くんが尋ねてくる。

「それもまた、ジョンくんならマントで隠してればできるんじゃないかな…」

月詠くんが考える仕草をしながらそう言う。

「H A H A : : ヒール役は世知辛いねエ」

ジョンくんは大袈裟な仕草でため息をつく。

「それにしても…ステイヴァーが言ってた程おもしろくねえなア、アンタら」

「オレはもつと白熱したデイベートができるモンだと思ってたんだが…」

「議論を白熱させたいなら、君が情報を開示したらどうなの?」

佐島くんがそう言うのと、ジョンくんは笑い出した。

「Nice idea! 中々面白いこと言うな、アンタ…そうだな、じゃあ教えてやるよ。いいよな? ステイヴァー」

「…はア? ハッ、お前の意見なんてオレが聞くと思っただか?」

ジョンくんは1人で誰かと会話しているようだ。おそらく、それがステイヴァンくんなんだろう…。

「ステイヴァーはやめろと言ってきてるが…アンタらは聞きたいんだろ?」

「うんうん、ジョンくん教えてよ〜」

妄崎さんが楽しそうに彼に向かって手を合わせる。

「OK…教えてやるよ」

ジョンくんが演技がかった仕草で咳払いをする。

「スリッパの嬢ちゃんを殺したのも、和服の嬢ちゃんを毒矢で襲ったのも…オレ達だよ」

「え…!？」

「そこまで言っちゃっていいんだ…」

「もうコイツがクロで終わりで良くない?」

みんなが一気にざわめき出す。ジョンくんはそんな衝撃の一言を発した後も、にやにやとみんなの様子を眺めている。

「……」

そこまで正直に言われると、何か裏があるようにしか思えない…。片原さんを殺したというのも、切ヶ谷さんを毒矢で襲ったというのも、そのまま彼女を研究教室で殺害したのも…全てが怪しく思われてきた。

「へえ。そういう揺さぶりのかけ方なんだね、君は」

この状況の中で、ただ1人、佐島くんだけが平然としたままだった。

「敢えて真実を話すことで、嘘のように思わせる…なかなかいいアイデアだと思うよ」

それを聞いても、ジョンくんの表情は全く変わらない。

「Ah、アンタとはいい酒が飲めそうだ…あ、未成年はまだ飲めないんだっただか?早く自由の国アメリカに戻りたいね」

「お酒は大人になってからですよ!」

芥原さんがぴつと指をさして彼を注意する。

「話が逸れてるワ。犯人がせっかく自供してるんだし、活かせばいいじゃない」

揚羽くんが主導権を奪い返すように言う。

切ヶ谷さんを毒矢で襲った後、ジョンくんが追いかけたとして…現場に残っているのは、彼女を殺害した凶器の謎だ。

「ジョンくんは、教室に毒矢を置いて切ヶ谷さんを追いかけた…そこ

までは確かなんだけど、本当にジョンくんが彼女も殺したのかはわからない…」

ジョンくんは首を横に振る。

「和服の嬢ちゃんは何れも損ねたぜ。どっちが先に死んだかわからない今、オレをクロと決めつけるのはアンタらにとっては危険だろ？」

…そうか、だからその余裕なのか？僕達がまだ切ヶ谷さんを殺したクロを断定することができていないから。つまり彼の余裕を崩すことができれば、真実は近い…。

「…だったら、暴くしかない。君のその仮面を」

「H A H A…いい目だ。ようやくオレを痺れさせてくれるのか？待ちくたびれたぜ、全く」

きつと彼がああ状況で使えたのは、切ヶ谷さんの研究教室にあった薙刀だけだ。でも、あそこに置いてあった薙刀はどれもすべて綺麗なままだった…。

「いや、これは割と簡単でしょ？」

根焼くんが僕の思考を遮るように声を上げる。

「刃物についた血なんて、拭き取ればいいじゃん」

「拭き取る道具は、さっきから出てきてるよね？」

佐島くんが彼の後に続ける。

「そのマント。それで薙刀に付いた血を拭きとれるはずだよ」

「……！」

佐島くんと根焼くんの言う通りだ。マントで拭き取れば、付いた血を元通りの状態にして薙刀を戻しておくことができる。その上、それを使えば返り血を防ぐこともできるだろう。

つまり今、彼のマントの裏側には…切ヶ谷さんの血液がついているはずだ。

僕は指摘された途端に黙り込んだジョンくんに、声をかける。

「ジョンくん…そのマントの裏側を見せてよ」

「……Shit」

ジョンくんはその余裕の笑みを初めて崩した。

顔を歪めて舌打ちをして…渋々とマントを外し、僕達に裏側を向け

入観だ。死体についての情報がない今、それ以外の刃物で殺されることだってありえるはずだ。

「……………あ」

僕はそこで、最悪の可能性に気づいてしまった。

薙刀以外の刃物を常に持っていて、かつ切ヶ谷さんに接触できた人物が、あんなに近くにいたじゃないか。

「……………揚羽、くん」

「…あたしが、何か？」

揚羽くんは平然とした顔だ。

「その、日本刀…」

「へー！揚羽、お前が切ヶ谷さんを殺したんだ！」

根焼くんが、僕が話すより早くそう言った。

「…なんのことを言ってるのか、わからないワね」

「相棒のフリして黙ってるつもりだったとか、いやー、悪いヤツだなア、お前」

「ちよつと、根焼くん…！」

「何？宗形の代わりに問い詰めてあげてんじやん、お前も嫌でしょ、裏切り者と話すのなんか」

「…あたしはあんたと話をする気はないワ」

「揚羽くん…！」

僕は必死に声を上げた。

「君のその日本刀を見せてよ。君が殺したなら…切ヶ谷さんの血がそこについてるはずだ。でも、そんなことある訳ないよね…?!?その日本刀を抜いて、僕達に見せてよ!!」

「……………」

揚羽くんは目をゆつくりと閉じ、俯いて無言のまま動こうとしない。

「ねえ、何隠してるの?…」

再び根焼くんが嘲笑うように声をかける。

「早く見せなって。宗形だけじゃない、みんなが見たがってんじやん」

「……」

「ねえ〜」

揚羽くんは再び目を開けた。今までの彼とは違う。目線を向けられていない僕ですら、背筋がぞくつとするような瞳。

「うるせえ、殺すぞ」

「……………」

根焼くんはそれ以上口を開かなくなった。じつと観察するように揚羽くんを睨みつける。

「……………ここまで来て、隠しきれぬ訳もないワね」

そう1つため息をつくとき、揚羽くんは日本刀を腰元からするりと抜いた。

それは——乾ききっていない、生々しい血の色で彩られていた。

「つ、揚羽、くん……………」

「そうよ…あたしが、小町を殺したワ」

日本刀を鞘に仕舞いながら、彼は静かにそう言った。

「…あたしが見た時にはもう手遅れだったって、あんたに言ったわよね」

「……………うん」

捜査の時、揚羽くんは確かにそう言っていた。

「実際、手遅れだったのよ……………呼吸はあったけど、もう助からないほど毒が回った。小町は必死に息をして、苦しんでたワ…」

「このまま放置していても、小町は苦しんだままいずれ死んでしまう。だからあたしは…あの子の胸に、この日本刀を刺した」

「…あの子を、救うために……………」

「……………」

裁判場は何度目かの沈黙に包まれた。

「…さて、どうするんだ？」

再び口を開いたのは、ジョンくんだった。

「今の状況では、日本刀の坊ちゃんとおレ達、どちらがクロになるかは

わからないぜ？」

「……………」

「このまま裁判が終われば、全員道連れ……………、ッ!?」

突然、ジョンくんが苦しそうに頭を抱えた。

「……………ふ、ぎける、な……………」

ジョンくんの口から、誰かの声が聞こえる。

それは、聞き覚えのある声色だ。

「…そんな結末…許しちゃ、いけない……………」

「…………邪魔するなよ、ステイーヴイー」

ジョンくんは顔をしかめる。

「っ、邪魔したのは、君だぞ、ジョン……………」

「オレは…お前を守るために前に出てきたんだ」

「…………確かに、君の助けには今まで何度も助けられた」

「…でも、もう俺はいつまでもガキのままじゃない。君に守られたままやり過ぎるのは…もう終わりにしたいんだ」

「……………Shit」

ジョンくんは、最後に一つ舌打ちをした。

「……………ほんつとにどうしようもないクソガキだよ、お前は」

「…ありがとう、ジョン」

再び顔を上げたのは——ステイーヴンくんだった。

「すまなかった、みんな。俺が人格達をまとめられなかったせいだ」

「ステイーヴン、くん……………」

「宗形くん。この状況を打破できるのは君しかない。わかっているだろう?」

「……………うん」

ステイーヴンくんは小さく笑った。

「最後に…」僕達”との勝負に、応じてくれるな?」

「…うん」

「容赦はしないで、宗形こむぎ。君の推理…僕達が撃ち抜いてみせる」

非日常編4

? ? ?

??? 「君に僕達を倒せるか？」

??? 「確かに俺は桃君を殺した」

??? 「オレは、和服の嬢ちゃんを毒矢で襲った」

??? 「君達に2人の死亡時刻は分からない」

??? 「つまりアンタらは、どっちがクロか断定できない……！」

??? 「“僕達”に納得できる証拠を見せてみろ!!!」

◎ 電話

△ の

□ から

? 切ヶ谷

【切ヶ谷からの電話】

BR EAK!!!

? ? ?

「死亡時刻の前後は、わかるんだ」

「……どうしてだ？」

「切ヶ谷さんが、停電前に僕達にかけていた電話……あの時彼女はまだ生きていた。つまり、君は片原さんを殺した後に切ヶ谷さんを毒矢で襲い、その後揚羽くんが切ヶ谷さんを殺害したんだ」

「つまり、先に殺したのはスティーヴンくん、君だよ……!!!」

「……………ッ」

スティーヴンくんは、がくりと膝をついた。

「はいはい！議論終了だよ！」

それと時を同じくして、モノケンが裁判の終わりを告げた。

「ここから投票に移りまーす！一人一人クロだと思う人に投票してね！あ、ちなみに投票を放棄した場合は死ぬからね」
モノケンがペラペラと喋り出す。

「それでは、投票スタート！」

投票先を選んでください

▷ 揚羽鳳玄

▷ 荒川幸

▷ 陰崎ひめか

▷ 笑至贄

▷ 片原桃

▷ 切ヶ谷小町

▷ 芥原芥生

▷ 佐島俊雄

▶ スティーヴン・J・ハリス

▷ 掃気喪恋

▷ 月詠澄輝

▷ 照翠法典

▷ 根焼夢乃

▷ 野々熊ひろ

▷ 宗形こむぎ

▷ 妄崎しなぐ

僕は、スティーヴンくんに票を入れた。

「それじゃ、投票結果を発表するよー！」

「さてさて、投票多数によってクロに選ばれたのはスティーヴンくんでしたー！さあ、ワクワクドキドキの結果発表だよー！」

「今回、片原サンを殺害したクロは…」

上からモニターが現れ、みんなのドット絵がくるくると回り、

ステイヴンくんのところまで止まった。

「超高校級の外交官」ステイヴン・J・ハリスくんでしたー！おめでとうございまーす！」

モノケンの威勢のいい声と共に、天井からカラフルな無数の紙吹雪が舞い降りてきた。

？ ？ ？

「……………」

「……………」

誰も言葉を発することができない。

「ステイヴンくん…君はどうして2人を殺そうとしたの…？」

僕はその沈黙を破って、彼に尋ねた。彼は静かに顔を上げる。

「…情けない話だが、聞いてもらえるだろうか？」

「うん」

「コロシアイ生活の中で、僕は人格たちからずっとこんな話を聞いていた。

『次に殺されるのはお前かもしれない』『早くここから脱出しろ』

…と」

「僕達…いや、俺は愚かにもその助言に従ってしまったんだ。祖国を守るのは俺の役目だと、信じ込んで…外に出るために、小町君に罪をなすりつけようと薙刀を盗み、『親友の君にだけ話したいことがある』と桃君を呼び出して…殺した」

「その後、人格達の騒ぐ声で俺は意識を失った。次に意識を取り戻した時、小町君が死んでいた…。ジョンはオレに従えば全てうまくいくと言った。だから俺はあの裁判の時、逃げ出してジョンにすがってしまっただけ…」

「——全ては、弱い俺のせいだ」

ステイヴンくんは、そこで話を一旦切った。

「…凰玄君」

「……………何かしら」

2人が初めて真正面から向かい合う。ステイヴンくんは一瞬逡巡の表情を見せた後、困ったように眉根を下げて笑った。

「ありがとう。小町君を苦しめずに眠らせてくれて」

「……………」

揚羽くんは顔を歪ませる。そして、ぽろりと言葉を零した。

「…………あたしは、あんたに感謝される権利はない」

「…………」

「あたしは何がどうであれ小町を殺したのよ。本来ならあたしも罰されるべき存在…そうでしょ?」

「…ああ、すまない」

2人の会話は消化不良のまま、そこで終わった。

「宗形くん。君にもお礼を言いたい」

「ステイヴンくん…………」

きつと見るに堪えない顔をしている僕を見つめて、そんな顔をするなどでも言いたげに、彼は少し口角を上げた。

「君は真実を暴くことを最後まで諦めないでいてくれた。それを見ていたお陰で、俺もジョンに助けを求めず、初めて自分の力だけで足掻いてみようと思えたんだ」

彼は再び視線を床に落として、小さく呟く。

「君は…こんな情けない俺のことも、ずっと信じてくれていたな」

「信じてたよ…だって、ステイヴンくんは仲間だろう!？」

「…………」

ステイヴンくんはそこで初めて堪えきれずに、ぼろぼろと大粒の涙を零した。

「ステイヴンくんは僕達と一緒に、辛いことも、悲しいことも乗り越えてきたじゃないか!」

「ああ…君と手を取り合って戦う未来も確かにあったはずなのに。俺が、それを壊してしまったんだな」

ステイヴンくんは固く握った自分の拳を見つめる。

「俺はどうして、君たちを信じ抜くことができなかつたんだろう…………」

「……………」

ステイーヴンくんはスーツの袖で、目をぐいっと擦った。

「俺には、もうここに在る資格はない。だが…僕達からの最後の言葉ぐらい、受け取ってくれないか？」

「……………うん」

この場にいる全員が強く頷き返す。

「僕達の祖国の話しよう。アメリカという国家は、多種多様な人々が手を取り合って暮らしている。

光清学園——ここも、小さな国家の縮図だと僕達は思う。いろんなパースナリティの人々が過ごしていて、もちろん、衝突もある。でも、君達はそれを乗り越えて、手と手を取り合って…困難に立ち向かうことが出来る」

「衝突を恐れるな。ぶつかった先に、未来がきつと待っている。自分の運命を変えられるのは…自分だけだ。君の行動で、世界は変わる。

それを、忘れないでくれ。僕達から言えるのは、そのぐらいだ」

「…終わりにしよう。ヒーロー気取りの弱虫の出番は、もうどこにもない」

「ふむ、準備ができたみたいだねー！」

モノケンが鷹揚に頷く。

ステイーヴンくんはその言葉でまっすぐ前を向いて…最後に僕達に向けて、にっと白い歯を出して笑って見せた。

それは——あの2人の少女を、彷彿とさせるような笑顔だった。

「それでは、張り切っていきましょうっ、おしおきタイム！」

モノケンがボタンを叩いた。

▼ステイーヴンくんがクロに決まりました。おしおきを開始します。

ステイーヴンくんは、いかにもアメコミに出てきそうな高層ビルの

立ち並ぶ街の中央に立っていた。手にはあの、愛用の銃を持っている。

彼が何かに気づいたように素早く銃を構えると、ビルの陰から突然現れたたくさんの小さなモノケン達が、薙刀や日本刀など、様々な武器を持ってステイヴンくんを襲いかかってきた……！

ステイヴンくんはそれら全てを正確に撃ち抜いていく。しかし、小さなモノケン達はいくら倒しても、次から次へと現れてくる……。

そして、背後から音もなく近寄ってきたモノケンのうちの1匹が、手にしていた棍棒で彼の頭を思い切り殴った。ゴン、と鈍い音が響く。

その衝撃に彼はふらつとバランスを崩してよろけてしまい、その間にも敵は容赦なく彼に迫る……！！

——その時、SATのような格好をした大柄なモノケン達が一糸乱れぬ動きでステイヴンくんの元へ駆けつけてきた。

これできつと彼は助かる……！ステイヴンくんの表情にも微かに安堵の表情が浮かんだ瞬間。

先頭にいた大柄なモノケンが、ステイヴンくんの額を撃ち抜いた。

それに続きモノケン達は、構えた機関銃をステイヴンくんに向けて一斉掃射した。ステイヴンくんの身体に次々と穴が空き、その一つ一つから鮮やかな血が噴き出す。

しばらくして、蜂の巣状態になって血溜まりの中に倒れたステイヴンくんの遺体の元に、1枚の黄ばんだ紙が落ちてくる。それは、指名手配のポスター。

そう、SATのモノケン達は、指名手配犯のイカれた精神病患者——ステイヴン・J・ハリスを殺しに來ただけだったのだ！

【THE・END】

「……………」

スティーヴンくんの存在は。僕達の仲間の存在は。こうして呆気なく、否定された。

? ? ?

学級裁判とスティーヴンくんのおしおきを終えた僕達は、校舎に戻るため、エレベーターに向かおうとしていた。

こうするのが最善の結末だったとわかっていても、あまりにも苦しい。

スティーヴンくんの抱えていた不安や弱さだって、ここにいるみんなが、多かれ少なかれ心の中に持っているものだ。そう思うと、余計に胸が締め付けられるようだった。

互いに顔も合わせず、無言のままエレベーターに乗り込もうとした僕達に、モノケンが声をかけてきた。

「あーそうそう、言い忘れてただけだよ」

「今回の事件では2人死んじゃったけど、正直あれはボクにとっても予定外だったんだー。だから、無事に裁判を乗りきったオマエラに特別ボーナスをあげるよ」

何が無事にだ、と思ってしまうけど、今は話を聞くしかない…。

「特別ボーナス?」

「出血大サービスだよ。刺殺だけに、なんつって」

その一言で、一気に場の不穏な空気が戻ってくる。こんな不愉快にさせられるんだったら、サービスだとしても早く話を終わらせてしまいたい。

「…それで、それって何なの?」

モノケンはどこからか取り出したあの分厚い本を掲げて、僕達に見

せびらかした。

「この黄泉がえりの書を使って：誰か一人を、蘇らせてあげるよ」

「……！」

一瞬場が色めきたつ。

「ただし、」

しかし、モノケンの言葉には続きがあった。

「ここにある7枚のカード：……ここから生き返る人を、引いてもらうよ。別にリスクが怖かったら、やめてもいいけどねー」

モノケンは7枚の、トランプぐらいのサイズの黒いカードを取り出して言った。

それはつまり：黒幕側の内通者だと言われていた照翠くんや、理由があつたとはいえ人を殺してしまったあの2人にも、生き返る可能性があるということだ。

「誰がカードを引くかは、オマエラが決めていいよー。でも早く決めないでボクの気が変わっちゃうかもね！」

これがいい知らせなのかどうかはともかくとして、本当にモノケンは気が変わって、カード没収なんてことになりかねない。僕達は相談を始めざるを得なかった。

「1回死んだ人を生き返らせるなんて、生命へのいい冒瀆だね……まあ、僕はやってみる価値はあると思うよ」

「別にそこまで生き返らせた奴はいないけど、面白そうだしやればいいんじゃない？成功にはリスクが伴うもんでしょ」

佐島くと根焼くんは真剣味の薄れた、いつもと変わらないような態度だ。

他のみんなは何も言わない……。決めかねている人もいれば、敢えて黙っている人もいるのだろう。

「宗形さん。君がカードを引いたらどうかな？」

佐島くんは僕に言ってきた。

「ぼ、僕が……でも、幸運の荒川さんとかがやった方がいいんじゃない……」

「だって、今までクロを追い詰めてきたのは宗形さんでしょ？」

「……」

その何気ない言葉が胸に突き刺さる。笑至くん、陰崎さん、スティーヴンくんは、そうするしかなかったとはいえ、僕が処刑への引導を渡したも同然だ。

「………わかった。僕が引くよ」

僕は決意を固めた。これは、もう一度彼らと一緒にこのコロシアイに立ち向かうことができるチャンスだ。たとえリスクが伴おうとも、やってみるしかない……！

「それじゃ、宗形クン。この中からカードを引いてねー」
「………」

僕は、7枚のカードのちようど真ん中を引いた。

カードをひっくり返すと、そこに書かれていたのは――

”笑至贄”という名前だった。

「………笑至、くん……」

僕達が信じきれずに、殺してしまった彼が、再び生き返る。でも、そんな都合のいい話があるのか……？

喜びと共に、複雑な感情と……僕が恋した、彼女はもう生き返らないという事実を突きつけられる。

後ろを振り返ることはできなかった。そこにいる、揚羽くんの顔を見るのが怖かった。

「黄泉がえりの書を使う相手は笑至クンに決まりました！じゃ、黄泉がえりの儀式なんかはこっちでやっつくからオマエラは校舎に戻ってていいよー」

「………」

僕達はのろのろとした動きでエレベーターに乗り込んだ。

もちろん、今の時点では本当に笑至くんが生き返るかは分からない。い。

それでも……彼をもう一度信じてみたい。その気持ちから、僕はただ、すべてがうまくいくことを祈るばかりだった。

……祈ることしか、今の僕にはできなかった。